
jokers

シルバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

jokers

【Nコード】

N4886H

【作者名】

シルバー

【あらすじ】

ポケモンだけが暮らす世界に存在する何でも屋、jokers。その何でも屋に所属するバクフーンの大剣使いカイルの物語。

依頼 1：現る大剣使い（前書き）

初投稿なんで緊張します（-_-;）

こんな小説で良ければ読んでみて下さい！

依頼1：現る大剣使い

「動くな！動いたら撃ち殺すぞ！！」

右手にボウガンを持ったオコリザルが大声でそう怒鳴る。

「兄貴、おまわりが来る前に早くずらかりましょうよ」

とオコリザルの近くにいたゴリキーが言う。

「馬鹿、まだ充分な金を奪ってないだろうが！少し待て」

と受付に金を詰めさせているチャーレムが言った。

いま、彼等は銀行にいる。まさに銀行強盗の真つ最中なのである。

ちなみにまだ始めて五分とたっていないため、警察は来ていない。

ちよつと事件に巻き込まれた不運な客達は不安そうに事の成り行きを見守っている。

「まだなのかチャーレム？」

とリーダーであるオコリザルがチャーレムに聞いた。

だが、チャーレムは急いで金を詰めさせるのに必死で、オコリザルの言葉を聞いていない。

チャーレムの手にあるボウガンは下に向けられているため、受付を急かすのに全く役に立っていないようだ。

その時、チャーレムがいきなりその場から吹き飛んだ。

「!!!!」

オコリザルがチャーレムの居た方を見ると、そこには背に大きな剣を背負ったバクフーンがいた。右手にはチャーレムが持っていたボウガンが握られている。

「悪いが依頼なんだ。大人しく気絶してもらおうか」

とそのバクフーンが言った。

「いきなり現れて何言ってるやがる！何者だ！」

と臨戦態勢に入ったオコリザルが言う。

「そうだな…… j o k e r s の大剣使いとでも言っておくか」

そう言いつつそのバクフーンは背の大剣を抜き放つ。

「何だか知らねえが邪魔だ！警察が来る前に死んでもらうぜ！」

そう言ったオコリザルがボウガンの引き金を引き、飛び出した矢が

バクフーンに唸りを上げて飛んでいく。

しかしバクフーンは大剣を突き出し、剣の腹で矢から身を守る。

次の瞬間、電光石火でオコリザルに近づいたバクフーンは剣を一閃し、オコリザルの手足の腱を切り裂いた。

「ぐぎゃっ……」

オコリザルがボウガンを手放しながら倒れる。

そして、少し離れた場所に居たゴリキーもほぼ同時に倒れた。

「いつの間に……」

苦しそうにそう言うゴリキーの腹にはボウガンの矢が刺さっていた。

「ゴリキーを斬る直前にだ」

バクフーンは大剣を鞘に収め、倒れた強盗犯達に背を向け客の一人に近づく。

「大丈夫か？お前の親父さんが心配してる。早く家に帰ってやってくれ」

バクフーンは啞然としている一匹のニドリーノにそう言った。

ニドリーノは少し間をおいて頷き、そのバクフーンに連れられて銀行を後にする。

ニドリーノと同じく啞然としている客、気絶している強盗達が取り残された銀行の外でバクフーンは背伸びをして口を開く。

「家出ニドリーノ搜索任務、完了……っ」と

依頼 1：現る大剣使い（後書き）

投稿は週1くらいでやりたいと思います。

ちなみに、

バクフーンは主人公です。理由は単に好きだから、金銀リメイクが出るからです。 評価・感想待ってます！

依頼2：疲労した2人（前書き）

ついに主要キャラ登場です

依頼2：疲労した2人

「だからそのような依頼はウチでは受け付けていません……だからそういう問題ではなくて！」

電話相手に嫌気が差したのか、乱暴に受話器を置くバンギラス。

ちょうどそのとき、彼の居る部屋のドアが開き、バクフーンが入ってくる。

「どうしたんだマティス？また戦争の依頼か？」

バクフーンが聞くと、マティスと呼ばれたバンギラスがぶっきらぼうに

「そっだ」

と返した。マティスはjokersのリーダーであり、どのような依頼でも対処をしなければならない。おかげで相当疲労が溜まっているようだ。

「jokersは戦争支援なんか引き受けないって言ってんだけどな、ったく」

とマティスが言う。jokersは依頼でも必要最低限しかポケモンを殺すことはない。無闇に殺害を目的とした依頼は扱わないことにしている。

マティスはカイルに対して向き直ると、一枚の紙を机から取り上げ、

目の前に突き出した。

「ところでだカイル。次の依頼を今すぐやってほしい」

その言葉に、カイルは愕然とする。

「おい……、こっちはたった今家出ニドリーノを連れ戻したばかりなんだぞ？少しくらい休ませてくれ！」

カイルは精一杯の反論する。さすがに休む間もなく依頼を片付けるのは肉体的にも精神的にもキツイものだ。

「大丈夫だ。ミメットと一緒にやってもらうんだからな」

マテイスはそう言うが、何が大丈夫なのが全く分からない。

「安心しろ。そんなに大変な任務じゃねえよ。お前らの実力があれば簡単に終わるさ！つてことで行ってこい」

マテイスは持っていた紙を無理矢理カイルに押し付け、手を振って送り出す。

「はあ………OK」

いくら反論しても無駄だと思ったカイルは、戻ってきたばかりの事務所をすぐに出ることとなってしまった。

カイルの目の下には寝不足と疲労でクマができていて、誰が見ても

疲れているように見える。

「クソッ……！帰って来たら絶対に給料増額してもらっからな……」

疲れた声で文句を吐き出し、事務所を一睨みしてマティスから貰った紙を見る。

「アロマシティ……ね」

目的地であるアロマシティは徒歩で行ける距離だが、出来れば他の移動手段で行きたくもなる微妙な距離だ。

カイルは歩いていくうちにミメットがいれば……とつい思ってしまっ
う。

ミメットはエスパークタイプのサーナイトなので、彼女のテレポートを
使えば瞬時にアロマシティにたどり着けるだろう。

これから合流するとはいえ、やはりそんなことを考えてしまうのは
疲れているからだ。

アロマシティまで後10キロの看板を見て、さらに萎えるカイルな
のであった。

依頼2：疲労した2人（後書き）

後書きでの改行の仕方が分かりません（泣）誰か教えて下さい！

依頼3：ヴェール平原での戦い（前書き）

いや〜改行できました。

プラネットさんに感謝です！

今回はjokersの紅一点となるミメットさんの登場です。

（b

では、ごんげん

依頼3：ヴェール平原での戦い

現在、カイルはアロマシティに向かって移動中。ヴェール平原という場所にいる。

「あと6キロくらいか？」

カイルはそう呟いた。

ヴェール平原はごく普通の平原で心地よい風が吹いており、カイルの体を休めさせてくれるだけでなく、眠気にもなんとか耐えさせている。

と、そのとき

「おいお前！持ち物全部置いていけ！」

という声とともに2体の武装したポケモンが草陰から姿を表す。

しかしカイルは驚きもせず、ただ面倒くさそうな声で

「そういうのは今度にしてくれ」

と一言言つと、立ち止まりもせず歩いていく。

「ちょっと、おま、この状況分かってんのか!？」

と慌てた声で1体が言って、カイルに飛びかかるつもりだったが、他の1体がそれを制す。

「戦うのなら2人でだ。勝手な行動を取るな」

と制したルカリオが言った。

「おっ、おう。じゃあさっさとやろうぜ」

とルカリオに制されたカイリキーが四本の剣を振り上げて言う。

その言葉と同時に2体が背を向けて歩いていくカイルに襲いかかる！

カイルは素早く大剣を抜き、対処しようとするが、そのフォーメーションの完璧さに後退を余儀なくされる。

「警戒はしてたがここまでやるとはな…」

カイルは顔をしかめながらカイリキーの四刀流を防いでいく。

攻撃を防がれたカイリキーの隙をカバーするべく、ルカリオがカイルの懐に潜り込み「はっけい」を放った。

しかしカイルも「炎のパンチ」で相殺し、「電光石火」で距離をとる。

「俺もそろそろ本気を出すかな！」

と距離を取ったカイルが大剣をしまい、腰に差していた刀に手を掛ける。

その様子を見たカイリキーが素早くカイルに近づいて攻撃しようとするが、ルカリオは何かを感じたのかその場で波動の力を集め始める。

近づいてくるカイリキーに向かってカイルはこう言い放った。

「中級剣技ノ壱・居合い！」

その言葉と同時にカイルは刀を抜き放ち、その剣速のままカイリキーの腹を討つ。

「なっ……速い……!?!」

そう言った後、カイリキーは痛みには耐えきれず気絶する。

そのとき、ルカリオの声が響いた。

「波動弾！」

ルカリオの拳から放たれたエネルギー弾は居合いを放った直後の隙だらけのカイルに命中し、カイルを吹き飛ばす。

「……………!!!!」

しかし吹き飛んだのはカイルの作り出した身代わりで、波動弾の爆煙の中から大剣を構えたカイルが飛び出してきた。

「初級剣技ノ参・連刺突！」

そう言うやいなや、カイルは凄まじい勢いで大剣を連続で突き出す。しかしルカリオは繰り出される刺突の嵐を「見切り」で避けていく。

それを見たカイルはすぐさま次の手を打つ。

「中級剣技ノ弐 - 満月斬り！」その言葉で刺突の嵐は終わり、代わりに強力な振り下ろされる剣がルカリオを襲う。

「ハアツ！！」

しかしルカリオは刃を白刃取りで受け止める。

だがやはり頑丈な大剣のためルカリオも折ることができず、剣を蹴飛ばしてから間合いを取る。

じりじりと両者が睨み合い、お互いの隙を探っているときに突然、凜とした声が響く。

「電撃波！」

突如現れた者から放たれた電撃は、防御姿勢を取ったルカリオに直撃する。

「ミメットか…」

カイルがそう言うと、ミメットと呼ばれたサーナイトが微笑む。

「2対1はさすがに分が悪い。ここは引かせてもらおう」

と言ったルカリオにミメットが再び電撃波を放つが、波動弾で相殺され、ルカリオはカイリキーを抱えて走り出す。

「いい、逃げさせな」

と、追いかけてよとしたミメットをカイルが制す。

「なんで？また襲ってくるかもしれないじゃない」

と言うミメット。だが

「大丈夫だ。次は返り討ちにするから」

と言うカイルの言葉で鞭を持った手を降ろす。

「あいつらはいったい何？」

とミメットが疑問を口にする。

「盗賊のようだが、腕は確かだった。ただ者じゃないな」

とカイルが腕組みをして答える。

「ところで、なんでお前がここに居るんだ？」

と、今度はカイルが聞くと、

「カイルが疲れてるだろうから迎えに行こうかなって思って」

とミメットが言った。

そのありがたい言葉に、カイルは安堵する。

「じゃ、行くわよ。捕まっつて」とミメットが差し出した右手をカイルが握る。

「テレポート！」

というミメットの声とともに、カイル達の姿がヴェール平原から消えた。

依頼3：ヴェール平原での戦い（後書き）

つつかれた〜

カイル

「俺なんか2日間寝てねえんだぞ」

マジかよ（笑）

カイル

「笑い事じゃねえよ！それよりお前って文章力なさすぎる。」

……………それは言っな（泣）

カイル

「次回も見てくださいよ！作者、いつ書くんだ？」

明日までには書く予定だよ。

依頼4：広場での情報収集（前書き）

評価ありがとうございます！

カイル

「質問なんかもあれば遠慮なく聞いてくれよ！」

ミメット

「今回、私の出番が少ないんだけど………」

ちゃんと活躍させるから安心しな（笑）

依頼 4：広場での情報収集

ミメットのテレポートで一氣にアロマシティまで移動できたカイル。

「今回の依頼は？」

「失踪ポケモン搜索任務よ」

カイルの質問に手早く答えるミメット。

ちなみに2人は今、街のレストランで休息兼情報整理をしている。

「ぷはあく。で、失踪者は何人だ？」

とビールを飲んだカイルが聞く。ちなみにカイルはまだハタチではない。

「えつと……7人ね」

「7人!??」

あらかじめ受け取っていた資料を見ながら答えるミメット。あまりの失踪者の数にカイルも驚く。

「モグモグ…それで犯人の情報は？」

肉料理を食べながら聞くカイル。何気に彼の近くには空の皿がいくつもある。

「えつと、3人組で、内1人は四刀流のカイリキーのようね」

四刀流のカイリキー、その言葉で平原での戦いを思い出し、顔をし

かめるカイル。

そんなカイルを見てミメットも顔をしかめる。

「最悪、平原で戦った奴らの可能性もあるわね」

「あいつらは強かったからな。気を引き締めとかないとな」

そう言うとカイルは立ち上がる。短時間の間にどうやって食べたのかわからない量の皿がテーブルに残る。

ミメットは苦笑しながら会計を終える。経費が食費のおかげで半分近く減ったのは気にしない。

「とりあえず、情報収集ね」

店を出た2人はそれぞれ逆方向に歩き出す。

「どこにいつ来ればいい？」

「ここに2時間後よ」

その言葉を聞いたカイルは、広場に向かって行った。

くアロマシティ広場く

街の中心付近にある広場。広場の中央にある噴水からは綺麗な水が吹き出している。

その広場で聞き込みをしている1人のバクフーンは、たいした情報を得られず、うんざりしていた。

「この辺りで起きている失踪事件について何か知りませんか？」

「ああ、確か剣を持ったカイルキーが絡んでるって噂だよ」

という感じで、新しい情報は全く手に入らない。

場所を変えようかとカイルが悩んでいた時、1人のザングースがそわそわしてるのを見つけた。

(普通じゃないな……)

とカイルは思い、観察してみることにした。

30分後、1人のケッキングが現れ、ザングースとなにやら少し話した後、小さなビルとビルの間に入って行く。

それを見たカイルは、尾行を開始した。あの落ち着きのないザングースと目が虚ろなケッキングには何かあると判断したのだ。

慎重に尾行すること10分。小さな三階建て廃ビルらしき建物に2人が入って行った。

中には簡単に入れそうだが、ここはミメットを呼んだ方が良いのかもしれない。

そう考えて来た道に戻ろうとしたとき、廃ビルの中から、平原で戦

ったカイリキーの大声が聞こえた。

(間違いない！)

そう思ったカイルは、廃ビルの入り口のドアを吹っ飛ばす。

その音に気付いたのである。階段を降りてくる音が聞こえる。

ちなみに廃ビルの一階は無人で、戦うには十分な広さがある。

少し待つと、階段からあのカイリキーが現れ、カイルを見て驚いている。

その隙をカイルは見逃さなかった。すぐさま電光石火で接近する。

「中級剣技ノ壱・居合い！」

の声で居合いがカイリキーに放たれる！しかし

「二度も同じ手を喰うか！」

カイリキーは抜いていた4本の剣でカイルの居合いをガードする。

「なら… 上級剣技ノ参・八相神！」

カイルが八相の構え(半身を引き、剣を顔の横に構えるもの)を行い、動きを止める。

「……来ないのか？ならこっちから行くぜ！」

カイリキーが四本の剣を構え、それぞれの剣に炎、雷、氷、闘気を宿す。

「喰らえ！カルテットフォー！」

異なる力が込められた四本の剣がカイルに襲いかかる！

しかしカイルは八相の構えの状態から半歩踏み出しながら斬撃をさ

ばいていく。

カイルはその場からほとんど動いていないにもかかわらず、傷一つ
負わずに逆にカイリキーを傷だらけにした。

「くっ…このやる…」

「終わりだ！」

最後に抜き放った大剣の腹でカイリキーの頭を殴って気絶させるカ
イル。

とりあえず一息つき、彼は警戒しながら階段を登り始めた。

依頼 4：広場での情報収集（後書き）

……眠いです

ミメット

「無理して書いてるからよ」

カイル

「ZZZZ……」

つて寝てる!？

ミメット

「任務大変なんだから、ここのくらいいいんじゃない?」

そうだなw

ミメット

「次回は私出るの?」

さあね。考え中だよ。

ミメット

「出番欲しいんだけど」

大丈夫。活躍しちゃうからね

ミメット

「あんまり期待せずに待つわ」

……期待してよ(泣)

依頼5：廃ビルでの戦い（前書き）

ミメット

「私の出番？」

もちろんあるよ

ミメット

「やった〜！」

それではどうござー！

依頼5：廃ビルでの戦い

アロマシテイの街の中に建っている小さな廃ビル。その中の1階と2階を結ぶ階段をカイルは警戒しながら登っていた。

階段の先には扉があり、外に殺気がにじみ出ていることから、カイルを始末するべく何者かが待機しているのが分かる。

だからといってここで立ち往生するわけにもいかない。覚悟を決め、カイルは部屋に飛び込んだ。

最初に目に入ったのは正面にいた構えをとっているルカリオで、カイルは防御姿勢をとろうとするが、左右から感じた殺気により大剣を抜く。

「中級剣技ノ参・竜巻！」

そう言い放つとカイルは足で床に弧を描き出し、次第に速度を上げて回転します。

カイルを挟み撃ちにした2人のニューラは、急に現れた斬撃の竜巻に対抗しきれず、竜巻に飛び込んでいく。

「ぐあああああ！」

カイルは二匹のニューラを数回切り裂いた後、大剣の腹でフルスイングしてニューラ達を壁に叩きつけた。しかし、フルスイングでできた隙をルカリオ達が見逃すはずがない。

「波動弾！」

「気合い玉！」

ルカリオと近くにいたケッキングが揃ってエネルギー弾をカイルに放つ。

「!!!!」

それに気付いたカイルは舌打ちをすると、回転の勢いそのまま大剣を放り投げ、電光石火で2つのエネルギー弾をかわした。

カイルの武装を解かれた瞬間、チャンスとばかりにザングースが飛びかかった！

「中級剣技ノ巻 - 居合い！」カイルが冷静に飛びかかってくるザングースに居合いを放ち、ザングースはそのショックで気絶する。

「やはり油断ならないやつだな」

とルカリオが構えたまま言う。

「お前らが失踪事件の黒幕だな？」

「ああそうだ！それがどうした？」

分かりきったように問うカイルに対し、ケッキングが大声で言い返す。

「我々は仲間を集めていてな。連れ去った奴らは洗脳している」

「なるほどな。なぜ仲間を集めている？」

「神の意志に従っているだけだ」

「……はあ？」

ルカリオの理解不能な言葉にカイルは呆れる。

「なるほど。どうやら熱狂的な宗教信者のようだな」
「それは違う。だが貴様にこれ以上話しても無駄だろうな。貴様はここで死ぬのだからな！」

その言葉と同時にケッキングが持っていた手斧を振りかざし、カイルに迫る！

ルカリオは少し後ろに下がり、構えをとる。

「甘いな。俺が剣だけだとも思ったか？」

そう言うとカイルは刀を収め、電光石火でケッキングに接近して右手の拳を腹に叩き込む。

「爆裂パンチ！」

カイルが放ったパンチはケッキングをルカリオの後ろの壁まで吹き飛ばし、浅くめり込ませる。

「かはっ……」

ケッキングはあまりの速さに何が起きたかわからずに気絶した。

「相当な怪力だな。まあ大剣を振るえるのだから当然か」
通常、爆裂パンチは相手を混乱させるほどの強力なパンチを放つ技であり、相手があそこまで吹き飛ばすことはない。
カイルは怪力のため、爆裂パンチでケッキングをあそこまで吹き飛ばしてしまっただ。

「これで1対1だな。」

「いいだろう。相手になつてやる。」

両者が構え、ルカリオは腰に差した半月刀に手をかける。

「ハッ！」

ルカリオは神速でカイルの目の前に移動し、半月刀を抜き放つ。

「なっ……！」

想定外だった。ルカリオが居合いを使えるとは。

カイルもなんとか反応し、かわそうと試みたがルカリオの半月刀の剣速は速く、カイルは浅く斬りつけられた。

「油断したな。俺も居合いくらい使えるに決まっているだろ？」

カイルは黙って体勢を立て直し、刀の柄に手を置く。

「おいパース、俺にもやらせろよ」

突如、ルカリオの後ろに大きな影が現れた。

「フリード、悪いがこいつは俺の獲物だ」

フリードと呼ばれたオーダイルは、つまらなそうに頭を搔く。

「どうせそいつも洗脳するんだろ？洗脳ばかりで腕が鈍ってんだよ」

「パスと呼ばれたルカリオは、しかたなくこう言った。
「分かった。手伝ってくれ」

それを聞いたフリードは、顔に笑みを浮かべる。

「さすがパス。分かってんじゃないか」

カイルはフリードを見た瞬間殺気立った。

「お前はあの時のオーダイル！」

カイルは刀に手をかけたまま、怒りを漲らせて言う。

「ほう。いつぞやのバクフーンじゃねえか」

フリードはニヤニヤしながらカイルを見る。

「俺の名はカイル！友の仇、討たせてもらう！」

カイルの殺気立った言葉を聞き、パスは首を傾げる。

「フリード、お前と顔見知りか？」

「ああ。昔戦場でこいつのダチ殺してやったんだ。」

その言葉にカイルがキレた。

「上級剣技ノ式・瞬突居合い！！」カイルが電光石火の勢いでフリードに居合いの刺突を繰り返す。

しかしカイルの刀はフリードには届かなかった。フリードは腰のナイフを抜き、カイルの刺突を余裕で止めている。

フリードはナイフを持っていない左手にもナイフを抜いて持ち、距離をとろうとしたカイルの横腹に深々とナイフを突き立てた！

「ぐっ……」

素早く距離をとり、ナイフを抜いて投げ捨てようとしたカイルの右手の動きが急に止まる。

「くっ……まさか……」

「そのまさかだ」ナイフには麻痺毒が塗られており、カイルは痺れて動けなくなり、その場に倒れ込んだ。

「さてと、さっさと運ぶぞ」

フリードがカイルに近づき、担ぎ上げようとする。

カイルが諦めかけたその時、突然カイルの大剣が動き出し、フリードに突進した！

「！！！！」

突然のことで驚いたフリードだったが、素早くナイフで大剣を弾く。

「シャドーボール！」

今度は何処からか発射された黒球がパースに向かっていった。

「波動弾！」

パースは冷静に波動弾でシャドーボールを相殺する。

すると、カイルの前に見覚えのあるポケモンが飛び降りてきた。

「ミ……メツ……ト」

「何で1人で無茶したのよカイル」

ボロボロのカイルを見て顔をしかめるミメツト。

「ほお………新手か」

「気をつける。中々の実力者だ」

フリードとパースが構える。

ミメツトもカイルにクラブの実を渡すと、腰の鞭を抜いて構える。

「それを食べて。痺れが消えるから」

カイルは言われた通りクラブの実を食べ、ミメツトの拾ってくれた大剣を構える。

「2対2か、楽しませてくれよ？」

「新手もろとも叩き潰すまでだ」

フリードが両手にナイフを構え、パースが鞘に収められている半月刀に手をかける。

「アナタ達を倒して失踪者を取り戻す！」

「チエスターの仇は討つ！！」

ミメツトが鞘を一振りし、カイルが大剣を水平に構えた。

依頼5：廃ビルでの戦い（後書き）

疲れた〜

カイル

「どうしたんだ？」

いや、4時まで補習があったからさ〜。キツいんだよね。

あ、明日は都合により投稿できない可能性があります。

カイル

「都合ってなんだよ？」

国家試験。

カイル

「バカ作者が受かるのかあ〜？」

五月蠅い。頑張ったんだから絶対受かるはず！

カイル

「明日頑張って投稿しろ！」

出来たらね。

カイル達は勝てるのでしょうか？お楽しみに！

カイル

寝るの早っ！

「ZZZ……」

依頼6：カイルの決意（前書き）

ふう。なんとか投稿できた。

カイル

「今日も投稿出来たんだな」

昨日から書いてたからね。

カイル

「試験、どうだったんだ？」

それではどうぞ！

カイル

「何？今の間は何？」

依頼 6：カイルの決意

「……………」

睨み合いの沈黙を破ったのはパースだった。神速でカイルに接近し、居合いを放つ。

「中級剣技ノ壱 - 居合い！」

カイルも居合いでパースの居合いを相殺し、そのまま攻撃に移った。

「中級剣技ノ四 - 交双閃！」

カイルの大剣が素早く動き、パースに×状に斬りつける。

パースは半月刀でなんとか防ぐが、あまりにも受けた斬撃が強すぎてバランスを崩してしまった。

「ハッ！」その際にミメットが刃の付いた鞭でパースを切り裂こうとする。

「させん！」

フリードがパースをカバーするべく滑り込み、ミメットの鞭を間一髪ナイフで受け流した。

「喰らえ！」

カイルがフリードに標的を変え、狙いを定めて大剣で斬りかかる。

しかしフリードはカイルの斬撃を全て防ぎ、口を大きく開けた。

「ハイドロポンプ！」

至近距離でフリードが放ったハイドロポンプはカイルに命中。しかしカイルはハイドロポンプに耐えながら雷を大剣に纏わせる。

「喰らえ！上級剣技ノ五・改 - 真空雷撃波！」

カイルが振り抜いた大剣から雷を宿した衝撃波が発生し、ハイドロポンプを伝わってフリードに命中、感電させる。

『ぐああああ！』

しかし悲鳴を上げたのは2人。ハイドロポンプを浴びたカイルにも感電したのだ。

直撃の分フリードのほうが雷によるダメージは大きい、カイルも至近距離でハイドロポンプを受けた上、フリードから刺されていたため両方ともすでにボロボロである。

「今だ！」

パースが苦しんでいるカイルに半月刀で斬りかかった！

「無駄よ」

ミメットが素早く鞭で半月刀を弾く。

ミメットの不規則な動きをする鞭にパースは圧倒されながらも、なんとか見切りと半月刀で防いでいく。

「こっぴなつたら……」

パースは神速で距離をとり、居合いの構えをとる。しかしミメットは構わずパースに突っ込む。

その瞬間、パースの居合いが成功し、ミメットの腹を深々と切り裂いた！

しかし切り裂かれたミメットは煙となって消える。

「身代わりか！」

すぐに気付いたパースは素早く辺りを見回した。

10メートルほど先にボロボロのフリードとカイルがいる以外にポケモンは見当たらない……

その瞬間、パースは後ろから殺気を感じたがすでに遅かった。

「シャドーウィップ」

暗黒の力の宿った鞭がパースを切り裂く。素早くパースは離れるが、体はズタズタで戦える状態ではなかった。

「悪いが一旦引かせてもらっつ」

パースはそう言い、腕に付けているブレスレッドに手を伸ばす。

ミメットが素早く鞭を振るうが、鞭が届くころにはパースの姿がすでに消えていた。

「中々やるなお前……カイルだったか？」

フリードはそう言いながら、腕のブレスレットに手を伸ばす。

「ああ。今からお前を殺す奴の名前だ！」

カイルは残った力を振り絞り、大剣を構えて言う。

「悪いがまだ俺は死ねないんでな。俺はフリード。覚えとけよカイル」

そう言つて、フリードの姿が消えた。

「……!?!?」

今まさに大剣を振り下ろそうとしたカイルは、突然フリードが消えたのに驚いた。

「……クソッ！」

カイルが悪態をつきながら床を拳で叩く。

友の仇を討てなかった。その無念さだけがカイルの心に残った。

「こつちも逃げられたわ」

ミメットが鞭をしまいながらカイルの方に歩いてくる。

ミメットには分かった。おそらく奴らのブレスレットにはテレポーターの類が仕込んであり、その力で逃げたと言うことが。

カイルは重傷を負っているが、ミメットはほぼ無傷。相手の実力を考えると運が良かったほうだろう。

「今から急いで警察を呼んでくるから。カイルは失踪者を探してみ
て」

床にうずくまるカイルにそう言うと、ミメットはテレポートで消えた。

カイルは無言で搜索を始めた。いまは話す相手もないし、なにも話したくもなかった。

探索を始めてまもなく、数人のポケモン達を発見。顔を見ると、全員失踪者だった。

見たところ外傷は無く、虚ろな目以外は目立って変な所はない。

「助けに来ました。大丈夫ですか？」

カイルが呼びかけると、1人のストライクが顔を上げた。その焦点の定まっていない目がカイルの方を向く。

ストライクの額には黒い宝石のようなものが付いており、カイルはそれに気を取られてしまう。

その時、ストライクが突然その鋭利な鎌でカイルに斬りかかった！

「！！！！」

素早く後退して斬撃をカイルはかわす。

その他の失踪者達も次々と起き上がり、カイルに襲いかかってきた！

「これがフリードが言っていた洗脳ってやつか」

カイルは大剣の腹でストライクを殴りつけて転倒させる。

『スピードスター！』

失踪者であるピクシーとエアームドが星形の光線を無数に放つ。

「クソッ！」

大剣でスピードスターを叩き落としていくカイル。すると突然頭に衝撃が走った。

「がっ……………」

後ろを振り向くと、そこには先ほど倒れたストライクが構えていた。おそらく鎌でカイルの頭を殴りつけたのだろう。

カイルはよるめきながら距離をとる。さっきの戦闘での負傷を考えると、あまり長くは保たない。

ミメットのが戻るまでに正気を失った失踪者7人の猛攻から耐えられる可能性は低い。

だがカイルの瞳から光は消えない。友の仇をついに見つけたのだ。

こんな所で果てるわけにはいかない。

カイルは大剣を低く構え、不敵な笑みをうかべると、正気を失い殺戮マシンと化して牙を剥く失踪者達に飛び込んでいった。

依頼6：カイルの決意（後書き）

ミメット

「カイルは過去に何があったの？」

後で書くつもりだよ。

ミメット

「気になるでしょ！教えてよ」

ムリ〜〜

ミメット

「シャドーボール！」

ぎゃあああ！

ミメット

「さあ吐きなさい！」

カイルは昔は傭兵だったんだよ。

ミメット

「後付け設定？」

違うから。

これ以上は言えない。

ミメット

「カイルに聞くからいいわ。」

そうきたか（汗）

依頼7：失踪者達を止める！（前書き）

今回は新キャラ登場です。

ミメット

「依頼1つにどれだけの話数使ってるのよ……」

アロマシテイ編も次回でおしまいだよ。それからは君の出番はしばらくお預けだから

ミメット

「嘘でしょ？」

ホントだけど……

ちゃんと前書きや後書きには出番あるしさー！

ミメット

「……それではどうぞ（泣）」

泣くなよ（汗）

依頼7：失踪者達を止める！

（アロマシティ警察署）

「連続失踪事件の犯人達と接触したんですよ！だからそこを調査してほしいんです！」

ミメツトが警察署の警官達に精一杯説明するが、警官達は動くのを躊躇している。

「犯人と交戦した私の仲間は重傷を負っているから手当てしないといけないし、急いで行きましょう！」

しかし警官の1人はこう言った。

「すまないが、我々はすでにこの事件から手を引いたんです。」

その言葉にミメツトは愕然とする。

「何故なんです！説明してください！」

「悪いが民間人に話すわけにはいかないんでね」

「私達はjokersで、普通の民間人ではありません！」

「jokersなら助けないとね」

「こんな可愛い娘の頼みを引き受けないなんて男じゃねえな」

突然開かれたドアから入ってきた2人組が言った。

「な……いきなり現れて何言ってるんだお前は！」

「警部。我々の勝手な行動ということにしておいてくださいよ」

2人組の1人であるフライゴンがそう言う。

「こっそりさっきの話聞いた限りじゃ、調査するのが普通じゃないっすか？」

もう1人のサイドンがさらにたたみかけた。

「2人とも私の手を掴んでください」

ミメットが差し出した手を2人は握った。

「待てお前ら！」

警部が叫んだ時にはすでにミメット達はいなくなっていた。

一方、カイルはなんとか失踪者達の猛攻に耐えていた。

しかしカイルの限界も段々と迫ってくる。

(きつと彼等を操っている仕掛けがあるはずだ！)

カイルは必死に部屋中を見回すが、それらしき仕掛けは存在しない。

その時、正面にいたユキノオーが固めた拳を突き出してきた！

なんとか大剣で拳を弾くと、ユキノオーの額の黒い宝石が視界に入る。

「もしかして！」

カイルは素早くユキノオーに接近し、素手で強引に額の宝石を剥がした。

その途端ユキノオーの目に気が戻り、その場に倒れ込む。

「ピンゴ！」

洗脳の解除方法が分かり、ニヤリとするカイルにストライクが飛びかかる。

カイルは大剣で弾こうとしたが、急に両手の力が抜ける。ここでカイルの体に限界がきてしまった。

なんとか攻撃を紙一重でかわしたが、これ以上はかわせる自信がない。

その時、部屋の扉が勢いよく開き、ミメットと2人の警官が走り込んできた。

「な…なんだこの状況は？」

サイドンは状況を飲み込めずに啞然としている。

「失踪者達が何者かの手により操られている！額の宝石を剥がせば洗脳は解ける！」

カイルが素早く状況と対処法を叫んだ。

「オーケー。こっちの2人はボクがやる。バイルはそっちよろしく」

「了解だラグ。そこのはミメットちゃんよろしく」

フライゴンのラグとサイドンのバイルは確認すると、標的に向かって走り出す。

ミメットもコクリと頷くと、失踪者達の相手を始めた。

「砂地獄！」

ラグの放った砂地獄により2人の失踪者は動きを封じられ、その隙にラグが宝石を剥がしとる。

「そりゃっ！」

バイルは強烈なタックルでピクシーとエアームドを転倒させ、力づくで押さえ込んでから額の宝石を剥ぎ取った。

「サイコキネシス！」

ミメットは残った失踪者の動きをサイコキネシスで封じ、素早く宝

石を剥がした。

「フン。たいしたことなかったな」

バイルがつまらなそうに言った。

「早くカイルの手当てを！」

ミメットがそう言った時にはすでにカイルは力尽き、床に倒れていた。

依頼7：失踪者達を止める！（後書き）

カイル

「もしかして俺死亡？」

死ぬわけないでしょ。死んだら物語続かないし。

ラグ

「こんにちは〜！」

バイル

「新キャラのイケメンサイドン・バイルだ！」

自分で言うなよ（笑）

新キャラのラグとバイル。両方警官です。

ラグ

「ちなみに新人警官だからね」

バイル

「新米だけど有能だぜw」

ちなみにこの2人はアロマシティ編以外にも登場する予定です！

バイル

「次回もよろしくな！」

カイル

「普通俺が締めるだろ（汗）」

依頼8：動き出す影（前書き）

今回でアロマシテイ編も終わりです。

バイル

「俺もしばらく出番なしか？」

イエスw

バイル

「じゃあ代わりに俺が大活躍する短編を……」

書かないよ（笑）

依頼 8：動き出す影

「クソツ……………」

カイルは戦場にいた。周りでは何人ものポケモン達が自らの得物を振りかざして戦っている。

カイルは足を怪我していた。その横では親友のジユカインがサーベルを構えて2人を圧倒しているオーダイルを睨み付けている。

「中々の腕前だが、運が悪かったみてえだな」

「まだ死んじやいねえさ。死ぬのはお前だ」

フリードとジユカインがお互いに構える。

「お前だけでも逃げるチエスター！こいつには勝てない！」

カイルは必死に叫ぶが、チエスターは気にせず呼吸を整える。

「親友を置いて逃げられるワケねえだろ？安心しろ。こいつは俺が倒すから」

身動きが取れないカイルにそう言うと、チエスターはフリードに向かって走り出した。

しかしチエスターの放った斬撃はフリードのナイフに防がれ、チエスターはバランスを崩して膝をつく。

そのチエスターの首にフリードのナイフが唸りを上げて迫る！

「やめろおおおお！」

カイルは叫びながらベッドから起き上がった。

「どうした？大丈夫かい？」

すぐそばの椅子に腰掛けていたフライゴンが驚いて立ち上がった。

「……………ここは？」

「安心して、ここは病院だよ」

「…そうか。アンタは確か……………」

「ああ、君を助けたフライゴンさ。ラグ巡查だよ」

「救援感謝する。俺はカイルだ」

カイルは辺りを見回した。それにラグが気づく。

「ミメットさんは今までのことをバイルに話してるよ」

それを聞いてカイルは首を傾げる。

「話すつて1人にか？それに、警察はあの場所を捜査したのか？」

すると、話しづらそうにラグが口を開く。

「警察は事件からは手を引いてるんだ。新人だから詳しくは分からないけど、多分上からの圧力だと思う」

それを聞いたカイルは啞然とする。

「こんな大事件を警察が捜査しないなんておかしいだろ！」

「だから僕らにも分からないんだよ。まあ被害者は保護してるけどね」

カイルは別の質問をする。

「じゃあ俺が倒したカイリキー達は？」

「僕が見たときには居なかったよ。逃げられたみたいだね」

カイルは頭が混乱している。なんせ今までこんなことは無かったからだ。ただ、失踪者が保護されているということは任務は成功したことになる。

「とりあえず任務は成功なんだろう？ だったら本部に戻った方がいいんじゃないかな？」

カイルは黙って頷くとベッドから立ち上がるうとしたが、ラグに止められる。

「ダメだよ。君は全治3週間の大怪我なんだから」

しかしカイルは無理なく立ち上がった。そして立て掛けてある大剣を背負う。

「俺は特別な体質でな、大抵の怪我は適度な睡眠で完治してしまうんだ」

ラグは疑わしそうな目で見たが、カイルを信じることにした。

「治療費は後で請求してくれ」

そう言って病室を出ようとするカイルをラグは呼び止める。

「ミメットさんは広場で待っているはずだよ。こっちも事件で分かったことがあれば連絡するから」

「サンキューラグ」

カイルは礼を言って病院をあとにした。

カイルは広場に向かって歩いていく。その姿を見た者はカイルが数時間前には重傷を負っていたことなど気づきもしない。それほどカイルは回復していた。

「カイル〜！」

広場の入り口で手を振っているミメットが目に入る。その隣にはバイルもいた。

「もう治っちゃったなんて相変わらずね」

ミメットが苦笑している隣でバイルが驚いていた。

「もしかして完治してやがんのか？」

「まあな」

カイルは平然と答える。ミメットはカイルの手を握った。

「じゃあな。何か分かったらjokersに連絡するぜ。今度会った時にはデートしようぜミメットちゃん」

「悪いけど好みじゃないわ。」

断られたにもかかわらず笑うバイル。どうやらすでに数回誘っているらしい。

「準備はいいカイル？」

「万全だ」

「テレポート！」

バイルの前から2人が消えた。

そのころ、パスとフリードはアジトにいた。

「洗脳のほうは順調か？」

「順調です」

「勿論だボス」

2人は同時に返事をする。

「幹部のお前ら2人が行ったんだからな。収穫がないほうがおかしいか」

「はい、例の装置のデータは充分取れました。しかし、邪魔をしてきた者がいます」

「何者だ」

「jokersです」

「……そうか。今はいいとしても、計画の障害になるようなら早めに手を打ったほうがよいな」

ボスと呼ばれた影が腕を組む。

「このまま計画を続ける」

「了解です」

「ああ」

返事をする、2人はブレスレットに触れ、姿を消した。

依頼8：動き出す影（後書き）

アロマシテイ編終了！

カイル

「次はどんな話なんだ？」

次はミメットの代わりに楽しい（？）パートナーの登場だよ。

カイル

「ってことは休暇なし？」

もちろん

カイル

「嘘だろ」（泣）「」

依頼9：次の依頼へ！（前書き）

なんと！今回からのナイトシティ編はコラボをやります！

カイル

「マジで!?!」

ミメツト

「まだ未熟なのに調子に乗り過ぎよ」

いいじゃん。許可貰ったし

それでは、コラボスタートです！

依頼9：次の依頼へ！

「なるほど……いろいろと大変だったみたいだな」

今カイルとミメットはjokers事務所にいた。そして、今回の任務についての報告を終えたところである。

「とりあえず依頼は成功だ。依頼主からもお礼の電話が来たしな」

とマティスが言った。

忘れてる人がいるかもしれないが、マティスはバンギラスでjokersのリーダー兼司令塔である。

「さてと……ミメットには丸1日休暇を与える」

「って俺は!？」

カイルが慌てて言うが、マティスはニヤリとする。

「お前は病院で充分寝たんだろ？次の任務に行ってもらおうか」

「ミゲルに行かせればいいだろ！」

「ミゲルも一緒に行くんだぜ？」

「たまにはお前が任務をやってみるよ！」

「悪いがお前もミメットもこの仕事はこなせねえよ」

そう、jokersにはたった4人しかメンバーがいない。機密書類もあるのだ、雑用などのバイトも雇っておらず、基本的に雑用は自分たちで行っている。

「なんでメンバーをもつと増やさないんだよ！」
「生憎スカウトに行く時間がなくてな」

jokersは実力者しかいない。任務が厳しいからだ。jokersはカイル、ミメット、マティス、そして……………

「オッス！カイル、さっさと任務行くぞ！」

今し方ドアから入ってきたバシャーモのミゲルの4人で構成されているのだ。

「少しは俺のことも考えるよお前ら！」

カイルが精一杯反論するが、ミゲルは聞く耳もたず。

「じゃあ行ってくるぜ！」

ミゲルがカイルを引きずって連れて行く。

「任務、頑張つてね」

「カイルを頼むぞミゲル」

「この外道ども〜！」

カイルの抵抗も虚しく、ミメットとマティスに見送られながら2人は出発した。

外道どもに見送られたカイル達は、現在夜のナイトシティの中を歩いていて。

「で、今回の任務は？」

「連続殺人犯の抹殺だ」

「殺害か。珍しいな」

jokersは基本的に殺害はしない。特別な場合を除いて。

「犯人は1人で15人殺してる。それも2週間だ」

「超凶悪犯だな」

カイルは腕組みをしながら言った。

「一度警察の特殊部隊と交戦したらしいが、1人で全滅させたらしいぜ」

つまり依頼主である被害者の遺族はすでに警察には頼っていないのだ。

「じゃあまずは情報収集だな」「じゃあここにしようぜ！」

ミゲルが指差したのは大きめの居酒屋である。

「そうだな。じゃあ入るか」

くナイトシティ居酒屋く

居酒屋は中々広く、ポケモンも結構いるようだ。

「こいつについて何か知らないか？」

ミゲルがワインを飲む客にマティスから貰った顔写真を見せながら聞いてみる。

「ああ、4日前に警官どもを蹴散らした奴だろそいつ。悪いが詳しいことは知らんよ」

「そうか……」

カイルは誰に聞こうかと辺りを見回すと、奥のテーブルに居酒屋に居るにしてはまだ若いブラッキーとエーフィを見つけた。

「おい、こいつについて何か知ってるか？」

声を掛けられたブラッキーは、写真をじっと見ると、ニヤリとした。

「知ってるぜ。どこに居るかもな」

その言葉でカイルは身を乗り出した。

「詳しく教えてくれないか？」

「タダじゃ教えられねえな」

その時、ブラッキーの隣にいたエーフィがブラッキーの肩に手を置く。

「フィスト、何するつもりよ？」

「さあな」

フィストと呼ばれたブラツキーはエーフィの問いかけを流す。

カイルは金の入った袋を差し出して言う。

「金ならやる。だから教えてくれ」

「ただ金を貰うんじゃ面白くねえだろ？」

カイルにはフィストが何を言いたいのか分からない。

そして、フィストはとんでもないことを言った。

「ポーカーで勝負しないか？アンタが勝てば教えてやるよ」

「その勝負、乗るぜ」

その声はカイルではなく、後ろにいたミゲルのものだ。

「この地下にはカジノがある。そこでやるつもりだろ？」

「こんなところでアンタに会えるとはな、氷の帝王様よ」

実はミゲル、ギャンブルが大好きなのである。

というかなぜミゲルに氷の帝王というあだ名がついているのかが分からない。熱血漢で炎タイプのミゲルにはどう考えてもおかしいあだ名だ。

「……………そのお嬢さんもやるのかい？」

カイルは一応聞いておく。

「私はアルトよ。私はルール知らないからやれないわ」

「俺はカイルだ。で、こいつはミゲル」

カイルはミゲルを指して言った。

「俺はフィストだ。そうと決まればさっさとカジノに行こうぜ」

フィストとミゲルは店員と少し話すと、奥の扉に入っていく。それをカイルとアルトは慌てて追いかけた。

依頼9：次の依頼へ！（後書き）

今回からコラボしてもらったのは、『光と影の冒険の章』のフィストとアルトです！

モルトさん！本当に感謝です！

ミゲル

「未熟者だから上手く表現できないと思うが、そこは勘弁してくれよ」

あ、それとjokersの最後のメンバー、ミゲルです！

ミゲル

「オッス！ミゲルだ！」

ちなみに、ミゲルはjokers唯一の肉弾戦野郎です

ミゲル

「だが、馬鹿じゃねえからな。頭脳戦でフィストを制してやる！」

jokers VS フィストのポーカー対決！勝つのはどちらか？お楽しみに！

カイル

「俺、ポーカーできるかな……………」

まずはそこか（笑）

依頼10：ポーカー対決！カイル&ミゲルVSフィスト（前書き）

カイル

「今日はいつもより遅かったな」

しかたないだろ。いろいろあったんだから。

カイル

「期末が悪すぎて親に絞られてたしな」

……言うなよ（泣）

カイル

「今回はポーカーだからな。モルトさんの探求の書を読んでくればだいたい分かると思うぞ」

そんなのめんどくさいって人はこの話は飛ばしてもらって構いません。

依頼10：ポーカー対決！カイル&ミゲルVSフィスト

「ナイトシティカジノ」

酒場の下には規模の大きいカジノがあり、警備員がいるところを見ると、おそらく公式なカジノだろう。

その賑やかなカジノの中のポーカーのテーブルに、カイル達はいた。

「よし、さっさとやるうぜ」

「望むところだ」

現金をチップに替えたフィストとミゲルが意気込む。

「ルールはフロップポーカーで、上限ベット額の制限は無しです」とディーラーが言う。

ちなみにフロップポーカーとは、手札2枚と場の共通カードで役を作るポーカーである。byウィキペディア

テーブルには、カイル達3人を含め6人が参加者として座っている。

そして、ディーラーのフローゼルが口を開いた。

「では、ベットを」

すぐさまミゲルが口を開いた。

「ベッド、3万ポケン」

開始直後の高額ベッドに参加者は啞然とする。

ちなみにポケンとはこの世界でのお金の単位。価値は円と同じ。

「どうせやるんなら派手にやろうぜ」

ミゲルは挑発も兼ねて皆に言った。

「同感だ。レイズ、5万ポケン」

さらにフィストが上乘せする。

「お…俺は降りる」

「僕も…」

流石の高額ベッドにコールすることすら出来ずに2人が降りた。

「コールかな」

「私もコール」

カイルともう一人の参加者であるブースターはコールした。

「では、ベッドラウンド終了です。カードの交換を行います」

ディーラーの声とともに手札の交換が行われる。

「レイズ、1万ポケン」

ミゲルはさらに+する。

「もう1人減らすか。レイズ、20万ポケン」

フィストは大量のチップをさらに+した。

「なっ……………」

ブースターはあまりの高額ベットに口をパクパクさせている。

しかしミゲルは全く動揺せず、カイルはベット額が高いのかどうか分かっていない。

「流石氷の帝王だな。やるじゃねえか」

ミゲルは何も言わずに共通カードを見ている。

そう、ミゲルのあだ名の氷の帝王の由来は、その完璧なポーカーフェイスにある。彼はカジノで一度も無表情を崩したことがないらしい。

「俺、コールね」

カイルは落ち着いた声で言った。

すると、隣のブースターが席を立つ。

「降りるわ」

やはり、金額が高すぎてコールすら出来なかったようだ。

そして、最後のベッドラウンドへ。

（共通カードと合わせてKと10のフルハウスか。充分だな）

「レイズ、5万ポケン」

手札の強いフィストはさらに上乘せする。

（フラッシュか。場合によっては勝てるが……）

「コール」

ミゲルは用心してコールを選択。

「オイオイ、ここまできて怖じ気づいたか？」

フィストは笑いながら言う。

「何とでも言え」

だが、ミゲルは相変わらず無表情。

「俺はコール」

カイルは終始コールばかり。

まあポーカをあまり知らないのと、とりあえずコールしているだけなのだが。

「では、終了です。皆さん、ハンドを公開してください」

その言葉で全員の手札が表にされた。

フィストはミゲルのフラッシュを見て勝ちを確信した。

対してミゲルはフィストのフルハウスを見て心の中で舌打ちする。

そして、カイルの手札は……………

「フォ、フォーカード!？」

「おっ、勝った」

フィストは今までカイルがコールしかなかったため、スリーカード程度と思っていたのだ。

「そのバクフーンの勝ちですね。110万ポケン分のチップをお受け取り下さい」

「サンキュー」

フィストは顔には出さなかったが、心の中では自分自身を呪っていた。
大金吸われた上にこいつらに道案内をしなければならぬからだ。

「おい、フィスト」

カイルがフィストに呼びかけた。

「……なんだ」

「犯人の居所教えてくれるんなら、チップは返すぞ？」

フィストは驚いたが、すぐさま冷静になる。

「なんでだ？どつちにしろ俺は教えなきゃならないだろ」

「このままトズラされたら困るからな」

「……分かってんじゃねーか」

フィストは自分が賭けたチップを受け取る。

「おいカイル、俺には返さないのか？」

2人のやりとりを見ていたミゲルは声を荒げる。

「まだお前に貸した金返してもらってないからな。これでいいだろ？」

「そりゃないぜカイル」

ミゲルはしょんぼりと肩を落とした。

「約束は約束だからな。案内するぜ。ただ、明日にしないか？せつかくカジノに来たのに一回だけじゃ物足りねえからな」

しかし、そんなフィストをアルトが止める。

「ちょっとフィスト。ギャンブルは出来るだけやらないようにするって言ったじゃない！」

「こんな面白い物をやめられるかよ」

「どうやらフィスト、かなりのギャンブル中毒のようだ。」

「分かった。じゃあ明日の朝、上の酒場に来てくれ」

カイルはそう言うと、騒ぐフィストとアルト（主にアルト）を放置したままカジノに残ろうとするミゲルを引きずってカジノを後にした。

依頼10：ポーカー対決！カイル&ミゲルVSフィスト（後書き）

カイル

「俺、勝っちゃったなw」

運は実力の内だしね

カイル

「次回はついに戦闘か？」

うーん、どうだろ？

まだ決めてないし。

カイル

「決めとけよ（汗）」

ま、お楽しみに！

依頼 11：洗脳者、再び！（前書き）

カイル

「なんか、アルトが軽く空気になってるような……」

ホントコラボは難しいです（汗）

カイル

「しっかりしろよ。せっかくコラボやってんだからな」

そうだね。頑張る

依頼 11：洗脳者、再び！

壮絶な（？）ポーカーバトルを繰り広げた翌日、カイルとミゲルはあの酒場に来ていた。

「おい、大丈夫か？」

カイルが心配しているのは、二日酔いで頭が割れそうになっているフィスト。

「これが飲まずにいられるかよ…うつぶ」

今にも吐きそうなフィストの背中をミゲルがさすっている。

「全く…だから止めたのよ」

「クソッ、スタッドなら勝ってたんだよ！フロップだったから…うつぶ」

どうやらあの後フィストがフロップポーカーで負けたらしく、それで今まで飲んでたようだ。

アルトは呆れ果てているのか、椅子に座って見ているだけだ。

「未成年なのに酒なんか飲むなよな」

カイルだってアロマシテイで飲んでいたのだが。

「も…もう大丈夫だ。だいぶ楽になったぜ」

「ホントに大丈夫かよ？」

「ああ。今から犯人の居所教えてやるよ」

そう言っておぼつかない足取りで歩き出すフィスト。

心配しながらカイル達はその後を着いていった。

フィストは路地裏に入り、建物の間を通って進んでいく。そのフィストをカイル達は黙って追いかける。

10数分後、カイル達はボロボロの廃トレーニングジムに辿り着いた。

しかし規模は大きめで、犯人が隠れ家として使うにはあまり適していないのだが。

「2日前に奴がここに入っていくのを見た。隠れ家を変えていなくてもまだここにいるはずだ」

カイルは頷き、入り口の前で突入姿勢をとる。

ミゲルもカイルと左右対称になるように突入姿勢をとった。

「サンキューフィスト。もう帰っていいぞ」

カイルは中を気にしながらフィストにそう告げるが、

「奴がいるとカジノにいいカモが寄って来なくなるからな。俺もやるぜ」

「私ものんびり過ごせないしね。手伝うわよ」

どうやら2人とも帰る気はないらしい。

「そうか。ありがてえな」ミゲルがニヤリとする。

「……………じゃあ行くぞ。3つ数えてから突入だ。」

カイルの言葉に皆が頷く。

「1……………2……………3!!」

勢いよくカイルが扉を開き、ミゲル達が中になだれ込む。

「ちっ！もう来やがったか」

中には連続殺人犯のカイリューがいた。

カイリューは両手で薙刀を持っており、右目がある場所には深い傷がある。

「観念しろ！jokersだ！」ミゲルが威圧的な声で言うが、そんなことに動じる殺人犯ではない。

「へっ！捕まってたまるか！」

カイリューはそう言った途端、素早く後ろにあった穴に飛び降りる。

「逃がすかよ！」

フィストがそう言うと、真っ先に穴に飛び込んだ。

カイル達もそれに続いて飛び込む。

「なっ、何だこいつらは!？」

最初に声を上げたのはフィストだった。

カイルとミゲルは素早く構える。アルトは恐怖からか、足が震えている。

それもそのはず、飛び降りたB1には約50人あまりのポケモンが殺気剥き出しで構えていたのだ。

その大群の一番奥に、カイリューはいた。

「残念だったな！観念するのはお前らだ！」

カイリューが狂ったように笑い出すと、ズシンとカイル達の頭上から音が響いた。

カイル達が上を向くと、自分達が入ってきた穴が重く、固そうな鉄の塊で塞がれていた。

「クソツ、これじゃ出られねえじゃねえか！」

「落ち着け。奴が脱出するための設備があるはずだ」

カイルはそう言うと、辺りのポケモンを見渡す。

全員、額には黒い宝石のようなものが付いていた。

「こいつらは洗脳されてる。額の宝石を剥がせば洗脳が解ける筈だ」

カイルは失踪者達との戦いを思い出しながら皆に言う。

「カイル、なんで知ってたんだ？」

「前の任務で同じ手合いと戦ったからな」

ミゲルは納得すると、両腕を前に出して構える。

「流石jokersだな。だがな、あの御方の加護を受けた俺には勝てねえよ！」

カイリユーがそう言うと同時に、周りの洗脳されたポケモン達がカイル達に襲いかかった！

「まずは全員でこいつらの洗脳を解くぞ！」

ミゲルはそう言って近くにいたガルーラの額に拳を叩き込む。

額を殴られたガルーラは、宝石の欠片を飛び散らしながら気絶した。

「中級剣技ノ参・竜巻！」

カイルは体を回転させ、大剣は垂直にすることで斬らずに剣の腹で殴りつけていく。

「ワラワラと気色悪い奴らだな」

フィストは電光石火で1人ずつ宝石を割っていく。

「こっ、来ないでよ！」

アルトは近くにあった鉄パイプをサイキネシスで振り回して洗脳された者達を近寄せない。

「ハッ！」

真っ先に大群の攻撃を振り払ったカイルは、大剣を構えてカイルリューに突っ込んだ！

しかしカイルリューは薙刀で斬撃をいなして弾く。

「中級剣技ノ壱・居合い！」

「甘いな！」

カイルは刀を抜き放って得意の居合いで斬りかかるが、またしても受け流される。

「今度はこっちの番だ！」

カイリユーは素早く薙刀をカイルに向かって連続で突き出してきた。

「初級剣技ノ参 - 連刺突！」

対抗するためにカイルも大剣を抜き、刺突を連続で放った。お互いの得物のぶつかる金属音とお互いの体を傷つける鈍い音がリズムカイルに響く。

「中級剣技ノ四 - 交双閃！」

隙を見てカイルがクロスする斬撃を放つが、カイリユーはカウンタ―で合わせてきた！

「っ……危ねっ」

紙一重でなんとかカイリユーの薙刀をカイルはかわす。

(こいつ、さっき言ってた加護つてので強化されてんのか……)

カイルがそう考えるのも無理もない。このカイリユーは戦闘中に少しずつ強くなっているからだ。

(このまま続けなければいずれ致命傷を負ってしまう。さっさと決めなきゃな)

カイルは大剣を水平に構え、息を整え始める。

(……こいつ、何しやがるつもりだ?)

カイリユーは警戒し、薙刀を前に突き出して構えをとる。

カイルの額を一筋の汗が伝う。

「大剣術“奥義”……」

依頼 11：洗脳者、再び！（後書き）

カイル

「途中から俺とカイルユーの一騎打ちになったけど、その間フィスト達は何してたんだ？」

それは次回書くよ。

カイル

「奥義、か。久しぶりに使うな？」

そうなの？

カイル

「2年ぶりだ」

久々じゃん。成功するのかい？

カイル

「成功させるさ」

頑張れよ（笑）

カイル

「お前もコラボやってんだからもっとキャラ生かせよ」

……頑張ります

依頼12：偽善者（前書き）

カイル

「作者、なんで昨日更新しなかったんだ？」

昨日は書く気になれなかったし、自分の書いた文が気に入らなかったんだよ

カイル

「ってことは、今回は時間掛けた分いつもより完成度高いんだな？」

いや、そういうわけでもない（笑）

カイル

「……本当にダメ作者だな」

依頼 12：偽善者

カイルがカイリユーと対峙していた時、フィスト達は多くの洗脳者の相手をしていた。

「チツ！キリがねえな」

フィストが悪態を吐きながら電光石火で正面にいたポケモンの額の宝石を破壊する。

その洗脳を解いたポケモンを足場に再び電光石火で別のポケモンの宝石を破壊した。

「このままじゃジリ貧だ！多少の傷を与えてもいいから怪我しないようにしろ！」

ミゲルがブレイズキックで手前にいるカイロスを吹き飛ばしながら言う。

「ハア……ハア……」

アルトは既に息が上がっており、倒されないように動くので精一杯のようだ。

「アルト！5秒間こいつらの動きを止めてくれ。一気に数を減らすから」

「フ、フィスト……無茶言わないでよ」

「頼んだぜ」

「ハア……もう、やればいいんでしょ……」

アルトは最後の力を振り絞って集中し始める。

「ミゲル、動きが止まったら5秒でこいつらを倒せ」

「OK！」

フィストとミゲルも身構える。

「サイキネシス!!」

アルトの声が響き、洗脳者達の動きが止まった。

「今だ！」

「悪の波動！」

ミゲルが素早くマツハパンチで宝石を叩き割る。

フィストは悪の波動を放った。その波動はいくつかに分散し、それぞれが洗脳者達の額に直撃する。

ミゲルは額を殴り続け、フィストは分散する波動を連続で放つ。アルトは少しでも長く動きを止められるように全力でサイキネシスを続ける。

「……………ハア…ハア……………」

アルトは限界になり、そこでサイキネシスが止まった。

それと同時に洗脳者達は崩れ落ちるようになり倒れる。

「ふう……………久しぶりに疲れたな」

フィストが目を軽く閉じながらボヤいた。

なんと2人は、たった5秒で洗脳者達全員を蹴散らしてしまったのである。

アルトは声も出せないほどへばっている。ミゲルは緊張を解き、カイルの方を見る。

「……あいつ、大丈夫なのか？」

「大剣術“奥義”！」

カイルはそう言うと、まっすぐカイルューに突っ込んだ。

「馬鹿が、隙だらけだぜ」

カイルューがニヤリとし、薙刀でカウンターを狙おうとする。

しかし、カイルは足元に身代わりを作り出し、それを足場に跳躍した。

「何!？」

「ハアアアアア！」

カイルは縦に大剣を振りながら回転し、そのまま床を切り裂きながらカイリユーに迫る！

「チイツ……………」

しかしカイリユーは横に跳んで回避した。

カイルは回転を無理矢理止めて着地。そして高速回転の勢いのまま大剣を振り抜く。

その瞬間大剣から巨大な衝撃波が放たれ、カイリユーを襲う！

必死に回転攻撃をかわしたカイリユーは隙だらけ。大気を切り裂き飛来する斬撃に成す術はなかった。

「断空剣」

カイルが技名を言った時、カイリユーの体はその場で崩れ落ちた。

「この俺が……………こんな奴ら……………に……………」

カイリユーは瀕死の状態で苦しそうにもがく。

「お前にいくつか聞きたいことがある。」

カイルは大剣をしまい、カイリユーに近寄る。

「まず、あの大勢の洗脳者達はどうしたんだ？」

「俺の子分どものことか。」

「子分？」

「ああ、俺は組長やっててな。組の奴らだ」

カイルは納得したように頷く。

「じゃあ2つ目、あの洗脳する宝石はどうしたんだ？」

「あの御方から頂いた物だ。俺に使えと言ってくださったんだ」

「あの御方？」

「それだけは言えねえな」

おそらく、アロマシテイの奴らと何らかの関係があるのだろう。

「じゃあ最後に、お前が戦闘中に身体能力が上がったのはなぜだ？」

「ドーピングだ。それだけしか言わねえよ」

カイルは少し間を開けて、

「そうか」と言った。

「悪いが、俺達の任務は「抹殺」なんでな。死んでくれ」

「悪いと思ってねえくせに、偽善者め」

「ああ、俺は偽善者だ。じゃあな」

カイルは腰の刀を抜き、カイリユーの首に突き刺した。

カイルは数秒だけ手を合わせ、刀を抜いて鞘にしまった。

「安らかに逝け。殺人鬼」

カイルは最後にそう言うと、フィスト達の方に歩き出した。

依頼12：偽善者（後書き）

ミゲル

「終わり方が中途半端じゃねーか」

五月蠅い、コラボは意外と難しいからそうなったの。

ミゲル

「言い訳だろ？」

その通り（笑）

ミゲル

「ブレイズキック！」

ぐふっ！！

ミゲル

「言い訳するくらいならしっかり書け！」

イ、イエッサー（汗）

依頼13：別れ（前書き）

今回でコラボは終了です。

カイル

「フイスト達ともお別れか」

では、どうぞ！

依頼 13：別れ

「やったな、カイル！」

ミゲルがカイルに近寄り、軽く胸を殴る。

「ああ、やったんだが………」

カイルは苦笑いしている。

「なんだ？どうかしたのか？」

「あいつから脱出方法を聞いてなかった」

「マジかよ（汗）」

「それは心配事じゃねえだろ。力づくで出られるだろうからな」

フィストが何気なく言う。

「あゝ」

「確かに」

フィストは呆れたような目でカイル達を見る。

「それより、警察呼ぶんだろ？居合わせたくねえんだがな」

「ん、お前何か悪いことしたのか？」

ミゲルが少しニヤニヤしながら聞く。

「未成年での飲酒、ギャンブル、さらに暴力事件を何度かな」

「お前……………本当に16か？」

今度はカイルが呆れている。

「とりあえずここからでるぞ」

ミゲルが2人に呼び掛ける。

ちなみに、アルトはまだくたばっている。

「俺とフィストが壁に傷をつけるから、カイルが破ってくれ」

「ああ」

「まかせろ」

フィストとカイルが頷き、構える。

「じゃあいくぞ……………ハッ！」

ミゲルの渾身の一撃が壁に直撃、それにフィストが続く。

「電光石火」

フィストの強力な電光石火が壁を半壊させた。

そこにカイルが拳を突き出す。

「爆裂パンチ！」

カイルの凄まじい破壊力を持つ拳が壁を貫き、崩壊させた。

「ふう、うまくいったな」

「派手にやりすぎだろ」

フィストはアルトを担いで廃ジムの外に出た。

「もう行くのか？」

「ああ、さっきも言ったが警察に会いたくねえからな」

「それに、こんなに派手なやつたんじゃ何もしなくても警察が来る
だろ」

フィストが少し間を開けて付け足した。

「またポーカーやろうぜフィスト！」

「またな！」

「次やるときはスタッドだからな」

フィストがニヤリとし、アルトを担いだまま去っていった。

フィストが去ってから十数分後、カイル達は警察署で、事情聴取を受けていた。

「で、君達があのカイリユーを殺したのか？」

「ええ、交戦し、やむなく殺しました」

本当は依頼で殺したのだが、そういうことにしておいた。

主に質問にはカイルが答え、隣でミゲルが眠そうに欠伸をしている。

「驚いたな、奴を倒すなんてな。とりあえずその廃ジムにいるポケモン達は保護すればいいんだな」

ちなみに、派手に脱出したので警官達がすでに駆けつけており、廃ジムは捜査中である。

「お願いします。ところで、電話を貸してもらえないでしょうか？」

「ああ、構わないよ」

カイルは近くにあった電話を借りる。マティスに任務の報告をしなければならぬからだ。

「もしもし、カイルだ。成功したから今から……………何？」

カイルの声の調子が変わる。

「ああ、分かった。今行く」

カイルは素早く電話を切り、部屋を出ようとする。

「待ってくれ、君たちに雑誌やラジオの取材が来てるんだが」

多分殺人鬼を倒したからその取材だろう。

「そんな暇はない。ミゲル、急いで帰るぞ！」

「どうしたんだよカイル？」

「後で話す！早く来い！」

カイルの真剣な声でミゲルも部屋を飛び出した。

「あ、連続殺人犯を倒したことについて何か」

署を出るときに取材をしようとする輩が詰めかけたが、カイル達は無言で押しのけて通過する。

「カイル！そろそろ言えよ！」

署から少し離れた位置を疾走しながらミゲルがカイルに聞いた。

カイルの口から出た言葉は、ミゲルの足をさらに早めさせた。

「jokers事務所が強襲された。マティスとミメットが応戦しているらしい」

依頼13：別れ（後書き）

ついにコラボ終了しちゃいました……

カイル

「今回のコラボの反省点は？」

まず、アルトが空気になってしまったこと。最後は出番なしだし（汗）

カイル

「なんでだよ」

いやね、アルトが別れの時に言う言葉のしっくりくるやつが思いっかなかったんだよね。

二つ目、スランプだったこと。創作意欲が急になくなるときがあるんだよね。文章力なさすぎだし。

カイル

「モルトさんに失礼だな」

ほんとすいませんモルトさん。上手く2人が表現できませんでした。

結論・初心者はコラボするなら覚悟していた方がいいです。楽しいけど凄く苦労します。

カイル

「作者の文章力のなさが原因だな」

おっしゃるとおりで

依頼14：jokers事務所襲撃（前書き）

さて、今回は襲撃されたjokers事務所にいたマティス達です！

カイル

「マティスはほとんど出番なかったからな」

一応メインキャラだからね？

それでは、どうぞ！

依頼14：jokers事務所襲撃

カイル達がナイトシティの警察署にいたころ、マティスはjokers事務所でもいつも通り依頼者への対応をしていた。

「ふ〜、さすがに疲れたな」

マティスは先ほどミメットがいれてくれたお茶を飲む。

しかし、やや冷めていたため、マティスは顔をしかめた。

「……………やっぱり熱くねえとな」

マティスが湯呑みを置き、仕事を再開しようとする。

その時、施錠されている事務所のドアが吹き飛び、2人のポケモンが事務所に入ってきた！

「こいつ、jokersか？」

「……………ああ」

入ってきたのはボスコドラと腰にレイピアを挿したガブリアス。

マティスはすでに自分の得物を手にしていた。

「jokers、お前らにはしばらく活動停止してもらおう」

「…お前ら何者だ？」

「答える義理はない」

「だろっつな。じゃあ別の質問だ。なぜjokersにケンカを売る？」

「神のご意志だ」

「……………馬鹿かてめえ？」

マティスは呆れてしまった。

「好きに言ってくれて構わん。そろそろいかせてもらおう！」

ガブリアスがそう言い、マティスに飛びかかってきた！

「フツ！」

しかし、マティスの振るった大きな槌によりガブリアスは攻撃を中断する。

「オラオラオラ！」

マティスが槌を振り回す姿は、破壊神にしか見えない。

2人はマティスの槌を軽々と避けていく。

まあモーシヨンが大きいため、避けやすいのも確かだ。

「なめんな！」

マティスが槌を振った時にできた隙をボスコドラが狙う！

しかしボスコドラの攻撃は届かなかった。ボスコドラの突き出した固い拳は刃のついた鞭に弾かれていた。

「私も参戦するわ」

駆けつけたミメットが鞭を構える。

「……やはり仲間がいたか。あと2人はどうした」

レイピアを油断なく構えたガブリアスが言う。

「その辺にいるわ」

「どうせ任務なんじゃねーの？」

ボスコドラが笑いながら言った。

ガブリアスが頷く。

「そのほうが好都合だ。さすがにjokersを4人も相手にするのはまずい。それに、司令塔を殺ればjokersは動けないだろう」

どうやら、奴らの狙いはマティスのようだ。確かにマティスがやられれば、jokersの対応能力が失われることになる。

ガブリアスがレイピアを構えた。

「プルルルル……」

その時、突然電話が鳴り響く。

マティスが素早く受話器を掴んだ。

（頼む、カイル達であってくれ……）

そして聞こえてきたのは、カイルのいつも通りの任務報告。

「何だ？こんなときにも依頼者優先か？」

ボスコドラが冷笑するが、マティスは気にもとめない。

「カイル、事務所が襲撃された。すぐに戻れ」

「何!？」

マティスの言葉にボスコドラが驚く。ガブリアスが素早く動き、マティスを突き刺そうとする。

が、ミメットの鞭がそれを許さず、レイピアを弾いた。

マティスが受話器を置き、敵に向き直る。

「2人はすぐに駆けつけるぜ。不利なのはお前らだ」

「ならば増援が来る前に殺るだけだ」

マティスの言葉に少しも動揺せずに言い放つガブリアス。

「jokersを舐めるなよ?」

「カイル達が来る前に終わらせるわ」

マティスとミメットがお互いの得物を低く構える。

「死ねえええ！」

ボスコドラが2人に突っ込んだ！

「吹雪！」

マティスが吹雪を放ち、ボスコドラの動きを止める。

「シャドーボール！」

続いてミメットが放った黒球がボスコドラに襲いかかる。

しかし、シャドーボールはガブリアスのレイピアの横薙で両断された。

ガブリアスはそのままマティスに突っ込む！

「ちっ！」

マティスは慌てて槌を振るが、ガブリアスは最小限の動きでそれかわす。

ミメットがカバーしようとするが、ガブリアスの剣の方が速かった。

「ぐっ……！」

ガブリアスの突き出したレイピアはマティスの堅い皮膚を貫通し、

右肩を貫いていた。

(チツ！利き腕をやられるとはな……)

マティスは槌を床に落とす。利き腕がやられた以上、重い槌は使い物にならないからだ。ガブリアスはすでに剣を引き抜いて距離をとっている。

「マティス、大丈夫？」

「問題ない。右が使えなくなったただけだ」

ミメットの心配そうな声に左手を上下させて答えるマティス。

「次は心臓を貫く。いくぞボスコドラ！」

「任せな！」

今度はガブリアスがマティスに突っ込む。

ボスコドラはミメットに突進してきた！

「私を足止めしてマティスを倒すつもりね！させないわ！」

ミメットは素早くボスコドラにマジカルリーフを放つ。

「食らうかよ！火炎放射！」

ボスコドラの吐く炎がマジカルリーフを焼き尽くす。

次の瞬間、ボスコドラに激痛が走った。

「な……そうか、マジカルリーフは俺の気を逸らすために……」
「大正解よ。残念だったわね、相手にならないわ」

ミメットはボスコドラの気を逸らし、背後に回り込んで鞭で切り裂いたのだ。倒れるボスコドラを無視してマティスのいる方を向く。

「マ……マティス!？」

ミメットは目にした光景を信じる事が出来なかった。

ミメットが目にしたのは、胸を刺されたマティスが崩れ落ちる瞬間だった。

依頼14：jokers事務所襲撃（後書き）

ミゲル

「マティス死亡フラグ？」

さあ？どうなるでしょう？

ミゲル

「というか、なんで昨日更新しなかったんだよ！」

忙しかったの！

これからは2日に1回になるかもしれませんが。ご了承ください。

ミゲル

「暇なくせに。」

暇じゃねえよ？部活あるし！

ミゲル

「わかったわかった。出来るだけ更新スピード早めろよ？」

了解

依頼15：ミметットの抵抗（前書き）

今回は短いです。

ミメット

「なんで？」

区切りよく終わらせたから。

ミメット

「だからって短過ぎない？」

「で、ではどうぞ！」

ミメット

「ちよっと！無視しないでよ！」

依頼15：ミメットの抵抗

「マテイス!!」

ミメットが素早くガブリアスに突っ込み鞭を振るうが、ガブリアスはレイピアで防ぐ。

「何で……何でこんなことをするの?」

「jokersが邪魔だからだ」

「……許さない!」

ミメットが複数の黒球を作り出し、ガブリアスに放つ。

「流星群」

しかしミメットのシャドーボールは流星群にかき消されてしまった。

「ボスコドラはやられたか。まあ彼奴の実力では当然か」

(あの短時間でマテイスを倒すなんて……相当な実力者ね)

ミメットがボスコドラを倒した時間はほんの30秒程度。怪我をしていたとはいえ、そんな短時間でマテイスがやられるなんて異常である。

「……まだそのバンギラスは息があるみたいだな。お前を殺してからトドメを刺すか」

ミメットはその言葉に一瞬安堵したが、構えは解かない。

「死ぬのはアナタよ！ エナジーボール！」

ミメットが緑色の球体を放つ。

「竜の波動」

ガブリアスは冷静に竜の波動で相殺させ、ミメットとの間合いを詰める。

「シャドーウィップ！」

「ドラゴンスレイ！」

2人の斬撃が衝突し、強力なエネルギーによって双方共吹き飛ばされた。

「……大体実力は分かった。そろそろ死んでもらおうか」

ガブリアスがそういった途端、ガブリアスの姿が消える。

「……！」

なんとか反応できたミメットは鞭を振り上げて横からの斬撃を防ぐ。

「よくかわしたな。だが、これはどうだ？」

ガブリアスが勢いをつけて刺突を繰り返す！

ミメットは鞭を振って弾こうとする。だが……

「なっ……………」

ミメットの振った鞭はレイピアに弾かれ、レイピアはミメットの腹に深々と突き刺さった！

「俺は鋼すら貫ける剣技を扱える。防御ではなく、避けるんだっとな」

ミメットはその場に倒れ込む。

ミメットは右手の鞭をガブリアスに振ろうとするが、ガブリアスはミメットの右腕を強く踏みつけた。

「……………ああああ！」

「まだ抵抗しようとするのか。苦しまないように一息で殺してやる」

右腕が折れ、激痛で呻くミメットの前でガブリアスはレイピアを振り上げた。

「中級剣技ノ巻・居合い！」

室内に響いた一つの声。その声でガブリアスは攻撃を中断し、飛び込んでくる刃を受け止めた。

「インファイト！」

さらにガブリアスの横から連続で拳が突き出され、ガブリアスは後退することで回避する。

ミメットは朦朧とする意識の中、顔を上げる。そこに立っているのはjokersの2人の戦士。

「悪い、ミメット。遅くなったな」

「援軍参上！つてな」

依頼15：ミメットの抵抗（後書き）

カイル

「ベタだな」

ミメット

「ベタね」

ミゲル

「ベタすぎだろ！」

マティス

「ベタすぎて予測できるな」

う、うるさい（汗）

そこはスルーしてよ

カイル

「まあいいか。次回は俺達が戦うんだな？」

勿論。明日休みだから更新できるかもね

ミゲル

「頼んだぜ作者！」

ミメット

「こんな作者に期待しないほうがいいわよ？」

なんだと！

マティス

「ミメットの言うとおりだ」

……………
(泣)

依頼16：襲撃者VS2人の戦士（前書き）

ちょっとガブリアスが強すぎたかも……

ミゲル

「マジかよ」

まあ、頑張れよ。

ミゲル

「おー」

何その気の抜けた返事

依頼16：襲撃者VS2人の戦士

襲撃され、ボロボロになったjokers事務所。そこでレイピアを持った凄腕の襲撃者とjokersの戦士2人が対峙していた。

大剣を構えたカイル、拳を構えたミゲル、そして足元には………

「あ、あの、もう帰っていいですか？」

震えながら足元にいたケーシイが言う。

「ああ、良いぜ」

ミゲルがそう言った途端、ケーシイはテレポートで消えた。

「い、今のは………？」

「少し脅したらテレポートで送ってくれた！」

ミゲルの言葉に、ミメットは呆れた。

「マティス、生きてるか？」

カイルが大声でマティスの方に呼びかける。

「………まだ………死んじやいね………え」

マティスは苦しそうに答える。息も絶え絶えだ。

「死ぬなよ」

カイルはそう言って、ガブリアスの方に向き直る。

「さて、お前は何者だ？」

「答える義理はない」

「フリードの仲間か？」

「……そうだ」

ガブリアスは少し間を開けて言った。

「なら、お前を捕まえて奴の居場所を吐いてもらっぞ！」

カイルはそう言ってガブリアスに突進する。

「初級剣技ノ参 - 連刺突！」

ガブリアスは刺突の雨をレイピアで防いでいく。

「火炎放射！」

ガブリアスの背後に回っていたミゲルが炎を吐いた。

「守る！」

しかしガブリアスは緑色のバリアを展開することで火炎と刺突を防いだ。

「やるじゃないか」

「そちらこそ」

カイルとミゲルは並んで構え、ガブリアスはレイピアを中段に構える。

「一応名乗っておこう。俺はケネスだ」

「jokersのカイルだ」

「同じくミゲル」

それぞれが名乗り、油断なく構えた。

「スカイアッパー！」

真っ先に動いたのはミゲル。ケネスにアッパーカットを浴びせようとす。

「ドラゴンクロー」

しかしケネスはそれを相殺した。

「ハッ！」

続いてカイルが大剣で斬りかかる。

ケネスはそれを紙一重でかわしていく。

「爆裂パンチ！」

剣を振るった直後、カイルはよけた後で隙ができたケネスに渾身の
一撃を食らわせた！

「ぐっ……！」

パンチが来ると思ってなかったケネスは吹き飛ばされた。

「……………さて、本気で行かせてもらおうぞ」

ゆっくりと起き上がったケネスはそう言うと、凄まじいスピードで
カイルに突っ込んだ！

カイルは回避が間に合わないことを悟り、大剣の腹を突き出してガ
ードする。

ケネスが勢いに乗ったレイピアをそのまま突き出し、カイルの大剣
と衝突した！

普通ならば、ケネスの剣は大剣に弾かれる。しかし……………

「な……………なんだと……」

レイピアは弾かれることなく大剣を貫通し、カイルの左肩に突き刺
さった！

「このヤロオ！」

ミゲルはケネスに突進するが、怒りで冷静さを失っていたミゲルの攻撃が当たるはずもなく、ドラゴンクローで返り討ちにされた。

「アアアアアア！」

カイルは痛みに耐えながら大剣を捻ってレイピアを抜けなくし、腰の刀を叫びながら抜刀する。

「無駄だ」

ケネスは力任せに大剣の欠片を散らせながらレイピアを引き抜いて斬撃を防ぐ。

「インファ……」

「ドラゴンスレイ！」

後ろからミゲルが飛びかかって殴打を浴びせようとするが、振り向きざまにケネスが放った強力な斬撃で深く斬りつけられて吹っ飛んだ。

「ミゲル……！クソッ！」

カイルは穴の空いた大剣を振るうが、ケネスに難なく防がれる。

「ドラゴンパンチ！」

ドラゴンクロウの要領で放たれた拳をカイルは大剣の腹で防ぐが、大剣は穴の空いた箇所から亀裂が広がり、刀身が砕け散った。

「クッ……」

カイルは使い物にならなくなった大剣をケネスに投げつけて距離をとろうとする。

しかしケネスは素早く間を詰めてドラゴンパンチでカイルを吹き飛ばした！

「かはっ……」

カイルは壁に叩きつけられ、床に崩れ落ちる。

「カイ……ル」

カイルは声がした横を向くと、重傷で動けないミゲルがいた。どうやらミゲルの方に吹き飛ばされたらしい。

「こんなものかjokersとは。期待はずれだな。」

ケネスはそう言ってレイピアを振り上げる。

「せめて、仲間と一緒に殺してやるか」

ケネスはレイピアを2人に振り下ろした！

「……………！」

ケネスの剣は2人に届かなかった。振り下ろされたレイピアは抜き放たれた刀に止められていた。

「久しぶりだ、この力を使うのは……………」

カイルがゆっくりと起き上がる。

（このバクフーン、さっきとは違う！）

ケネスは直感的に危険を感じた。だが、相手は手負いのバクフーン1人、なぜ恐れる必要がある？

ケネスはそう判断すると、レイピアをカイルの心臓目掛けて突き出

した！

だがカイルは最小限の動きでそれをかわし、レイピアの刀身を掴む。

「貴様……」

ケネスが何か言おうとするが、それは中断された。

なぜなら、カイルが握っているレイピアの刀身を握りつぶしたからだ。

レイピアはパキィ、と軽い音を立てて砕けた。

「！！！！」

「お前は俺を怒らせた。」

カイルが見開いた目は、黒ではなく新緑に染まっていた。

依頼16：襲撃者VS2人の戦士（後書き）

マティス

「またベタだな」

キニスルナ（笑）

マティス

「カイルがまたあの力を使うなんてな……」

特殊能力創っちゃったw

マティス

「今日は休みなんだろう？連続投稿しろよ」

それはキツいって（汗）

まあ代わりにアナザーを更新するかもね。

マティス

「アナザーは微妙だろう」

別にいいだろ！

マテイス

「じゃあ完成度の高いものにして」

……頑張るよ

依頼17：タイラント・アイ（前書き）

ミゲル

「なあ作者」

何？

ミゲル

「俺達ってどうなるんだ？」

さあ？カイル次第？

ミゲル

「頼むぞカイル！」

さあ、カイルは勝てるのか？それではどうぞ！

依頼 17：タイラント・アイ

「こいつ……普通じゃない！」

ケネスはそう思いながら柄だけになったレイピアを捨てて素早くカイルから離れる。

「俺の仲間を傷付けたんだ。それなりの覚悟はできてるだろうな？」

先程とは比べものにならない殺気を放っているカイルが指をポキポキと鳴らしながら言う。

「覚悟ならここに来た時点ですべてさ」

ケネスは予備に持ってきていたレイピアを抜いた。

その瞬間、カイルの姿が消え、ケネスが吹っ飛んだ！

「ぐ……」

かろうじて反応できたケネスは受け身を取るが、壁に強く叩きつけられる。

「どつした？反応できてないぞ」

カイルが右拳を振り抜いた姿勢で言う。

「1Jの……！」

ケネスは自らの最高速でカイルに突っ込み、全てを貫く刺突を連続で繰り返す。

「当たる訳がないだろ？」

しかしカイルは全て紙一重でかわし、回し蹴りをケネスに放った。

モ口に食らったケネスは再び壁に叩きつけられる。

「俺の“タイラント・アイ”を舐めるなよ？」

「ち……………奥の手と言う奴か」

「ああ。ただし、その代償もデカいかな」

痛みを耐えながらケネスは立ち上がる。

(このままではやられる。確実に動きを捉えなければ！)

そう考えたケネスは、カイルだけに意識を集中させる。

再びカイルの姿が消え、ケネスが後ろに吹っ飛んだ！

「……………！！」

拳を振り抜いたカイルの腕に浅い傷ができていた。

(レイピアの刀身の根元が当たったか。少し捉えられてるな)

ケネスはすでに立ち上がっていて、カイルに集中している。

カイルは黙って刀を抜き、脇構え(刀を腰まで下げ、切っ先は後ろを向いている構え)をとる。

カイルが物凄いスピードでケネスに突っ込み、刀で×を描くように斬撃を放った!

(見えた!)

ケネスもレイピアを勢いよく突き出す。

「!!!!!!」

カイルは咄嗟に体を捻るが、レイピアはカイルの横腹をかすめた。

しかしカイルの放った斬撃もケネスを浅く切り裂く。

「ハア……ハア……捉えたぞ」

「もうカウンターで合わせられるなんてな。さすがだな」

ケネスはカイルを捉え始めていた。

その反面、カイルはやや焦っていた。

(奴から受けたダメージが大きい。このままじゃ……………)

カイルの能力は身体能力を飛躍的に高める反面、反動も大きい。カイルは反動による凄まじい激痛とケネスから受けたダメージに耐えていたのだ。

「悪いが、次で決めさせてもらおう」

カイルは刀を鞘に収め、半身を引いて居合いの構えをとる。

「望む……………ところだ！」

ケネスもレイピアを引き、刺突をする構えとなる。

カイルの頬を一筋の汗が伝い、床に落ちた。

「上級剣技ノ式 - 瞬突居合い！」

「ハアッ！」

カイルとケネスが己の最高速ですれ違った。

「くっ……………」

カイルが崩れるようにして床に右膝を着く。

「捉えたと……思ったんだが……な………」

ケネスのレイピアがカラン、と音を立てて床に落ち、自身も床に崩れ落ちた。

だがケネスは震える手で右腕のブレスレットに触れる。

「……………逃げさん」

カイルは立ち上がるうとするが、膝に耐え難い激痛が走った。

「ぐっ……………」

「カイルと……言ったな。次は必ず……お前の命を奪って……みせる」

「させるかよ……………」

ケネスはニヤリとし、ブレスレットに触れて姿を消した。

その瞬間、離れた場所にいたボスコドラの姿も消えた。

「……………逃げしたか」

カイルは全身に走る激痛で床に倒れ込む。

「痛えな……」

カイルの目の色が新緑から黒へと戻り、カイルの意識は闇に呑まれた。

依頼17：タイラント・アイ（後書き）

カイルの能力の説明をしたいと思います。

名称：タイラント・アイ

基本的に自分が傷を負っている状況でしか使用できない。

メリットは身体能力、特に反射神経の飛躍的な向上と、力の一点集中の可能（腕力を全て脚力に回すなど）。

デメリットは使用中に使用者の体を蝕むため、激痛が伴うこと。並みの精神力では痛みに耐えきれず精神崩壊する恐れがある。使用頻度によっては寿命が縮まる可能性もある。

身体能力の向上は自分の負っているダメージが大きいほど上がる。外見的特徴は目の色が新緑に変わるくらい。

カイル

「長文ご苦労さん」

ちよつとへたくソな説明ですが、読んで頂けると幸いです。

依頼18：治療（前書き）

今回はあの2人が再登場です！

カイル

「大体予測できるよな」

そ、それではどうぞ！

カイル

「あ、今回はつなぎみたいなものだからな」

依頼 18 : 治療

「……………」

カイルは意識を取り戻し、ゆっくりと目を開けた。

カイルの視界には真っ白な壁が……いや、天井がある。

カイルは顔を横に向ける。そこには……

「おう、やっと目が覚めたか」

アロマシティの警官、サイドンのバイルがいた。

「ここは……………」

「病院だ。俺達が運んだんだぜ？」

「俺達ってことは……………」

「ああ、ラグも来てる。ほら」

バイルの指が指す方向を見ると、ベッドの上で上体だけ起こしているミメットと話しているラグがいた。

ミメットのベッドの横にはマティスの寝ているベッドがあり、カイルの隣にはミゲルが寝ているベッドがある。

「皆無事なんだな。よかった……」

「つつても全員重傷だからな。暫くはjokersも休業になるだ
ろ」

「というか、何でお前らがここにいるんだ？」

バイルが何故かため息を漏らす。

「話すと長くなるぜ」

「いいから話せ」

バイルはわかった、と言うと一息ついてから話し出した。

「俺とラグはあの失踪者事件について詳しく調べてたんだ」

失踪者事件とは、アロマシティでカイル達が受けた依頼に関する事
件だ。

「でよ、分かったことがあってな。重要なことだから直接話したほ
うがいいだろってラグが言ったんでjokers事務所を訪ねた」

「で、重傷を負った俺達を見つけたんだな」

「そういつだった」

「大して長くなかったな」

「長くなるぜ、って言ったほうがカツコイイだろ？」

「どうでもいいな」

カイルは上体を起こし、左肩に走った痛みを少し呻いた。

「大抵の怪我は適度な睡眠で完治できるって聞いたのはガセか？」

「いや、タイラント・アイを使った後は回復力が低下するんだ」

「タイラント・アイ？」

バイルは聞き慣れない言葉に首を傾げる。

「いや、気にしないでいい。傷も大体治ったしな」

「無理すんな。お前は重傷なんだぜ？」

「大丈夫だ。それに、やらなきゃいけないこともある」

「やらなきゃいけないことお？」

カイルは近くに立てかけてあつた刀を手取る。

「大剣を折られたからな。新しく作ってもらわなきゃな」

「……………あてはあんのか？」

「当たり前だ」

カイルはゆっくりとベッドから降りる。

「これからある鍛冶職人の所に行く。バイル達は分かったことをマテイス達に話しといてくれ」

バイルは黙って頷いた。

それに気づいたラグがカイルに歩み寄った。

「僕達は一応休暇をとってるから、彼らの護衛は任せなよ」

「分かった。助かったぞ」

「これくらい大したことないって」

カイルがやり取りを済ませ、病室を出ようとするが、

「カイル！」

ミメットの声が呼び止めた。

「ごめんなさい……足手まといだったわね」

「相手が強かったただけだ。これから俺達も強くなればいいんだ」

「……そうね、急いで怪我治して強くならなきゃね」

「ああ。だけど、安静にしてるよ？」

「分かってるわ。カイルも頑張ってるね」

ミメットがにっこりと微笑んで言った。

カイルはおう、とだけ言っただけで病室を立ち去った。

「ケネス、任務は成功か？」

「はい、ボス。jokers全員に重傷を負わせました」

「……重傷？1人も殺してないのか？」

ボスと呼ばれた黒い影が首を傾げる。

「はい。奴らの1人が急に強くなりまして……」

「……何か特別な力があるとしても言うのか？」

「おそらく……」

傷だらけにも関わらず淡々と話すケネスはある意味不自然である。

「……とりあえず任務は成功だ。お前も例の計画に戻れ」

「わかりました」

ケネスがブレスレットに触れ、姿を消す。

「……jokers。なかなか興味深い奴らだ」

ボスと呼ばれた影は笑みを浮かべ、姿を消した。

依頼18：治療（後書き）

再び登場ラグとバイルです！

ラグ

「でも一話限りだけど」

バイル

「俺達をもつと目立たせるよ！」

無茶言うなよ。これからの予定では君達は暫く出れないのは事実だけど（笑）

バイル

「笑い事じゃねえよ！」

大丈夫！君達みたいなのは最終決戦とかに出れるタイプだから！

ラグ

「どんなタイプですか（汗）」

バイル

「しかも最終決戦ってどんだけ先なんだよ」

まだ始めて大して経ってない新人作家だしね。でも、きつと出番作るからさ！

ラグ

「期待しないで待っておきます」

バイル

「同じく!」

……ひでえ奴らだ(泣)

依頼19：スミスの森（前書き）

新展開です。

カイル

「新キャラ登場だよな？」

イエス。カイルの知り合いも登場するよ！

あ、これからしばらくカイル以外のjokersは出ませんので。

依頼19：スミスの森

ここはjokers事務所のある街から遠く離れた、スミスの森。その森の中を1人の電気鼠、ピカチュウが歩いていた。

「木の実〜 木の実〜」

何やら歌いながら歩くピカチュウの手には、大きめのカゴが下がっている。どうやら木の実を探しに森に来ているようだ。

「あつ、モモンの実だ！」

そのピカチュウはモモンの実の生っている木を見つけたが、木の上の方にしか実は生っていない。

「仕方ないな〜。登ろうつと」

ピカチュウはモモンの実のために木を登る。

その途中、1人のポケモンが目に入った。

それはバクフーンというポケモンで、腰に刀を挿していて、イライラしているようである。

(17.....怖い.....)

そのピカチュウはバクフーンを見るなり生い茂る木の葉に身を潜め

る。

「どちら、通り過ぎるまで待つつもりなのよ。」

しかし、その計画は無駄となる。

カイルは後少しで目的地のスミスタウンというところで迷っていた。

ここ、スミスの森は迷いやすく、地元のポケモン以外は普通足を踏み入れない場所である。

カイルは一度通ったことがあったので大丈夫だろうと思い通過しようとしたのだが、なにしろ何年も前だったので迷ってしまったのだ。

普通なら30分程度で抜けられる森に二時間も居るので、イライラも溜まりまくっている。

「ん？」

ふとカイルが頭上を見上げると、そこには黄色に黒い縞模様のつい

ている尻尾のようなものが。

「よっ！」

カイルは無意識の内にジャンプして尻尾を掴む。

「うわわわわっ！」

カイルが木から引きずり降ろしたピカチュウは驚きの声を出しながら宙吊りになる。

現在の状況を説明すると、カイルがピカチュウの尻尾を持っていて、ピカチュウは逆さまで宙吊り状態である。

カイルは地元のポケモンらしい者に会えてほっとした。

「助かった。俺道に迷っ……………」

「ぎゃああああ！十万ボルトオオオオ！！！」

パニックだったのか、話を聞きもせずにかイルに電撃を放つ。

「イテテテ！」

カイルが思わず手を離し、その隙にピカチュウはカゴを投げ出して一目散に逃げる。

「あ、待ってくれ！」

ここで見失うわけにはいかないカイルは、ピカチュウが落としか

ゴを拾ってピカチュウの後を追いかける。

しかしそのピカチュウ、かなり速い。カイルは見失わないように走るだけで精一杯のようだ。

「見失ってたまるか！」

カイルは全力疾走することでもいままでのイライラを晴らしながら後を追った。

走ること約10分、森を抜けて村に出た。

ここが、目的地のスミスタウンである。

ピカチュウは一軒の鍛冶屋の外にいた1人のゴウカザルに息を切らしながら喋りだした。

「クロスさん！いきなり怖いポケモンが追いかけてきて……」

「分かったライト。振り返ちにしてやるから待っどけ」

クロスと呼ばれたゴウカザルは腰の剣を抜いて待ち構える。

そこにカイルが走ってきた。

「この野郎が！」

クロスはいきなりカイルの脳天目掛けて剣を振り下ろした！

しかしカイルは素手で剣を払いのける。

「……………いきなり何してんだクソジジイ」

「ん？お前はいつぞやのクソガキじゃねえか」

「クソガキじゃねえよ。カイルだ」

「じゃあ俺だつてクソジジイじゃなくてクロス様、だろ」

「何自分に様付けてんだよ……………」

「偉いんだから様くらいつけやがれクソガキが！」

対面直後から繰り広げられる馴れ馴れしい会話。ライトと呼ばれたピカチュウは状況が飲み込めていない。

その様子に気付いたクロスはライトに言う。

「ああ、こいつは俺のダチの弟子だ。悪者じゃねえよ」

それを聞いたライトはほっとして緊張を解く。

「で、何の用だクソガキ」

「だからもうガキじゃないっつってんだろ？」

「いいから用件言いやがれクソガキ」

カイルは何回言っても無駄だと思いたため息をついた。

「とりあえず中で話さないか？立ち話もなんだろ」

「仕方ねえな。入れ」

クロスが家の扉を開け、カイルとライトを中に入らせた。

依頼19：スミスの森（後書き）

カイル

「微妙な所で終わらせるなよ！」

いや、一話につき2000文字に収めたいからぞ。

カイル

「じゃあ明日も更新しろよ？」

さ、さあね？（汗）

依頼20：交渉（前書き）

カイル

「おい作者」

なんだい？

カイル

「スミスタウンって名前、おかしくないか？」

いやね、クロスみたいな職人がいっぱいいるからそういつ名前、み
たいな

カイル

「ネーミングセンス無いな」

う、五月蠅い！（汗）

カイル

「……まあいいか。」

では、どござー！

依頼20：交渉

「で、用件は？」

椅子に座ったクロスが言う。

彼らはクロスの家の居間にいた。

カイルは黙って背負っていた布でぐるぐる巻きにされている物を机に置く。

「布を解いて見てくれ」

「……………？」

クロスは布を解いてみる。

「これは……………」

「そう、アンタの自信作の成れの果てだ」

クロスが目にした物。それはケネスとの戦いで砕かれたカイルの大剣だった。

「なるほどな。つまり、新しい大剣を作れっか」

「いや、少し違うな」

クロスが首をかしげる。

「こいつよりも強度、振りやすさを高めた大剣が必要だ。並じゃない剣がな」

「フン。そうなるに相当な業物になるな。」

「で、作れるのか？」

「……………」

クロスは黙り込んでしまった。

その時、居間に1人のキルリアが入ってきた。

「どうぞ、お茶です」

そう言ってテーブルに湯呑みを置く。

「お、サンキュー」

「悪いな、ルリ」

キルリアはニコツと笑うと、居間から出て行った。

「今の娘は？」

「俺が2年前に引き取った子だ。孤児だったんでな」

「クソジジイにも情はあるんだな」

カイルとクロスは小さく笑いあう。

「で、どうなんだ？」

クロスは少し間を空けて言った。

「作れないこともない」

「じゃあ……………」

「だがな」

カイルの言葉をクロスは遮って続ける。

「その条件で剣を作るならば、材料も相当高価な物になる。だからな、条件を3つ付けさせてもらう方がいいか？」

「ああ。構わないさ」

クロスはニヤリと笑う。

カイルは嫌な予感がするが……

「まず1つ目、鍛冶には木炭が必要だ。だから木炭をつくるための木を採ってきてもらおう」

「そのくらい楽勝だ」

クロスは一息ついて続ける。

「2つ目、ライトとルリを鍛えてやってくれ」

「はあ？」

クロスはため息をついた。

「あの2人は強くなることを望んでる。アイツの弟子のてめえなら任せられるからな」

「分かったよ。で、3つ目は？」

クロスの表情が突然曇った。

「一週間くらい前からな、このスミスタウンに妙なやつらがやってきてな。略奪を繰り返してるんだ」

「マジかよ」

「大マジだ。でな、そいつらのリーダーが相当強くてな。追い払うことすらできないんだよ。3つ目はそいつらの殺害だ」

カイルの表情も曇る。

「殺害か？」

「ああ。生け捕りしても逃げ出すだろうからな」

「……………分かったよ」

カイルは渋々頷いた。

「そいつらの特徴は？」

「ああ、エレブー、ゴローン、ドラピオンの三人組でドラピオンがリーダーだ。」

「ドラピオンか。武装は？」

「武装はない。奴らは二回襲撃してるからな。次で終わらせてくれ」

「了解」

カイルは席を立つ。

「大剣の完成はどれくらいかかる？」

「そうだな……一週間は必要だ」

「そんなにか！？」

「馬鹿野郎。これから作る剣はそこらのとは格が違うんだ。最速で一週間はかかる」

「……分かったよ。ライトとルリつてのを呼んでくれ」

カイルは横に立てかけていた刀を手にとって言う。

「もう特訓か。やる気満々じゃねーか」

「ちょうど弟子が欲しくなってるな」

「あんまりやり過ぎるなよ？」

カイルはあえて答えずに外に出て行った。

依頼20：交渉（後書き）

次回は修行です！

カイル

「見れば分かるだろ。そんなことより、新しい小説書き始めたらしないな」

うん。なんか衝動的に（笑）

カイル

「こつちの更新速度落とすなよ？」

大丈夫。支障はでないようにするからね。
読者の皆さんもそこはご安心ください。

依頼21：模擬戦 - カイルVSライト&ルリ（前書き）

今回は、戦闘が書きたかったからやりました。

カイル

「自己中だな」

バトルシーン書かないとやってられないって！最近スランプだし！
創作意欲があんまり湧かないんだよ！

カイル

「じゃあ今回のバトルシーン執筆で立ち直れ」

無茶言っなよ（汗）
ではごっそ！

依頼 21：模擬戦 - カイルVSライト&ルリ

外に出たカイルは刀を地面に置き、準備体操を始める。

約5分後、ライトとルリが家から出てきた。

ライトは武装していないが、ルリは腰に二本の刀を挿している。

説明しなくても分かると思うが、ルリの刀はカイルのものより小さい。

「刀、使えるのか？」

その華奢な腕で双剣が扱えるとは疑わしい。一応カイルは聞いてみる。

「はい、大丈夫です」

ルリは人間ならば髪にあたる青い部分を搔く。そう、青い部分。彼女は色違いなのだ。

「……………そうか。ライトと聞いたか？お前は武器なしか？」

「ええ、武器はいりませんよ」

カイルはその言葉に頷く。

「今日から約一週間、お前らを師となるカイルだ。早速だが、実力を見るために模擬戦をやらせてもらう」

カイルはそう言うと、地面に置いた刀を拾い上げる。

「ルールは五分間で俺に一発当てる。それだけだ」

「ちょ、ちょっと待ってください!」

ルリが慌てたように言う。

「いくら私達でも一発も当てられないと思ってるんですか?」

「ああ、そうだ」

ルリの問いに素っ気なく答えるカイル。

「理解出来たなら構える。始めるぞ」

2人とも呆れていたが、カイルの言葉に慌てて構える。

カイルは刀を鞘から抜かずに構える。

「え、抜かないんですか?」

ライトは隣の双剣を構えたルリとカイルを見比べながら言う。

「抜いてもいいが、間違いなく重傷を負うぞ?」

「あ、ならいいです」

ライトは慌てて言う。

「じゃあ改めて……………始め！」

「電光石火！」

カイルのスタートの声と同時に、ライトはカイルに猛スピードで突っ込む。

しかしカイルは冷静に刀を振って返り討ちにしようとする。

「影分身！」

ライトは素早く分身をカイルの周りに出現させ、紛れ込むことでカイルの斬撃を回避した。

「影分身か。だが……………」

カイルは素早く動き、次々と分身達を斬る。

瞬く間にライトの分身は全滅し、ライト自身も斬撃を食らって吹き飛んだ。

「その程度じゃ時間稼ぎにもならないぞ」

カイルはそう言ってるの方に構える。

ルリはじっと目をつむったまま動かない。どうやら瞑想で精神統一しているようだ。

「舐められたもんだな」

カイルは電光石火でルリに近づき、ルリに刀を振り下ろす。

「サイコキネシス！」

ルリはサイコキネシスで刀を止める。瞑想で強化されているため、刀がうちりと固定することができたようだ。

「やっ！」

ルリは隙のできたカイルに双剣で斬りつけようとする。

「甘いな」

しかしカイルは刀を手放し、ルリの腕に回し蹴りを当てて武装を解く。

「ぐっ……………」

武器を失ったルリは蹴られた腕を押さえつつ後ろに飛び退き、そこに先ほど吹き飛ばされたライトが駆けつけてカバーする。

「ルリちゃん、あれをやるっ」

「分かりました！」

ルリは頷き、さらに後退する。

ライトは力を溜め始める。

（何をするつもりだ？）

カイルは警戒するが、彼らの「奥の手」を見てみたくもあり、待つことにした。

ライトは力を溜め終わったようで、身代わりで分身を2人作り出す。

「いきますよ……………ボルテッカー！」

3人のライトを包み込むように電気の球が形成され、バチバチと音を立てながら大きな光の球はカイルに突進する。

しかし動きが直線すぎるため、難なくカイルはよけた。

「サイコキネシス！」

そのかけ声と共に光の球は反転し、再びカイルに突っ込む。

「ちっ！」

カイルは舌打ちをして横に跳ぶが、光の球はそれを追いかける。

「サイコネシスでコントロールしてるのか……………」

強力だが直線的に突進するボルテッカーを操るという連携でカイルは後退を余儀なくされる。

「まあ、簡単に破れるけどな」

カイルはそう言うところの方に走り出す。

「……………」

それに気づいたルリは双剣を構えるが、カイルは居合いの構えをとり、鞘に納めたままの刀を振り抜く。

「中級剣技ノ壱・居合い！」

元々の腕力の差に加え、居合いまで使ったカイルの斬撃にルリの双剣が耐えられるはずもなく、ルリは双剣ごと吹っ飛ばされた。

勿論、コントロールを失ったボルテッカーはそのまま直進して近くの大木に衝突。しかし勢いは止まらず大木をへし折って岩に衝突して止まった。

「ちょうど5分か。鍛える価値は充分あるな」

右腕の腕時計を見た後、気絶した2人の弟子に目をやるカイル。その顔にはうつすらと笑みが浮かんでいた。

依頼21：模擬戦 - カイルVSライト&ルリ（後書き）

新キャラ？というか、一週間ほど弟子になるライトとルリです！

ライト&ルリ

「よろしくお願いします！」

2人とも真面目です。いい弟子をカイルも持ったもんだ。

ルリ

「作者さん、私進化したらミメツトさんと被りませんか？」

大丈夫、性格違っし、色違っだし。

ライト

「作者さん、僕ポルテッカー使えていいんですか？」

いいんじゃない？（適当）

ライト

「なんで適当なんですか……………」（汗）

あゝ眠いから強制終了ね！

ルリ

「ダメ作者って本当だったんですね（汗）」

依頼22：一週間後（前書き）

ミゲル

「なあ作者？」

何？

ミゲル

「俺の出番はいつになる？」

知らん知らん。

ミゲル

「頼むぜ作者！最近暇でしょうがねえんだよ！」

怪我人は安静にしときなさい。

では、どござー！

依頼22：一週間後

「一瞬の隙をモノにするんだ！敵は待ってくれないぞ！」

「はい！」

カイルに吹っ飛ばされたライトは、必死に立ち上がりつつ言う。

「駄目だ！斬撃にキレがない！殺す気で来い！」

「はっ、はい！」

すでに息も絶え絶えなルリもなんとか返事をする。

すでにクロスとの交渉からちょうど一週間が経っており、2人も見違えるほど腕を上げた。

と言っても、端から見たら最初の模擬戦と何ら変わらない。

だがカイルも数発食らい、刀も鞘から抜いていた。

「今日はここまでだ」

カイルが腕時計を見て言う。

その言葉と同時に2人は地面に仰向けに倒れる。

「ゼエ……ゼエ……」

「はあっ……はあっ……」

2人とも体力の限界で、息をするので精一杯のようだ。

（相当強くなったな。俺の想像以上の実力を付けた）

カイルは弟子の成長に満足し、刀を納める。

「俺はこれから森に木を取りに行く。ちゃんと家に戻れよ」

カイルはクロスとの契約の一つである、木炭の材料の木を取りにスミスの森に向かうことにした。

今日で剣は完成するかもしれないが、一応である。

疲れ果てた弟子を放置し、カイルはスミスの森に向かった。

～スミスの森～

「中級剣技ノ巻・居合い！」

カイルの声と共に刀が大木を切断し、大木は音を立てて倒れる。

「こんなもんか」

カイルは両手で大木を半分にした木材を抱える。カイルの怪力だからこそできる技である。

「さすがにキツイな」

まあ、自分よりも大きい大木を抱えるのだから当然である。

カイルは大木を抱えて歩く。端から見ると、木が動いているようだ。

カイルはそのまま鍛冶屋に向かった。

カイルは難なく鍛冶屋に着いた。大木を外に置き、自分は家の中に入ろうとする。

「10万ボルト！」

突然、カイルに向かって電撃が飛ぶ。

しかしカイルは刀を抜きはなつて電撃を斬った。

電撃は斬撃にかき消される。

(ライトか? いや、この禍々しい殺気は!)

「姿を現せ!」

カイルのその声で、近くの茂みからエレブー、ゴローン、ドラピオンが姿を現した。

(このメンツ……間違いなくクロスの言つてた奴らだな)

カイルはそう考え、刀に手を添えて居合いの構えを取る。

「兄貴、こいつ殺しますか?」

「当たり前だ。俺に反抗する奴は……皆殺しに決まってるだろ」

エレブーの問いかけに、殺気のもつた声で答えるドラピオン。

「俺はお前らの始末を依頼されてる。悪いが、ここで死んでもらうぞ」

カイルは足に力を込める。

その時、カイルは自分の後ろに気配を感じた。

「僕達も手伝います！」

「師匠、取り巻きは任せてください！」

そう、後ろにいたのはライトとルリだった。
2人ともすでに臨戦態勢である。

「ちょうどいい実戦経験になりそうだな。頼んだぞ」

『はい！』

ライトは頬袋から電気を走らせ、ルリは双剣を抜いて構える。

「ガキ戦わせていいのか？死ぬぜ？」

「こっちの心配より、自分の心配をしたらどうだ」

ドラピオンとカイルはお互いに構えた。

「いくぞ！」
「死ね！」

2人の声と共に、戦いの火蓋は切って落とされた。

依頼 22：一週間後（後書き）

選挙カーうぜええええええええええ！

ルリ

「ど、どうしたんですか？」

いや、五月蠅いのなんのって執筆中なんだよこっちわあああああああ！

ルリ

「そつ、それより、次回は実践ですか？」

まあね。これは前から考えてたパターン。

ルリ

「頑張ります！」

頑張ってね〜

僕も夏休みの課題頑張るから（汗）

ルリ

「頑張ってください（汗）」

依頼23：3on3（前書き）

はあ、疲れた（疲）

カイル

「（疲）ってなんだよ」

だって、2話連続投稿だよ？

カイル

「最初のほうはやってたじゃないか」

あのころは若かったんだよ（笑）

カイル

「お前……1ヶ月前だろ（汗）」

1ヶ月は長いの！

ではどつどぞ！

依頼 23 : 3 on 3

「雷パンチ！」

エレブーが真つ先にルリに突っ込む。

ルリはゆっくりと双剣を交差させ、そして………

「中級剣技ノ参・交双閃！」

カイルから習得した剣術でエレブーを切り裂いた！

エレブーは呆気なく目を回して倒れる。

「この野郎！ 転がる！」

ゴローンは転がるでライトに突っ込む。

「身代わり！」

ライトは身代わりを2人作り出してゴローンの回転を止める。

「食らえ！ アイアンテール！」

ライトは隙の出来たゴローンに全力で硬化させた尻尾を叩きつけた！

相性の関係もあり、ゴローンも倒れる。

「呆気ないですね」

「僕達、強くなったんだね」

ルリとライトはもの足りなさそうに目を回してる2人に目をやった。

「中級剣技ノ壱・居合い！」

カイルは刀を抜き放ち、その剣速でドラピオンを斬りつける。

しかし、カイルの斬撃はドラピオンの硬い殻に傷をつけるだけで終わった。

「クソッ！硬すぎだろ！」

カイルはドラピオンの爪を紙一重でかわす。

「へっ！俺は特殊な薬を投与しててな、おかげで無敵の体になったのさ！」

カイルはドラピオンの言葉を無視し、策を練る。

（居合いで斬れないんじゃないか他の剣技でも大したダメージは望めない！せめて、大剣があれば……）

「クロスポイズン！」

カイルは強力な一撃をなんとか横っ飛びで回避する。

（タイラント・アイを使うか？いや、あれを多用するのは危険だ。だがこのままじゃ……）

「10万ボルト！」

「マジカルリーフ！」

突如として放たれた電撃と鋭い葉っぱがドラピオンに命中する。

「フン、舐めてるのか？」

しかしドラピオンには傷一つ付いていない。

カイルが後ろを見ると、戦いを終えた2人が立っていた。

「師匠！倒しました！」

「援護します！」

2人の言葉を聞き、ドラピオンは舌打ちする。

「チツ！役に立たない奴らだな！」

カイルは刀をドラピオンな真っ直ぐ構える。

「邪魔だ。2人とも下がってる」

「でも……………」

「黙れ。下がらないと俺が斬るぞ」

ライトは鋭い殺気を向けられ、慌てて下がる。

「さて、邪魔が入ったな。続きをやるっ」

「さっさと死ね！」

カイルはドラピオンの爪を紙一重でかわしながら斬りつけるが、ドラピオンの殻に傷を付けるので精一杯だ。

「切り裂く！」

「くっ！」

ドラピオンの鋭い爪がカイルの胸をかすめる。

(まずい……………)

カイルは距離をとろうとするが、ドラピオンはそれを許さず追撃してくる。

その時、クロスの声が聞こえた。

「カイル、受け取れ！」

カイルはクロスの投げた物をなんとかキャッチする。

「隙あり！」

ドラピオンはその隙にクロスポイズンを放つ。

カイルは受け取った物が大剣だと分かると、どんな剣なのか確かめもせずに抜き放った。

ガキイーン、と音を立ててドラピオンの爪を受け止める大剣。カイルは違和感を感じた。

（この剣、異常に軽い。それに……なんだこの輝きは？）

カイルの手にしている大剣は刀身が純白、しかも光沢が激しく、剣自身が輝いているようだ。

「ミスリル、か」

伝説の金属、ミスリル。最高の硬度、光沢を誇り、軽くて扱いやすい。貴重なため、国宝レベルの金属である。

その貴重な金属がふんだんに使われた大剣は、カイルの手に握られている。

（注文通りだな。あとは、切れ味か）

カイルは大剣を水平に構える。

「そんな剣で俺を倒せると思うなよ！」

ドラピオンがカイルに突っ込んできた。

カイルはドラピオンの爪を紙一重でかわし、大剣を引きつける。

「初級剣技ノ参 - 連刺突！」

カイルはドラピオンの殻の傷のある所に連続で刺突を放つ。

一撃一撃が重い刺突が連続で一点に当てられ、自慢の殻は碎け散った。

「なっ、なんだと！」

「終わりだ！中級剣技ノ弐 - 満月斬り！」

カイルの振り下ろした大剣は、ドラピオンの殻が碎けた部分を両断した。

「ぎゃああああ！」

「あの世で己の罪を後悔するんだな」

カイルは最後にそう言うと、ドラピオンの頭に大剣を突き立てた。

(予想以上の切れ味だなこれは)

カイルは大剣を鞘に納め、手を合わせた。

「成仏、しろよ?」

カイルは最後に一言そう言つと、鍛冶屋の方に歩き出した。

依頼23：3on3（後書き）

カイル

「新しい大剣だな！」

その通り！名前、決めないとね。

カイル

「名前か……難しいな（汗）」

それより、早く次回かかないと（汗）

カイル

「今日は3話連続投稿か？」

それはキツイよ（汗）

せめて、明日だね。別の小説もかかないとだし。

カイル

「課題、進んだのか？」

いえ、執筆で進みませんでした。

カイル

「しっかりしろよ（汗）」

依頼24：まさかの依頼（前書き）

こんばんは読者の皆さん。今日は残念なお知らせがあります。

カイル

「なんだよ改まって」

明日から部活が再開するため、2日に1回の更新となります。ご了承ください。

カイル

「最近は毎日だったからな」

お盆休みだったからね。

では、どうぞ！

依頼24：まさかの依頼

「うまくやったじゃねえかクソガキ」

「いや、こいつが無ければ危なかった」

カイルが大剣を背に挿しながら言う。

「で、あいつらどうする？」

カイルは弟子達が倒し、のびているエレブーとゴローンを見る。

「ああ、刑務所に連れて行くさ。とりあえず、中に入れ」

クロスはカイル達を中に招き入れた。

「ドラゴネス、それがその剣の名だ」

「ドラゴネス、か。」

カイルは自らの大剣を眺める。よく見ると、鏢に竜が彫られている。

「それにしても、こいつらが2人倒すなんて驚いなまったく！」

「ああ、よくやったな」

クロスとカイルの賞賛に2人は照れたように頭を掻く。

「あいつら、大したことなかったんで」

「一撃でのびちやっただですよ」

カイルは頷く。

「それはお前達の実力が上がったからだ。だからこそ、楽に倒せたんだからな」

カイルは2人を誉めたあと、暗い顔でクロスに向き直る。

「それで……ドラゴネスの代金は？」

そう、ドラゴネスは貴重なミスリル製。大剣に使われたミスリルの量は半端でない量である。その上、鍛冶料金も上乘せされれば並の金持ちの全財産では支払えない料金になってもおかしくないからだ。

「お前みたいなクソガキからは金は取らねえよ。出世払いにしといてやるさ」

カイルはほっとため息をつく。

しかしクロスはとんでもない事を言った。

「代わりといっちゃなんだが、この2人を連れて行ってくれないか？」

「「「は？」」」

カイル、そしてライトとルリが聞き返すように言う。

「だから2人を連れて行って言ってんだよ。若いうちに世界を見ていたほうがいいからな」

「で、でもそうしたらクロスさんが……」

反論するライトをクロスが遮って続ける。

「jokersについていけばいろんな所に行けるだろう。俺の心配は要らん。俺はまだあと二十年はいけるからな」

「おじさん！もう年なんだから……」

「年だがまだくたばるような年齢じゃないさ。行ってこい」

ルリは暫く無言だったが、やがてコクリと頷いた。

「カイル、2人は任せませ」

「任せろクロス」

名前で呼び合う2人はどこか不自然だが、真剣だからこそである。

その時、電話の音が部屋中に響き渡った。

「もしもし」

クロスが電話に出る。

「ん、ああ、分かった」

クロスはカイルに受話器を差し出す。

カイルは不思議がりながら受話器を耳に当てる。

『カイルか?』

そう、その声は……

「マティス！怪我は大丈夫なのか？」

マティスは笑いながら答える。

『ああ、もう普通に動けるようにはなった』

「そうか、それで何か用か？」

『ああ、悪いが急遽お前に任務をやってもらいたいんだ』

「は？休業中だろ？」

確かに現在 j o k e r s は休業中。任務も受け付けていないはずである。

『お得意さんの依頼だな。どうしても今すぐやってほしいらしいんだ』

「で、唯一元気な俺にやれって訳だな」

『そついうことだ』

カイルはため息をついた。

「……………で、内容は？」

『依頼主の娘のミミロップが行方不明になってな。探して欲しいらしい』

「了解。その街は？」

マティスは街の名前を告げる。

「いや、そこまで歩いて半月はかかるぞ（汗）」

『だから、テレポートできるポケモンの力を借りるんだよ』

「探さないといけないのか……………」

その時、カイルの目にルリの姿が入る。

「ルリ、テレポート使えるか？」

いきなり聞かれたルリは驚きながらも、首を縦に振る。

「使える奴がいた」

『見つけるのが早かったな（汗）』

「特徴なんかは後で教えてくれ。電話するから」

『分かった。頼んだぜ』

「了解。」

カイルはそう言って、受話器を置いた。

「任務か？」

「ああ」

クロスの問いかけに素っ気なく答えるカイル。

「ちょうどいいじゃねえか。2人にも手伝わせるよ？」

「ポケモンを探すだけなんだがな」

カイルは出発の準備を始める。

「準備しろ。10分後に出るからな」

「「ええっ!?!」」

2人の驚くが、カイルは無視して準備を続ける。

「いくらなんでも、早くないか？」

「そういう任務だ」

確かに、行方不明者探しならゆっくりやることは出来ない。

「準備したら外に来いよ」

カイルはそう言い、外に出て行く。

弟子2人も慌てて準備を始めた。

～10分後～

鍛冶屋の外には、並んで立つ若者三人とオヤジ一人がいた。

「体に気をつけて下さいよ！」

「無理しないでくださいね」

「老衰で死ぬなよクソジジイ」

「もう1回言ってみろクソガキ！」

三人の言葉の、カイルの言葉にだけ反応するクロス。

「……頑張れよライト、ルリ」

ライトとルリは力強く頷く。カイル以外の三人の目には涙が浮かんでいる。

「行ってきますクロスさん！」

「またねおじさん！」

2人は別れの言葉を告げ、ルリはテレポートの準備をする。

「ルリ」

「はい」

カイルの合図にルリは頷く。

「テレポート！」

その言葉で三人の姿がクロスの目の前から消えた。

「……………ライト、ルリ、クソガキ……………無茶するなよ……………」

クロスは最後にそう呟き、鍛冶屋に戻っていった。

依頼24：まさかの依頼（後書き）

カイル

「ドラゴネス、か」

うん、必死で考えてたら神様がくれた名前。

カイル

「……微妙じゃないか？」

自分のネーミングセンスの酷さを考えてくれれば、納得できるはずです。

カイル

「そして、任務か」

頑張っつてね。大変だろうけど

カイル

「………何する気だ？」

それは次回のお楽しみです。

依頼25：酒飲みライト（前書き）

カイル

「今日はなんでこんな時間に更新してるんだ？」

ケータイの調子が悪くて、執筆に手間取りました（汗）すみません。

では、ごうぞー！

依頼 25：酒飲みライト

カイル達がテレポートで移動した場所、そこは……

「おいルリ。ここ、隣町なんだが？」

カイルがルリに聞く。そう、ここは目的の街の隣にある小さな街である。

「すみません。私、ここまでしか来たことないんで」

基本的にテレポートは使用者の行ったことのある場所にしか移動できない。なので、ルリはここにワープしたのだ。

「……………よく考えたらなんでここに来たことあるんだ？鍛冶屋から徒歩で半月かかるんだが」

「おじさんが一度連れてきてくれました」

「あ……………そう」

これ以上詮索するのは失礼だと思い、カイルは切り上げた。

「ここからだとも目的地まで歩いて一時間ってところだな。今日はこの街に泊まるか」

「え！？任務はどうするんですか？」

ライトが慌てて聞く

「任務は明日にする。もう夕方だし、どうせ移動しても寝るだけだからな」

「じゃあ今日は何するんですか？寝るにはまだまだ早いですよ？」

今度はルリが質問する。

「そつだな……………社会科見習ってのはどうだ？」

「……………は？」

く居酒屋く

夕日が沈み、仕事を終えた労働者達が集う酒場。そこにカイル達3人はいた。

「し、師匠？」

「社会科見学って……………」

「ああ、酒場くらい行つといた方がいいと思つてな。任務で入る時もあるし」

だからと言って自分達が来て良い場所じゃないだろう。そう思う
イトとルリ。

「まあ、とりあえずここでメシも食うからな。何か好きな物頼んで
いいぞ」

「……………いや、宿で食べるからいいです」

「わ、私も」

2人とも食事を拒否する。居酒屋で食べたくないらしい。

「……………そうか。じゃ、これ飲んでみる」

そうやってカイルが2人の前に置いたグラスに入っているのは……………

「ビ、ビールですか!?!」

「私達まだ未成年ですよ!?!」

当たり前だが2人は動揺する。だがカイルはお構いなし。

「まずは経験だ。アルコールは適度に摂取すれば良いものだからな。
俺だって未成年だし」

ちなみにライト、ルリは15歳、カイルは18歳である。

渋っても無駄だろうとライトは覚悟を決めてビールを口に運んだ。

「ケホッ、ケホッ」

ライトは少し咽せる。

「……ライト君、大丈夫？」

ルリは恐る恐るライトの顔を覗き込む。

「お……お……」

「ライト、大丈夫か？」

何やら様子がおかしくなったライトを心配し出すカイル。

「……おいしい」

「「は？」」

ルリとカイルは無意識のうちに聞き返す。しかし、聞こえた通りなら……………

「師匠、おかわり頼んでいいですか？」

まさかのまさか。ライトはビールの味を覚えてしまった。目がキラキラと輝いている。

「よ、よし。会計を済ませるぞ2人とも」

予測出来なかった事態に、カイルは店を出ることで解決しようと試みるが……………

「何言ってるんですか師匠。まだ来たばかりじゃないですか」

作戦は失敗に終わる。

「……………仕方ないな。ルリ、会計を頼む」

カイルはルリに財布を投げ、ライトを抱え上げる。

「し、師匠！あと一杯だけ！」

「いつから酒飲みになったんだ！帰って寝ろ！」

その後、嫌がるライトを引きずって宿屋に行ったカイル達は明日に備えて眠りについた。(多少のトラブルはあったが)

翌日

カイルは外から聞こえる騒ぎ声で目を覚ました。

ライトはまだ隣でぐっすり寝ているが、ルリはすでに部屋にはいない。

とりあえず、何の騒ぎなのか確かめに行くことにした。

「あ、師匠！」

宿屋を出ると、そこにはルリがいた。ルリはどうやらポケモンの手当てをしているようだ。

ルリが手当てしているデンリュウは、肩に酷い怪我をしている。

カイルが辺りを見回すと、他にも怪我をしているポケモンが何人もいた。

「何があつた？」

カイルは手当てを続けるルリに聞く。

「隣町で変な奴らが暴れてるそうです。それで、こっちに逃げてきたポケモン達の手当てをしてるんです」

「暴れてる？」

カイルは疑問に思うが、もしそうならば今は先にやらなければいけないことがある。

「ルリ、今から隣町を沈静化させる。来るか？」

「はい！」

「よし、準備するからそいつの応急処置だけ終えろ」

カイルはそう言った後、返事も聞かずに宿屋に戻る。

急いで部屋に向かい、ライトを叩き起こしてから大剣を背負い、刀を腰に挿す。

「え？え？」

事態の分かっているライトを引っ張って外に出たところにはルリも処置をおえて待っていた。

「急いで隣町、レスタウンまで行くぞ」

その言葉で3人は危険が待ち受けるレスタウンに向かって走り出した。

レスタウン

自然の宝庫と呼ばれる美しい街は、無残なものになっていた。

そこらには息絶えたポケモン達が転がっている。

「クソッ……急いで探すぞ」どこからか度々聞こえてくる悲鳴や叫び声を頼りにカイル達は走った。

すると、この街で初めて生きているポケモンの姿を目にする。

どうやらネイティオ、グライオン、ボスコドラとユンゲラー、プイゼル、ザンゲースが戦っているようだ。

しかし、圧倒的な実力差でユンゲラー達が追い詰められてしまう。

グライオンとボスコドラが彼等に破壊光線を放とうとした。

「師匠！」

「分かってる」

ライトが言った時にはすでにカイルは大文字を放っていた。

大文字は破壊光線を放つ直前のグライオン達に直撃、爆風でユンゲラー達とグライオン達の距離が開く。

カイルの大文字でネイティオ達の注意は全てカイル達に向いた。

「準備しろ。戦闘だ」

カイル達は前に進み出る。

ユンゲラー達は何等かしらの手段で回復したらしく、先程より元氣

そうだ。

カイルは正面にいるネイティオ達を見据え、こう言い放った。

「何やってんだ」

依頼25：酒飲みライト（後書き）

ライト

「最後のあれは……………？」

分かっている方もいるかもしれませんが。

ライト

「で、作者さん。」

何？

ライト

「一杯だけでいいのでお酒を！」

ぼ、僕だって未成年だよ！？

ライト

「冷蔵庫に入っているのを！」

……………マジでやめてくれ（汗）

依頼26：VSグライオン！殺戮者を倒せ！（前書き）

腹減ったなあ

ルリ

「いきなりどうしたんですか？（汗）」

今日は夜ご飯あんまり食べて無くてね……………夜食とろうかな

ルリ

「夜中に食べると太りますよ？」

ガリガリだから問題ないのさ

今回はルリ&プイゼル（ゼル）VSグライオンですな。
ではどうぞー！

依頼26：VSグライオン！殺戮者を倒せ！

カイルがもう一度口を開いた。

「この大虐殺はお前らがやったのか？」

「そうだ」

ネイティオが落ち着いて答える。

「てめえらは何なんだ？」

今度はガラの悪そうなボスコドラが大きな声で言う。

「僕達は“jokers”です！」

ライトは負けじと大きな声で言い返す。

「いや、それじゃ分からないだろう。“何でも屋”って言えば分かるか？」

カイルは落ち着いた声でボスコドラの質問に答えた。

「……………つまり、何者かの依頼で私達を倒しに来たのか？」

「いや、依頼とは関係ない。変な奴らが暴れてると聞いたから来たんだ」

「ケツ！大人しく逃げりゃよかったものが、わざわざ殺されに来るとはな！」

グライオンが笑い出すが、カイル達は動じない。

カイルは息絶えているポケモン達に目をやる。

「……………なぜこんな大虐殺をした？」

そう言うカイルは拳を少し握り締めている。

「生命エネルギーを集めてるんだよ」

グライオンはそう言った。

「生命エネルギー？」

ルリは聞き慣れない言葉に眉をひそめる。

「説明する義理はない」

理解出来ていないのに気付いたのか、ネイティオは言った。

ライトがチラツとユンゲラー達を見ると首を傾げている彼等が目に入った。彼等も知らないようだ。

「教える気がないんなら、無理矢理聞き出すだけだ」
カイルはそう言っただけで背負っているドラゴネスを抜きはなした。

それに続くようにルリも双剣を抜き、ライトは電気を軽くほっぺに放電させる。

「仲良く1人1体ずつだ。いくぞ」
「待ってくれ！」

カイルが駆け出そうとした時、後ろから声が聞こえた。

振り向くと、そこには離れた場所にいたはずのユンゲラー達が。

「ボク達も戦います！」

ユンゲラーの横にいたパイゼルが力強く言う。

「……………本気で言ってるのか？お前らがボコボコにされた相手と戦うをだぞ？」

「そんなの関係ない！僕達だって少しは役に立てるはずだ！」

パイゼルの逆側にいたザングースが言った。

「……………下手したら死ぬぞ？俺達に任せてもいいんだ。それでも戦うのか？」

カイルは警告の意味も込めてユンゲラー達に聞く。

真ん中にいたユンゲラーが口を開いた。

「ああ、街一つ虐殺した奴らを放っておけない！」

ユンゲラーの目には揺るぎない決意が秘められていた。

「……………分かった。じゃあ仲良く2人で一体だ。戦いたいを選んでいい」

ユンゲラー達は力強く頷いた。

そしてネイティオの正面に立つカイルの横にユンゲラーが、グライオンにはルリとプイゼルが、ボスコドラにはライトとザングースが対峙する。

「さて、楽しい楽しい殺し合いと行こうか」

カイルがドラゴネスを水平に構える。

「今度は俺達が勝つ！」

ユンゲラーもスプーンを構えた。

それと同時に皆が構え、ネイティオ達も戦闘態勢になる。

「サイケ光線！」

「ナイトヘッド！」

ユンゲラーとネイティオが放った閃光の炸裂音が戦闘開始の合図となった。

「シザークロス！」

「中級剣技ノ参 - 交双閃！」

戦闘開始直後、滑空してくるグライオンの攻撃を剣技で相殺するルリ。しかし、その腕に衝撃が伝う。

（力は相手が上。そう何度も相殺はできない）

ルリはそう考え、後ろに下がるがグライオンは追撃してくる。

「アクアジェット！」

しかしパイゼルの横からの不意打ちにグライオンは吹き飛ばされた。

「くっ、ガキが！」

グライオンが標的をパイゼルに変えて、シザークロスの構えをとる。

「シャドーボール！」

しかし、ルリが放った黒球を回避するために攻撃は中断された。

「ふう、ありがとう」

「いえ、こちらこそです。えっと……」

「あつ、ボクはゼルです」

「私はルリっています。よろしくお願いします！」

「おい、何戦闘中に喋ってるんだ？」

2人を見ると、グライオンは苛立っているようだ。

「自己紹介は終了です！」

「うん！任せて！」

ルリとゼルは再び構える。

「死ね！破壊光線！」

「テレポート！」

「電光石火！」

2人は素早くその場を離れて回避する。

グライオンの破壊光線は半壊状態の建物に当たり、全壊させた。

「動きを止めますからゼル君は突っ込んでください！」

ルリはそう言っつて刀を鞘に収めた。

「いきます……………メ、メロメロ！」

ルリは投げキッスをグライオンに放った。ルリの頬は恥ずかしさにより紅潮している。

真面目なルリの投げキッス、作者も予想外の行動である。

グライオンはその場で動きを止めた。

チャンスと見たゼルはアクアジェットでグライオンに突撃する。

「……………かかったな」

グライオンが突っ込んでくるゼルに毒突きを放った。

「……………!!!」

予想外のカウンターをモロに食らい、ゼルはルリの近くに吹っ飛ばされた。

「ゲホッ……………なんで……………」

「メロメロが効いてない!?!」

驚く2人を楽しそうに見るグライオン。

「俺の強靭な精神に、色仕掛けが通じるワケねえだろ?」

色仕掛けという言葉に、顔を赤くするルリ。

その時、2人の頭にある疑惑が浮かぶ。

「まさか……………」

「もしかして……………」

「オカマ?」

その言葉を聞き、額に青筋の立つグライオン。

「誰がオカマだとお……………」?

グライオンが素早く2人に迫る!

「影分身!」

瞬時にルリの分身が出現し、グライオンを惑わした。

「今だ!ソニックブーム!」

ゼルが衝撃波を放つ。

「食らうか!シザークロス!」

しかしシザークロスで衝撃波はかき消された。

「破壊光……」

「初級剣技ノ四・回転斬り！」

反撃しようとしたグライオンにルリが至近距離で回転斬りをお見舞いする。

「ぐっ………！？」

「さらに中級剣技ノ参・交双閃！」

ルリが返す刀で×状に斬りつけるが………

「甘いぜ！固くなる！」

体を硬化したグライオンの体に刀は弾かれた。

「死ね！シザークロス！」

隙の出来たルリにシザークロスがヒット、ルリはその場に崩れ落ちる。

「水鉄砲！」

しかしゼルは動じずに水鉄砲を放った。

「そんなもん効くか！」

グライオンは固くなるを解いて横に動き水鉄砲をかわす。

しかし、突然グライオンの背に鋭い痛みが走った。

そのグライオンの目の前には、青色のキルリアが。

「き………貴様っ！」

「中級剣技ノき・居合い。固くなるを解いたのは間違いでしたね」

そう、先程ルリが倒れたのは演技。反撃を待ったためにあえて倒れたのだ。

その魂胆に気付いたゼルは固くなるを解かせるために水鉄砲を放ったのだ。

グライオンがその場に倒れると同時にルリも倒れる。シザークロスをも口に受けたため、ダメージが大きかったのだ。

「ルリさん……」

ゼルが倒れたルリに駆け寄る。

「私は……大丈夫です。皆さんが勝つのを……待ちましょう」

ルリが苦しそうな声で言う。

「……ボクは加勢しに行きます」

「消耗した私達が行っても……足手まといになるだけ……です」

「……………」

ゼルは黙り、戦っているライト達の方を見る。

ライトとザングースは危なげな所もあるが、よい戦いをしていた。

「仲間を信じましょうよ。必ず……勝つてくれますから」

ルリは自分に言い聞かせるように言う。
ゼルも頷く。

彼等の戦いはますます激しさを増していく……………

依頼26：VSグライオン！殺戮者を倒せ！（後書き）

カイル

「あのルリが……………メロメロ？」

ルリ

「は、恥ずかしいです……………」

まさかのまさか。ルリ、メロメロ使えたんだね〜

カイル

「いつたい、どこで覚えたんだ？」

ルリ

「クロスおじさんが、
を落とすために使えるだろうからって教えてくれました」

カイル

「ガキに何教えてるんだよクソジジイ（汗）」

どうカイル、萌えた？

カイル

「ロリコンかよ（汗）」

依頼27：VSボスゴドラ、相性差（前書き）

今更ながら、発表があります。

カイル

「なんだ？」

気づいているかもしれませんが、現在プラネットさんの
「バトルリーグ！」とコラボ中です。

カイル

「2回目だよな」

2回目なのですが……………今回は眠気により変かもしれませんが。
僕自身、納得いかない出来になってしまいました。
お詫び申し上げます。

カイル

「じゃ、そろそろ始めるぞ」

では、ごうぞー！

依頼27：VSボスゴドラ、相性差

飛び交う閃光、剣が空を切る音、指示をする大声。

その戦いの音の中にいるのは……………

「アイアンヘッド！」

「影分身！」

ボスゴドラのアイアンヘッドを分身に紛れてやり過ごすライト。

「ブレイククロー！」

さらに攻撃後の隙をついてザングースのザンが切りかかる。

しかしザンの攻撃はボスゴドラを覆う鋼に阻まれ、ダメージを与えられなかった。

現在、ライトとザンは防戦一方である。なぜかという……………

「食らいやがれ！突進！」

ボスゴドラのタックルを間髪避ける2人。

ボスゴドラは勢いあまって瓦礫に突っ込み、その瓦礫を吹き飛ばした。

そう、この強力な怪力こそがライト達が攻められない原因である。

そう何回も食らってられない威力なので、接近戦を避けようとしている。

しかしザンは遠距離技を使えない上にボスゴドラも接近戦を挑んでくるため、接近せざるをえないのだ。

「メタルクロー！」

再びボスゴドラが自慢の怪力を生かして腕を振る。

「電光石火！」

2人とも電光石火で素早く左右に跳んでかわした。

「ガアアアアア！」

突然、ボスゴドラが凄まじい叫び声をあげる。

「うわっ！」

「ウッ！」

耳の大きなライトとザンは金属音付きの大声を食らって怯む。

「もらったぜ！メタルクロー！」

その隙にライト目掛けて突っ込むボスゴドラ。

（避けられない！迎え撃つしかない！）

「アイアンテール！」

瞬時に判断したライトは尻尾を硬化させてボスゴドラの爪を受け止めよつとするが……

「ぐあっ！」

ボスゴドラのメタルクローはライトのアイアンテールを打ち破ってライトを切り裂く。

「クソッ！切り裂く！」

金属音から回復したザンがライトへの追い討ちを防ぐためにボスゴドラに切り裂くを放つ。

「……………何してえんだてめえ」

しかし相性差と強固な体を持つボスゴドラには全く効かず、冷たい目がザンを見下ろす。

「アイアンテール！」

隙だらけのザンをボスゴドラが見逃すはずもなく、ザンは強烈な一撃を受けて吹っ飛ばされてしまった。

「ぐっ……………」

気合いで素早く立ち上がるザン。モタモタしているともう一発食らうことになるからだ。

幸いにもボスゴドラは攻撃した場所から動いてなかった。

「やつさと続きをやるっぜ」

ザンが起き上がったのを見て、ボスゴドラが手招きしながら言う。

明らかに見下している態度だ。

その時、不意に飛んできた電撃がボスゴドラに命中する。

「僕を忘れてもらっては困りますよ!」

ライトがボスゴドラの後ろから電撃を浴びせたのだ。

ボスゴドラはギロリとライトを睨む。

「不意打ちか。そういうのは俺は好きじゃねえんだがな」

「殺戮者が言う言葉じゃありませんね」

会話と同時にボスゴドラが殴りかかるが、ライトは紙一重でかわして走り抜け、ザンの隣に立つ。

「これから隙を作るので、力を溜めてて下さい。」

ライトはそれだけ言って返事も待たずにボスゴドラのほうに走り出す。

ザンも剣の舞で集中し、攻撃力を上げ始めた。

「影分身！」

ライトはボスゴドラに近づくと、分身でボスゴドラを攪乱する。

「ちょこまかと小細工ばかりしやがって……………」

ボスゴドラは少々頭にきているようだ。

「食らえ！アイアンテール！」

ボスゴドラは体を1回転させながらアイアンで分身を薙払う。

「身代わり！！！」

ライトは身代わりを作り出し、身代わりを蹴って横っ飛びすること
でアイアンテールの攻撃範囲から逃れる。

「10万ボルト！」

今度はライトが電撃をボスゴドラに放った。

「メタルクロー！」

ボスゴドラは突然片腕を地面に突っ込んだ。

「なるほど。アース代わりですか」

そう、ボスゴドラはメタルクローを地面に突っ込むことで感電を防いだのだ。

「やりますね」

「だが、これで終わりだ」

その言葉と同時にボスゴドラは破壊光線のチャージを始める。

「僕だって、本気でいきますよ！」

ライトも身代わりを2人作り出し、ボルテッカーのチャージに入る。

バチバチ、という音とともに3人のライトを包むように電気のバリ

アが形成されていく。

ボスゴドラも破壊光線のチャージが終わったようだ。

「いくぜ……最大出力の破壊光線！」

「MAXパワーのボルテッカーです！」

ボスゴドラの口から放たれた凄まじい威力の破壊光線がライトに迫る。

しかし、ライトの強力なボルテッカーが破壊光線を弾きながら進む。

「なっ、何！」

ついにボルテッカーが破壊光線を突破した。

「くっ………」

しかし、ライトに限界が来たのか、ボルテッカーが消滅し、身代わりも煙となって消える。

「うああああ！」

だが、ライトが叫びながら再びボルテッカーを形成する。先程より急激に威力は下がるが、強力なことに変わりはない。

「ちっ！」

ボルテッカーがボスゴドラに迫る。

破壊光線を撃った直後は反動で動けない。それをライトは狙ったのだ。

「食らええええええ！」

ボルテッカーはボスゴドラにクリーンヒットし、ボスゴドラを吹き飛ばした。

だがボスゴドラは起き上がろうとする。

「俺はこの程度じゃやられ……………」

「僕を忘れてないかな？」

ボスゴドラの前に立つのは、拳を構えたザン。

「トドメだ！気合いパンチ！」

剣の舞で強化された拳がボスゴドラの顔面に渾身の力で叩き込まれた。

「かはっ……………」

相性差、攻撃力の底上げ、ライトから受けたダメージの関係で一撃でボスゴドラは気絶した。

「やった……………」

力を使い果たしたライトはその場に倒れ込む。

ザンの方を見ると、ザンも達成感に満ち溢れた顔をしていた。

しかし次の瞬間、突然ザンが吹っ飛んだ。

依頼27：VSボスゴドラ、相性差（後書き）

よく考えたら、初めてポケモンバトルを書きました。

ライト

「え？」

今までのバトルは全部武器ありだったからね。

今回は武器を使わないライトとコラボキャラだったから純粋なポケモンバトルになりました。

ライト

「あ、なるほど」

さて、ザンの身に一体何が？

ライト

「次回分かるはずですね」

次回予告はしない主義だからここで終了ね

ライト

「え！？ちよっ……………」

それではお楽しみに！

ライト

「強制終了ですか（汗）」

依頼28：VSネイティオ！未来予知を破れ！（前書き）

前回と同じ時間からのスタートです。

依頼28：VSネイティオ！未来予知を破れ！

戦闘で最も重要なことは何か。一撃の重さ？手数？反応の速さ？

おそらく、全てが重要だろう。しかし、基本的に必須なのは、“確実に攻撃を当てる”“確実に攻撃をかわす”の2つではないだろうか？

今、カイル達と対峙している相手は、その片方を極めていた。

「ハッ！」

「シャドーボール！」

カイルが大剣をネイティオ目掛けて振り抜き、ユンゲラーが黒球を放つ。

「ナイトヘッド！」

しかし、ネイティオは斬撃を軽くかわしながら閃光を放ち、シャド
ーボールを相殺する。

「……………ここまで当たらないなんてな」

「クソツ！何で当たらないんだ!？」

先程からずっと攻撃を続けているが、全く2人の攻撃は当たらない。
カイルの剣術はかわされ、ユンゲラーの遠距離攻撃は相殺されてい
るのだ。

「私に単純な攻撃は通じない。大人しく殺されてくれないか？」

「ほざけ」

「俺が抵抗しないで殺されると思ってるのか？」

カイルとユンゲラーはネイティオの忠告を無視し、再度構える。

「……………無駄な事を」

「無駄かどうか、試してみるか？」

カイルはドラゴネスを水平に構え、息を整える。

「ユン、援護を頼む」

「分かった」

ユンゲラーのユンが頷くのを確認すると、カイルはネイティオに向かって走り出した。

「怪しい風！」

ネイティオはカイルにエネルギーの込められた風を放った。

「光の壁！」

しかし、ユンの作り出した光の壁がカイルの前方に出現し、風を遮る。

「ナイス、ユン」

カイルはそう言うと大きく跳躍し、ネイティオの正面に着地する。

「いくぞ！中級剣技ノ四 - 交双閃！」

カイルはネイティオを×状に斬りつけようとするが、ネイティオは体を捻って回避する。

しかし、カイルは大して驚くことなく大剣を引きつける。

「さらに初級剣技ノ参 - 連刺突！」

続いてカイルが放ったのは連続で繰り出される刺突。

が、ネイティオはひらひらと刺突を回避していく。

「シャドー……」

「更に中級剣技ノ参 - 竜巻！」

ネイティオはシャドーボールを放とうとするが、カイルの旋回しながら振り回される大剣により中断された。

ネイティオは素早く攻撃範囲から離れる。

(よし！)

カイルは回転を止め、ドラゴネスを足元に落として刀に手を掛ける。

「中級剣技ノ壱 - 居合い！」

抜き放たれた刀をネイティオはかわそうとするが、剣技を連続で避け続けた上に居合いで剣速が増しているため、完全に回避できずに浅く斬られる。

「……やるな」

「当たり前だ。連続剣技を避けられてたまるか」

ネイティオは追撃を防ぐために後退した。

「シャドーボール！」

突然、黒球がネイティオに飛来する。

「……小癩な……」

命中寸前にネイティオの姿が消えた。

「なっ！？」

命中すると思ったユンは驚く。

「！……！」

ネイティオが現れたのは……カイルの背後。

「妖しい光！」

「ぐっ！」

ネイティオから発せられた光がカイルを支配しようとするが……

「あああああ……！」

カイルは刀を逆手に持つと、自分の肩に突き刺した！

刀身の三分の一程がカイルの肩に突き刺さり、カイルの意識は痛みにより覚醒する。

「痛みで支配から逃れるとは……………」

「甘く見るなよ……………」

カイルは刀を抜いて投げ捨て、大きく息を吸う。

「ユン！大剣をよこせ！」

カイルの声が届いたユンは急いで大剣を念力でカイルの方に飛ばす。

「させん！」ネイティオはシャドーボールを飛来するドラゴネスに向かつて飛ばす。

黒球は大剣に命中。大剣を弾き、阻止した。

「近くが注意散漫になってるぞ？」

カイルはネイティオに接近し、目をとじる。

(少しだけ、使うか)

カイルが目を開いたときにはカイルの拳はネイティオの腹にめり込んでいた。

目を見開くネイティオの目の前にいるカイルの瞳は、新緑に染まっている。

「お前は未来予知で動きを読んでかわしていたんだろ？ だったら、反応出来ない速さで攻撃すればいいだけだ」

カイルはそのままネイティオを上蹴り上げる。

「ユン！ やれ！」

その声でユンが3つの技を放った。

放たれたサイケ光線、シャドーボール、電撃波が組み合わさっている。

「いけ！ サンダー・サイケボール！」

いくら羽があるとはいえ、ダメージを受けて打ち上げられた状態で飛ぶのは困難である。

無抵抗のネイティオにサンダー・サイケボールが炸裂した。

「……………」

気を失っているのだろうか、ネイティオは言葉を発さず落下していく。

次の瞬間、ネイティオの姿が消えた。

「……………」

カイルとユンは素早く辺りを見回す。

「銀色の風」

ネイティオがテレポートしたのは、戦闘を終えた直後のザンの背後。ザンは抵抗する間もなく、銀色の風をモロに食らって吹っ飛ばされてしまった。

「っ…… 10万ボルト！」

すぐ近くにいたライトがネイティオに電撃を放つ。

しかしネイティオは再びテレポートし、倒れているボスゴドラの所にワープする。

そして、ボスゴドラに触れてまた姿を消す。

そして次は…… グライオンの所に。

「電撃波！」

「水鉄砲！」

ワープしたネイティオに放たれる水流と電撃。ゼルとルリの攻撃だ。

しかしそれは何かによって遮られた。それは……

「っ……結構効くじゃねえか」

気絶していたボスゴドラである。

「ボスゴドラ、一旦引くぞ」

ネイティオの言葉に渋々ボスゴドラは頷く。

「待て！」

ネイティオ達が声の主の方を向いた。

そこには、ユンとカイルの姿が。

「これだけやっといておうちに帰れると思っちなよっ」

カイルがゆっくりと腕を回す。

「逃がすわけにはいかない！」

ユンも息を整える。

「……………次は必ずお前達を殺す」

ネイティオが睨みながらグライオンとボスゴドラに触れる。

「大文字！」

「サイケボール！」

「マジカルリーフ！」

「ソニックブーム！」

4人の攻撃が炸裂し、爆発する。

しかし、煙が晴れたところにはネイティオ達はすでにいなかった。

依頼28：VSネイティオ！未来予知を破れ！（後書き）

カイル

「逃げられた……………」

どんまい。

カイル

「ザンは大丈夫なのか？」

多分大丈夫

カイル

「何故多分（汗）」

漢字だけだと中国語みたい（笑）

カイル

「……………で、次回は？」

次回はね、忘れてるかもだけど依頼だよ。

カイル

「すっかり忘れてたな（汗）」

依頼29：ルリも仕返しとかしますよ？（前書き）

カイル

「何で昨日更新しなかったんだ？」

「すみません……バトル終わった直後にスランプに陥りました。」

カイル

「コラボ中だろ？」

「いや、そうなんだけどね。」

「やっぱりバトルが終わるとテンション下がります。」

カイル

「反省して、これからは執筆しろよ？」

イエツサア（、ー、（ゞ

「あ、一つ連絡が。」

「実力考査があるので更新スピードが暫く落ちます。ご了承下さい。」

「では、どうぞー！」

依頼29：ルリも仕返しとかしますよ？

～隣町～

現在カイル達はレスタウンの隣町の居酒屋にいる。

レスタウンは破壊されてしまったし、皆怪我してしまったため隣町に戻って来たのだ。

ちなみに、テーブルを囲んでいるのはユン、ゼル、ルリ、そして…

……

「……………」

椅子に座ったままピクリとも動かず、腕を組んで死んだように眠るカイル。

ザンは怪我が他の5人より酷く、病院にいる。

ユン達が居酒屋にいるから分かると思うが、命に別状はない。

ライトはボルテッカーで体を酷使しすぎたため、病院にいる。

カイルもタイラント・アイを使用したため凄く消耗していたが、大

丈夫だからと居酒屋まで来たのだ。

だが、凄まじい眠気に負けて眠ってしまったのである。

「えっと、自己紹介がまだでしたね。私はルリといいます」

ルリがそう言って軽く頭を下げる。

「さっき言ったから分かると思うけどボクはゼル。で、こっちのユンゲラーがユンだよ」

「ってゼル！何で俺の紹介もしてるんだよ！」

なかなか良いツツコミをするユン。しかし

「自己紹介は手早く済ませて本題に入った方がいいでしょ？」

というゼルの正論に撃沈。少し不満そうだが、文句は言わなかった。

「こっちのバクフーンは私達の師匠のカイルです」

2人のやりとりに苦笑しつつ、眠っているカイルの紹介も行っルリ。

というか、カイルははっきり言って居る意味がない。

「そっいえばjokersとか聞いたんだけど、それって何？」

ユンがjokersの言葉を口にし、ルリは驚いた。

jokersは一応裏の仕事を行う組織である。そのため、あまり世間には知られていないのだ。

「……jokersについては私もあまり知りません。師匠はjokersの一員ですが、私とライト君は違うので………」

「……そうか」

「知っていることと言えば、裏では有名な何でも屋ということくらいですね」

ユンは何か考えるように腕組みをする。

「ユン君達は何でネイティオ達に立ち向かってたんですか？」

今度はルリがユン達に聞いた。君付けなのはルリだからしょうがない。

「え〜と、ミミロップの女の子を庇ったからかな？」

ネイティオ達と戦う前を思い出しながらゼルは言う。

「ミミロップの女の子……ですか？」

「ああ。それがどうしたんだ？」

ユンが首を傾げるが、それを気にせずにルリは刀を抜く。

そしてカイルの方を向くと……

「起きてください師匠！」

そう言って刀の柄を思いつきりカイルの頭に振り下ろした。

ゴツという鈍い音の後、頭を抑えながら椅子から滑り落ちるカイル。

「い……いきなり何するんだお前……」

凄まじい痛みと最悪の起床という状況を作り出したルリをカイルは思いつきり睨む。

「任務について分かったことがあったので、起こしただけですよ？」

ルリは悪びれずに言う。どう考えてもわざとである。

カイルは最後にルリを一睨みすると、ユン達の方に向き直った。

「……右耳に赤いリボンをしたルリと同年くらいのミニミロップの女の子を探してるんだが、知ってるのか？」

実は、特徴は昨晚マティスに電話で聞いていたのだ。

「右耳に……」

「赤いリボン……」

「あの時のミニミロップじゃん！」「」

どうやら、ユンとゼルは見たことがあるらしい。

バトルリーグ！を見ていただけるとよく分かります。

「いつ、どこで会って、どこに行ったんだ？」

カイルは大して驚くことなく聞く。目撃者なんて腐るほどいるからだ。

問題は、使える情報を持っているかどうかである。

「えーと、確か、アンタ達に会う五分前くらいだったような……」

「会ったのはネイティオ達と戦ってた場所だったよ」「」

ユンとゼルはなんとか思い出す。

「逃げていったのは……………確かこの町の方角だったよな……………ゼル？」

「多分……………そうだったよ」

2人ともうる覚えだが肝心の情報は手に入った。

（俺達はこの町からレスタウンに行ったんだが……………運悪く会わなかったみたいだな）

そう考えると、カイルは立ち上がった。

「俺はこれから情報収集をする。出来れば手伝って欲しいんだが……………どうだ？」

カイルはユンとゼルに目を向ける。

「これも何かの縁だし、手伝うか！」
「ボクも構わないよ！」

「そうか。助かる」

カイルは頭を頭をさすりながら言う。さっきの痛みがまだ響くらしい。

「じゃあ俺とユンが施設関係の聞き込み、ルリと……名前何だ？」

自己紹介の時に寝てたのでゼルの名前が分からないカイル。

「あ、ボクはゼルです」

ゼルは苦笑いしながら名乗った。

「分かった。じゃあルリとゼルは街中での聞き込みをしてくれ。何か分かったらこの酒場に来てくれ」

カイルの指示に皆が頷く。

「よし、行動開始だ！」

その言葉でカイルとユンは病院に、ルリとゼルは街の商店街に向かった。

依頼29：ルリも仕返しとかしますよ？（後書き）

ルリ、やるねえ〜（笑）

ルリ

「仕返しも必要ですよ。修行でボコボコにされてますから」

寝ている隙に思いっきり殴るとは…（汗）

ルリ

「でも、揺すつたくらいじゃ起きないんでしょうがないです」

やり過ぎだって（笑）

ルリ

「一応全力＋全体重かけてやったので（笑）」

全体重って、ルリ何キロ？

ルリ

「……………女の子に体重聞くのは失礼ですよ？」

あ、ゴメンゴメン。謝るよ、謝るから双剣を構えないで。

ルリ

「

え、何その笑顔。目が笑ってないのが気になったり……………ちょ、近づかないで！やめろ！やめろおおおお！

作者、永眠

依頼30：聞き込み（前書き）

カイル

「更新遅かったな」

だってテストだったからさ……

読者の皆さん、遅れてすいませんでした。

しかも、今回グダグダです。

カイル

「おいおい（汗）」

とりあえず、どうぞ！

依頼30：聞き込み

二手に別れてミミロップの情報を集めることにしたカイル達。

カイルとユンは、病院に来ていた。

事件の負傷者が入院しているため、もしかすると有力な情報が手に入るかもしれないとカイルが踏んだからだ。

それにはライトとザンも入院しているので、お見舞いも兼ねてである。

「さてと……ユンは入院してるポケモン達に聞き込みをしてくれ」

病院につくなり、カイルはそう言った。

「カイルは何するんだ？」

「俺は受付や待合室を聞いて回ったりする」

といってもこの病院はそこまで大規模でないため、明らかにカイルの方が楽である。

「……もしかしてオレに面倒な方押し付けてないか？」

「気のせいだ。ついでにライト達の様子も見に行ってくれ」

「ザン達のお見舞いか。ってさらに増やしてるよな？」

「気のせいだ」

なんとかユンに面倒な方を押し付けるカイル。何故かというと……

(……まだ結構痛むな……)

そう、タイラント・アイを使用した際のダメージがまだ蓄積しているのであまり動き回りたいくないのである。
ちなみに、ルリの一撃が効いたのもある。

「じゃ、頼んだぞ」

ユンの肩を軽く叩いて言うカイル。

ユンは不満そうだったが渋々頷いた。

「よし、俺も情報収集やるか！」

ユンが行ったのを確認すると、カイルは病院の受付に向かった。

「ちょっといいですか？」

カイルは受付のラッキーに話しかける。

「はい、何でしょうか？」

「この病院に右耳に赤いリボンをした14〜17歳くらいのミニロップが来ませんでしたか？」

「うん、来ていないと思いますよ？」

ラッキーは少し考えてから言った。

「……そうですね。ありがとうございます」

カイルはそう言って受付から離れた。

「チツ……収穫無しか。多分待合室にもロクな情報が無いだろっな」

カイルはそう考え、待合室の一つの椅子に腰掛けた。

（眠いな……寝るか）

傷の癒えていないカイルは、そのまま夢の世界へと旅立った。

カイルが眠り始めてから約30分後、カイルは頭に強い衝撃を受けた。

威力は大したことなかった。ただ、当たりどころが悪かった。

居酒屋でルリが殴った場所にピンポイントで何かがヒットしたようで、カイルはやや呻きながら目を開いた。

カイルの視界には、戦闘用のスプーンを振り下ろした姿勢のユンがいた。

「……………何やってんだ」

「え、こうしないと起きないかと思ったんだけどな」

カイルの少し怒りの入った口調を気にすることなくニヤニヤしながらそう言うユン。

「ま、オレが聞き込みしてた間に寝てたんだから文句は言えないよな？」

「悪かったな。それより俺を起こしたってことは、何か分かったのか？」

カイルがそう聞くが、ユンは首を横に振った。

「全員に聞いたけど、この町に逃げてきたってことしか分からなかった」

「マジかよ……」

有力情報無し、というユンの報告にため息を吐くカイル。

「そういえば、ザンとライトはもう退院できるらしいけどどうするんだ？」

その言葉に、カイルはガバツと体を起こした。

「よし、すぐに退院させて情報収集に協力させるぞ」

「……病み上がり関係無しなのか（汗）」

「なら俺も病み上がりだ。入院しなかったけどな」

2人を退院させれば情報収集できる範囲がより広がるため、カイルは2人を退院させることに決めた。

ユンによると、ザンも退院したがってるらしいのでユンも反対はしなかった。

だが……

「あ、ライトはまだ爆睡して……」
「俺が叩き起こしてくる」

ライト君、ご愁傷様。

その頃ルリとゼルは、街の中でも人通りの多い商店街で聞き込みを行っていた。

だが、30分程聞き込みをしているがすでに知っている情報しか聞くことが出来なかった。

それどころかレストタウンという言葉に反応した事件の詳細を知りたがる野次馬共が寄ってくる始末。なんとか追い払いはしたが、2人には充分疲労が蓄積されていた。

「ぜ……………全然ダメですね……………」

休憩のためにベンチに座り込んだルリが言う。

「うん……………流石に疲れるよね……………」

ゼルもため息を漏らしながら言った。

ちなみに、レストタウンの大殺戮からまだ半日程度しか経っていない。

すでに日は傾いており、夕方である。

「……………ユン達、何か情報見つけてるのかな……………」

「師匠がまた寝てそんな気がします」

さすがルリ、ご名答である。

「ふ〜。それじゃあ、聞き込みを再開しましょう」

「うん、分かった」

ルリとゼルはベンチから立ち上がる。

「へへへ…お前ら、ミニロップ探してるんだろ？」

「……」

不意に後ろから聞こえた声に反応して2人は振り向いた。

そこには、ニヤニヤと笑っているジュペッタが立っていた。

「へへへ…俺、お前らの探してるミニロップの居るところ知ってるぜ」

「え！？本当ですか!？」

ゼルはいきなりの発言に驚いている。無論、ルリもだが。

「へへへ…嘘吐くわけないだろ？俺が案内してやるぜ」

ジュペッタは着いていい、と手招きしてアピールしている。

「なんか……怪しいような気がします」

「でも、もしかすると本当かもしれないし……とりあえず着いていてみてみようよ」

ルリの言う通り、明らかに怪しい。

しかし、情報の無い今、あのような発言を無視するわけにはいかない。

ルリとゼルは警戒しながら、怪しいジュペッタの後を追った。

依頼30：聞き込み（後書き）

カイル

「ジユペッタ怪しいな」

怪しいのです。何かありますよ勿論。

カイル

「なんか、読めるんだが」

フエイントでいくから大丈夫！
と見せかけて単純にいくかも……

カイル

「どっちだよ（汗）」

しかし、今回はなかなかの長編コラボになっております。
予定では、あと3話くらいで終わるかな？ってところです。

カイル

「ちゃんと執筆しろよ？」

任せな！

カイル

「ま、所詮ダメ作者だしな。期待せずに待って下さい」

……なんか、カイルの敬語って違和感あるよね（汗）

依頼 3 1 : 古い倉庫 (前書き)

ジュペッタにルリ達を着いていつているころ、カイル達はどうと

……

依頼31：古い倉庫

ジユペッタに連れられてルリとゼルが歩き出した時、カイル達は商店街へと向かっていた。

「ゼルが何か見つけてればいいんだけどな」

「結局、病院での収穫はこいつらの退院だけだな」

ユンと話しながらカイルは自分の隣にいるザンとライトを見る。

ザンはやっと退院できたので楽しそうにニコニコしながら歩いているが、逆にライトは涙目でタンコブのできた頭をさすっている。

「どうしたライト、頭が痛いのか？」

「師匠が殴ったからですよ！」

ニヤニヤしながら聞くカイルに涙目で怒鳴るライト。

実は病院でザンとバトルをし、その後退院する時に爆睡していたライトの頭をカイルの拳が強打したのであった。

「うつ……あんなに強く殴ることないじゃないですか……」

「病院でバトルするからだ」

「な……ならザンだって……」

「ザンは俺の弟子じゃない」

口で勝てないライトはカイルを精一杯睨みつけるが、カイルに無視されてしまった。

「そついえばお前ら、家族は大丈夫なのか？」

「「え？」」

カイルの何気ない問いかけに2人とも足を止める。

「ん？お前らレスタウンのポケモンじゃないのか？」

思いがけない反応にカイルとライトも歩く足を止めた。

「いや……」

「オレ達はプルーフを集めるために旅をしてるんだ」

どうやら、ユン達3人はレスタウンのポケモンではないらしい。

ちなみにブルーフとはジムバッチのようなもので、8つ全てを集めるとバトルリーグというポケモンリーグのような大会に出場できるのである。

「ブルーフか。今いくつ集めたんだ？」

カイルがそう聞くと、2人はやや言いにくそうに

「1つ」

と答えた。

「ってことはまだ駆け出しか。頑張れよ」

「ああ、絶対に全部集めてバトルリーグに出場してやるさー！」

ユンは力強く答えると、隣にいるザンも頷いた。

「ねえ……早く行かない？」

1人だけ会話に入れず仲間外れになっているライトが言う。

先程から無意識のうちに足を止めていたカイル達は、その言葉で再び歩を進め始めた。

……とまあ、そういうしてる間に商店街に到着したわけだが……

「そういえば、ゼル達どこにいるか分かんないな」

「……だな。二手に別れて、情報収集兼ルリ達の搜索だ」

ということ、二手に別れることに。

勿論カイルとユン、ライトとザンだ。

「……あれ？そういえば酒場集合じゃありませんでした？」

ライトが首を傾げながら言う。

「まだ集合するには早いだろ。だから俺達もここで情報収集するんだよ」

「あ……なるほど」

ライトが納得したのを確認すると、手をパンパンと叩きながらカイ

ルが言う。

「質問がないなら行動開始！さっさとしろ！」

「……どこの教師だよ（汗）」

ユンがため息とともに突っ込みを入れる。

「へへへ……ここだぜ」

ルリとゼルがジユペッタに連れてこられたのは、人通りのほとんどない場所にある古い倉庫だった。

ちなみに、大型のポケモンが何体も入れるくらい大きい。

「へへへ……俺が案内できるのはここまでだ。入るかどうかはお前達が決めるんだな」

ジュペッタはそう言うつとルリ達の後ろに下がる。

「……どうする？」

「……行きましょう。本当にいるという可能性も無くはないですし」

ルリの言葉に同意するようにゼルは頷いた。

「この中に危険はありますか？」

ルリは振り返り、ジュペッタに聞いてみる。

「へへへ……あるかもな。怖いのなら退くがいいさ」

ジュペッタが試すように言う。

「……ゼル君、覚悟はいいですね？」

「うん。危険でも、グライオンを倒せたボク達ならなんとかなるかもしれないし」

ルリは頷くと、倉庫の大きな扉の取っ手に手を掛けた。

「3つ数えて突入します。いきますよ。1……………2……………3！」

勢いよく扉が開け放たれ、中に飛び込む2人。

そこには……………

「フン、ガキか。まあ憂さ晴らしにはもってこいだな」

ルリ達の正面に1人のアーマルド。そして、扇状に五匹のモンジャラがいた。

そしてその奥には……………

「あっ！赤いリボンのミニロップだ！」

ゼルがアーマルド達の後ろにいる、ロープで拘束されて猿ぐつわを噛ませられているミニロップを指差した。

右耳にはしっかりと赤いリボンが結ばれている。

しかし意識がないのか、目を閉じて動いていない。

「ガキ共、どうやらミニロップを連れ戻しに来たようだな。悪いがお前らは俺達のサンドバッグになってもらおうか」

ゼルの言葉から判断したアーマルドが言う。

「へへへ………こうも簡単に引っ掛かってくれるなんてな」

「……………！」

その言葉で後ろを振り返ると、扉を閉めてかんぬきを掛け、相変わらずニヤニヤと笑っているジュペッタがいた。

「……やっぱり、仲間でしたか」

ルリがゆっくりと双剣を抜きながら言う。

「へへへ……だがミニロップはいるんだぜ？俺達を倒して取り返せばいいだろ？」

そう、ジュペッタの言う通りミニロップは発見した。

しかし出口は塞がれ、7対2と数では圧倒的不利な状況である。

「……やるしかないよね」

ゼルもそう言って、臨戦態勢に入る。

「いくぞガキ共。モンジャラ達は援護しろ」

「Roger!」

モンジャラ達もアーマルドの指示にツルのムチで敬礼し、構える。

ゼルとルリも背中合わせになり、ルリがジュペッタ、ゼルがその他と対峙する状況になった。

「早く終わらせて援護します」

ルリはそう言うと、真っ直ぐジュペッタに突っ込んだ。

「中級剣技ノ四 - 交双閃！」

ルリがジュペッタを×状に斬りつけるが、刀はジュペッタをすり抜けてしまった。

「へへへ……ゴーストタイプの俺に物理攻撃が効くわけないだろ？」

そう、ルリやカイルの剣術はノーマルタイプの攻撃と同じ。なのでジュペッタのようなゴーストタイプには当たらないのである。

「へへへ……シャドーボール！」

「こちらもシャドーボールです！」

お互いの放った黒球が衝突し、小さな爆発を起こす。

ルリは素早く爆煙の中に突っ込み、ジユペッタに接近する。

「中級剣技ノ四・改 - 黒交双閃！」

シャドーボールで双剣をコーティングし、それでジユペッタを斬りつけた。

「ゲッ……………」

爆煙のせいでルリの接近に気付かなかったジユペッタは斬撃をモロに受けて吹っ飛ばされた。

弱点を突かれているため、ダメージもそれなりに大きい。

だが、相変わらずジユペッタはニヤニヤと笑っている。

(……………何かあるんでしょうか?)

ルリは一旦ジュペッタから離れるために後ろに跳躍する。

しかし、そのルリの足に何かが絡みついた。

「……！」

ルリが慌てて足に目を向けると、緑色のツタが足に巻きついている。

そのままルリはツタに引っ張られて床に落ちてしまった。

「くっ……」

落ちた痛みに耐えながら立ち上がるうとするルリだが、ここで自分の状況に気付いた。

なんと、モンジャラ二匹に挟まれる格好となっている。

「しまっ……」

そして同時に体に走る痛みに気づき、そのせいで力が入らないことにも気付いた。

そのままモンジャラのツルのムチがルリに絡みついでいき、あつと言つ間に身動きできなくなつてしまつた。

「へへへ……どうだ俺の“呪い”の効果は」

拘束されたルリに歩み寄るジュペッタ。

「呪いですか。通りで体が痛いと思ひました」

ルリは冷静を装つてジュペッタに応える。

ルリは横目でゼルの方を見ると、ゼルもモンジャラに拘束されてい

た。
（マズイです……このままじゃ本当にサンドバッグになつちやいますね）

ルリはなんとか拘束から脱出できないかと考えるが、手足も口々に動かせない状況では無理であつた。

ルリとゼル、絶体絶命………

依頼31：古い倉庫（後書き）

ライト

「ヤバい状況ですね」

ここから、いくつかパターンがあります。

一つ目、ルリ達がフルボッコにされる。

ライト

「……え？」

二つ目、誰か助けに来る。

ライト

「普通、それじゃないですか？」

三つ目、なんらかの奇跡が起きる。

ライト

「……は？」

とまあ、おふざけはこのくらいにしておこう。

ライト

「ふざけてたんですか（汗）」

まあ、なんとかなります（笑）

というか、眠いのでこの辺で……（――）・○○

ライト

「自己中ですね（汗）」

依頼32：倉庫での戦い（前書き）

今回は長めです。

依頼32：倉庫での戦い

モンジャラ達に動きを封じられ、絶体絶命のルリとゼル。

「へへへ……残念だったな。」

拘束されたルリの前でジユペッタがニヤニヤしながら言う。

「……モンジャラに不意打ちさせるなんて卑怯ですね」

ルリはジユペッタを睨みつける。

「へへへ……俺は知らねえよ。優しいモンジャラ達が助けてくれただけさ」

ジユペッタはルリの言葉を気にすることもなく笑い飛ばした。

「さて、まずは……」

アーマルドが爪を擦り合わせながらゼルに近づく。

ルリとゼルはアーマルドがゼルを爪で切り裂くのではないかと予測した。しかしアーマルドは

「モンジャラ、こいつらを眠らせる」

と言った。

おそらく眠らせた方が抵抗しないから、とでも考えているのだろう。

「r o g e e r」

モンジャラ達はアーマルドの言葉通り、眠り粉をルリとゼルに向かって飛ばした。

「うっ！」

「ゴホッ、ゴホッ！」

瞬間間に緑色の粉が2人を包み込み、大量に吸い込んだ2人の意識は次第に遠くなっていく。

(……………このまま眠るワケには……………)

ルリは必死に頭を振って眠気を飛ばそうとするが、眠り粉の効力は凄まじく、ルリはそのまま意識を失った。

その頃、カイル達4人はルリとゼルがいる倉庫に向かっていた。

「あの情報、本当ですよね？」
ライトが走りながら言う。

カイル達は先程、この町で騒ぎをたまに起こす厄介者達のアジトにキルリアとブイゼルが連れて行かれたという情報を手に入れたのだ。

「多分、間違い無いだろう。」

「あ、あれがそうじゃないか？」

カイルがライトの問いに答えると同時に、ユンが人差し指で1つの倉庫を指す。

それは大きな古びた倉庫で、人通りの無い場所にある。まさにアジトにはうってつけだ。

「よし！中に入ろう！」

ザンがそう言っつて倉庫の大きな扉を押すが……

「あ、あれ！？開かない！」

「どけ！」

必死に大きな扉を押すザンをカイルが押しつけ、右拳を固めて突き

出す。

「爆裂パンチ！」

大きな炸裂音が響くが、それでも扉はやや凹むだけで開かなかった。

「し、師匠でも開けないんですか!？」

ライトがあまりの頑丈さに啞然とする。

その時、ふとユンが視線を上にする。

「なあカイル。上から壊せないか？」

ユンが高い屋根を指差して言う。

「なる程。扉が堅すぎるんなら屋根を壊せってか。ユン、テレポーターであそこに移動するぞ」

「よし、やっと憂を晴らしができるな」

「へへへ……そうだな」

アーマルドとジュペッタは眠っている2人に攻撃しようとするが、

ガタガタッ

不意に扉から聞こえた音に反応して振り向いた。

「……誰か来たのか？」

「へへへ……こりゃ不味いな。とつとと逃げるか」

ガアアアン

その瞬間、扉に炸裂音が響く。

「あの扉はそう簡単には壊れないから大丈夫だろう」

「へへへ……警察かもな。さっさと逃げようぜ」

「ああ。モンジャラ、あのミニロップも連れてこい」

アーマルドが命令すると、モンジャラは敬礼してミニロップの元に向かった。

「ちて、どじちて逃げ……」

しかしアーマルドの言葉はそこで途切れた。

何故なら、炸裂音とともに突然倉庫の天井に風穴が空いたからだ。

そして、その穴から次々と飛び降りてくるポケモン達。

カイル達は見事倉庫に入ることになった。

倉庫の屋根を破壊し、中に飛び降りて床に着地する。

幸いにも天井はあまり高すぎず、無事に降りることができた。

「予想はしていたが……残念な状況だな」

アーマルド達と床に倒れ、眠っているルリとゼルを見てカイルは言う。

「なあ、あれってもしかして……」

ユンが奥に横たわるミニロップに目をやる。

「つまり、こいつらを倒せば任務完了ってワケだ」

カイルはそう言って背負っているドラゴネスを抜いた。

「ゼル達を倒した相手だからね……油断は禁物だよ」

ザンも構える。が……

「へへへ……ガキだけで俺達に刃向かおうってか？」

ニヤニヤとザンを見るジユペッタ。

その途端、ザンの顔がみるみる青くなっていく。

「お、オバケエエエエ……！」

ザンはそう絶叫すると、何故かジユペッタに向かって走り出した。

「おい！何やってんだ……！」

カイルが叫ぶもザンの耳には届かない。

「ゲツ！？モンジャラ共、俺を守れ！」

「r o g g e r r !」

ジユペッタの声でモンジャラ三匹がザンとジユペッタの間に立ちふ

さがった。

「うわああああ！切り裂く〜！」

ザンが狂ったように腕を振り回す。

しかし、そのおかげでモンジャラ達のつるのムチがザンに巻きつき、
ずに返り討ちにされた。

「チツ！あいつらはザンに任せて残りをやるぞ！」

カイルは暴れ回るザンを放置し、アーマルドに向かって走り出す。

「僕は師匠の援護をするからあつちは任せたよ」

ライトはザンの方を指差し、カイルの後を追う。

「……またオレに厄介事押し付けてるよな？」

ユンはため息を吐くと、ザンの援護をするべくザンが戦っている方
を向いた。

「ハッ！」

「ぬん！」

お互いの気合いと共に大剣と爪が弾き合う。

やはりアーマルドにネイティオ達程の実力はないらしく、アーマルドはやや追いつめられていた。

しだいにアーマルドの攻撃が衰えていくが、カイルは初撃からずつと変わらない。

「……もう少し楽しませてくれよ。この町の厄介者と呼ばれてる割にはたいしたことないな」

カイルがつまらなそうに言う本音に、アーマルドはキレた。

「てめえ……少し腕が立つからって調子に乗るなよ！！」

アーマルドが大きく息を吸い込む。

(まさか……破壊光線か？こんなところで撃つたら倉庫が崩れるぞ！)

しかしアーマルドはそのままチャージを続ける。

「撃たせるか！」

カイルはアーマルドに斬りかかるが、アーマルドのほうが早かった。

「うわっ」と…

ライトはギリギリでつるのムチをかわす。

ライトはモンジャラ二匹と戦っていた。カイルの援護をしようと思っただが、カイルにとっては1対1のほうがやりやすい。なので、自分を取り巻きを引きつけることにしたのだった。

(相性では向こうが有利だけど、スピードは僕の方が断然上だから

勝てないこともないね)

ライトは持ち前のスピードで片方のモンジャラの後ろをとる。

「アイアンテール！」

そして硬化させた尻尾を叩きつけて吹っ飛ばした。

吹き飛んだモンジャラはもう片方にぶつかり、二人仲良く壁に叩きつけられる。

「さらに雷！」

ライトは怯んだ相手に強力な電撃を放ち、モンジャラ達は目を回して倒れる。

しかしそんなことには気付かずにライトはモンジャラに突進した。

「仕上げにボルテッカー！」

ライトのボルテッカーで気絶しているモンジャラは抵抗も出来ずに再び吹っ飛ばされた。

「あれ？ちよつとやりすぎたかな？？」

ライトが首を傾げて気絶しているモンジャラに目をやる。

しかしすぐに興味をなくし、カイルの方に目をやると……………

ライトの目には今にも光線を発射しそうなアーマルドと斬りかかるカイルが映った。

カイルの目には、口の中に白く眩しい光を蓄えているアーマルドが見えていた。

カイルの判断は一瞬。そして、すぐにそれを行動に移す。

カイルは素早く足を止めてドラゴネスの腹をアーマルドに突き出す。

その瞬間、アーマルドの口から破壊光線が発射され、カイルの盾にしているドラゴネスにぶつかった。

「うおっ!!」

あまりの威力にカイルは必死で踏ん張る。しかしそれでもガリガリと音を立ててカイルは押されていく。

「くっ……スピードスター！」

このままでは保たないと判断したカイルはスピードスターを放ち、アーマルドの妨害を試みる。

「がっ!？」

その試みは成功し、スピードスターが頭部に命中することでアーマルドは破壊光線を中断された。

そこから反撃に移るべくカイルは大剣の状態を確認する。

(……さすがミスリル製。傷一つ付いてないな)

確認し終わると、反動で動けないアーマルドに接近。大剣で思いっきりアーマルドの頭を殴りつけた。

「かはっ……………」

アーマルドは凄まじい衝撃に耐えきれず、目を回して気絶してしまっただ。

「ふう……………危なかった」

カイルが辺りを見回すと、気絶しているジュペッタ達の近くに座り込んでいるユンと目立った傷がないのに気絶しているザンが見えた。

「ハハハ……………任務完了だな」

依頼32：倉庫での戦い（後書き）

さて、いよいよ次回でコラボは終了……かも？

ライト

「かも？ですか？」

予定では、だから。

さてと……どうやって締めようかなあ……

ライト

「決めてないんですか!？」

無計画だからこそ僕だw

あと、やっぱりバトルシーン描くのは燃えるね!

ライト

「別の意味でバトル好き、ですね（笑）」

依頼33：任務完了。そして (前書き)

締め方がセンスなさすぎです。すみません

依頼33：任務完了。そして

「とりあえず殲滅完了だが………なんでザンが気絶してるんだ？」

戦いを終えたカイルはユンとザンに歩み寄りながら言う。

まあ、気絶しているにも関わらずザンには目立った傷もないため、無理もないだろう。

「そりゃ、怖がりだから」

とユンは笑いながら答えた。

どつちらぜん、相当怖い物が苦手らしい。

「ハア……意識が無いのが4人もいるのか。とりあえず、ミニロップを何とかするか」

カイルはそう言うと、倉庫の奥にいる拘束されたミニロップの方に向かった。

意識のあるユンとライトもカイルを追うことに。

「おい、起きろ」

カイルはそう言ってミミロップの頬を軽く叩く。

「……………ん……………」

ミミロップは気がついたのかゆっくりと目を開ける。

が、目の前にいるのは武装したバクフーン。驚くのも無理はなく、目を見開いてカタカタと震えだす。

「オ、オレ達は悪い奴らじゃないって！オレを覚えてないか？」

その様子に気付いたユンが慌ててミミロップに言う。

どうやらユンはこのミミロップと面識があるようだ。

ユンの言葉のおかげか、ミミロップは震えなくなったが、不安そうにユンを見ている。

「さて……この拘束を解かなきゃな」

カイルはそう言うと、何故か腰の刀を抜いた。

確かに拘束を解くのは分かる。だがなんで刀が必要なのだ。

ライトはそう思った。が、そこで気がついた。

「師匠、もしかして……」

「ああ、縄を斬る。そのほうが手っ取り早い」

やはりライトの思った通りだった。

ミミロップは会話を聞いたのか、再び震えだした。そして、懇願するような目でユンを見る。

「なあカイル、やっぱり……」

「却下」

ユンは可哀想だと思ったのか、カイルに話し掛けるが、勿論カイルは耳を貸さなかった。

「よし、一瞬で終わるから我慢してくれよ？」

そう一言言い、カイルはミリロップ目掛けて刀を振り抜いた。

ライトは思った。このミニロップの師匠に対する第一印象は最悪だ、と。

ミニロップは現在、もの凄い勢いで泣いている。

今まで監禁されていたことが怖かったのもあるだろうが、カイルの斬撃が恐ろしかったのも事実だろう。

ちなみに、カイルは見事猿ぐつわとロープをミニロップを傷付けることなく斬った。

今の状況はというと、ユンとライトで必死にミニロップを慰めている。

カイルはミニロップに一言だけ謝ると、尋問する、と言って気絶しているアーマルドを物置らしき場所に連れて行ってしまった。

「おっ、俺が悪かった！何でも言うつから許し……………ぎゃああああ
！！」

……これ、尋問じゃなくて拷問だよな？

ライトは悲鳴の聞こえてきた物置に目をやる。

悲鳴を聞き、ビクッとしたミミロップはやや泣き止んできたというところだ。

ライトはユンと顔を見合わせると、ただ苦笑するしかなかった。

「久々だったから少し時間が掛かったな」

アーマルドの尋問（拷問？）を始めてから約五分後、カイルはそう

言いながら物置から出てきた。

カイルに引きずられているアーマルドは口から泡を吹き、目を回して気絶しているようだ。

「とりあえず分かったことから説明するぞ」

カイルはアーマルドをその辺に投げ捨てる。ライト達の前には座った。

ライト、ユンもそれに合わせて座る。

ミニロップはすでに座り込んでいた。

「じゃあまず、奴らが何故ミニロップを監禁したのか、だな」

「やっぱり金目当てじゃないのか？」

ユンの推測にカイルは首を縦に振る。

「ああ。どつやら身代金目当てで元々はレスタウンに監禁したらしいんだが……………」

「あの騒ぎでミニロップが脱走した、ですか？」

ライトは隣にいるミニロップを見ながら言う。

あの騒ぎとは勿論、ネイティオ達の大虐殺である。

「そつだ。だからまた捕まえたいらしい」

カイルは腕組みしながら言った。

「でも、なんでそこまでこのミニロップに固執したんだ？」

とユンが首を傾げて言う。

確かに身代金目当てならば他のポケモンでもよいはずだ。

まあjokersに依頼した所をみると多少は金持ちのようだが、2度目ともなるとミニロップの警戒も強まるはずである。

「そのことなんだが……………」

カイルは苦笑しながらミニロップの方を向いた。

ミニロップはカイルのことを怖がっているのか、ビクッと体を震わせる。

「どつちら、そのアーマルドがお前に好意を抱いていたらしい」

「……………は？」

カイルがやや言いにくそうに言った言葉に、ライトとユンは啞然とした。

つまり、あのアーマルドは……………

「ス、ストーカーか」

かろうじて、ユンが結論を出した。

ライトは一瞬思考が停止した。

自分が始めての任務で捕まえた悪者がストーカーとは、なんだか格好悪すぎる。

ライトはそう思いつつ、ユンとミニミロップを見る。

ユンは少し顔が青ざめているようだ。

ミニミロップは口をパクパクするばかりである。

「よし、驚くのはそこまでにしろ。さっさとずらからなきや警察が来るかもな」

カイルはそう言って立ち上がると、眠っているゼルとルリを担ぎ上げた。

「ずらかるって、そんなことしていいのかよ？」

ユンがそう言うが、カイルはその言葉にため息を吐いた。

「警察に事情聴取されるのはめんどくさいだろ？匿名通報すればいいだけだ」

と、カイルが裏組織らしいことを言った。まあ、場馴れしているカイルにとっては当たり前前の行動ではあるが。

「で、ザンはどうするんですか？」

ライトは完全にのびているザンをつつきながら言う。

「俺は2人持ってるし、ライトじゃ持てないだろ」

カイルはそう言いながらユンを見た。

ライトもユンをじっと見る。

「っ………分かったよ。オレが持てばいいんだろ？」

ユンはザンを持ち上げる。

「じゃあライトは匿名通報を頼む。俺達は酒場に戻るか。幸い皆大した怪我はしてないしな」

「ああ」

「分かりました！」

ライトはすぐさま通報するために倉庫を飛び出す。

ユンは持つのは疲れるのか、念力でザンを浮遊させている。

ミミロップは黙りっぱなし。

……という訳で、カイル達は集合場所であった酒場に向かった。

〈居酒屋〉

「ケホツ、ケホツ、ってことは任務完了ですか？」

居酒屋の一つのテーブルで、ルリはカイルに聞く。

ゼルもルリと同じように咳込んでいる。

何故かというと、五分程前に2人の口にカイルとユンがカゴの実をねじ込んだからだ。

ユンも最初は躊躇っていたが、カイルがルリに無理矢理カゴの実を食わせると勢い良くゼルの口にカゴの実を叩き込んでくれた。

「ケホツ、そういえば、よくあのアーマルドが素直に喋ってくれたね」

「ああ、少し絞ったら必要ないことまで全部吐いてくれたぞ」

ゼルの疑問にカイルはニヤニヤしながら答える。

(……………何したんですか?)

ルリはその言葉から尋問・拷問したことが容易に想像できた。

ゼルは何を想像したのか、やや青ざめている。

カイルはそんな2人を気にすることなく、ミニロップの方を向いた。

「そういえば、お前の家はどこだ?」

そう、カイルの任務はミニロップの搜索。
当たり前だが、ミニロップを依頼主の家に送り届けなければいけないのだ。

「あ、私の家はこの街にあるんですよ」

「それはありがたいな」

ミニロップの答えにカイルは頷いた。

この街はあまり大きな街ではないため、送るのは容易である。

「そつえばあのアーマルドってストーカーだったんですね？」

ルリはミミロップを気にしながら言う。

「ボクはあのジュペッタの方が怪しく見えると思うんだけどね」

ゼルは苦笑いしながら言った。

「怪しいじゃなくて怖いよ……………」

「あ、やっと起きたなザン」

たった今目覚めたザンが身震いしながら言った。

隣ではユンがザンを見て笑いを堪えているようだ。

まあ確かにあのジュペッタは不気味だったのだが。

「ところで、お前らはこれからどうするんだ？」

カイルはユン達三人を見て言った。

「うーん……暫くはレストウンやこの町にいることになるな」

「あのままじゃジム戦ができないしね」

「それに、レストウンのことも心配だし」

分かると思うが、上からユン、ゼル、ザンである。

「つまり暫くは滞在するんだな」

「私達はどうするんですか？」

ユン達の予定を聞いたカイルを見て、ルリはそう質問する。

「とりあえず事務所に戻るか」

カイルはそう言って席を立った。

「さすがに長いこと事務所に戻ってないからな。任務も済んだし、そろそろ俺達に行く」

「え！？もう行くのか？」

ユンが驚いたように言った。

「悪いな。働き者の俺がいないとjokersはダメだからな」

実際、jokersの任務の五割をカイルがこなしてると言っても過言ではない。

皆さん忘れているでしょうが、深いクマもあります。

「それに、マティスに報告も」

「マティス？」

カイルの言葉をユンの疑問の声が遮った。

「ん？どうしたんだ？」

「いや、マティスって名前をどこかで聞いたような……」

「多分気のせいだ。マティスは滅多に任務をしないから普通の奴は

知らないはずだ」

ユンは腕組みをして思い出そうとしているようだ。

「どうしたのユン？」

「いや、なんでもない。多分思い違いだろ」

ゼルは首を傾げているが、ユンは何やら考えている様子。

「……………まあいいだろ。そろそろ行くぞ」

「ん、ああ。また会おうなカイル！ルリ！」

ユンが手を差し出してきた。

「別れ際に握手か。なかなかいいな」

カイルが笑みを浮かべながらユンの手をしっかりと握り締めた。の
だが……………

「痛ってー！ー！ー！！！」

ユンが飛び上がり、振りほどいた手に息を吹きかける。

「悪い。力みすぎたな」

カイルが悪びれもせずユンにひらひらと手を振る。

「……今度会った時、覚えてるよ」

「会ったら思い出すさ」

ユンが睨むが、そんなことに動揺するカイルではない。

「ジム戦、頑張ってください！」

「そっちも任務頑張って！」

隣ではルリとゼルも握手している。こちらは平和的だ。

「……あれ？ライトは？」

ザンは握手する相手がおらず、キョロキョロとしている。

「ミミロップ、ちゃんと家に帰ってきてくれよ？」

家が遠くないため、カイルは送る必要はないと判断したのだろう。

「皆さん、助けに来てくれてありがとうございました」

ミミロップはぺこりと頭を下げた。

「ライトがないけど、いいだろ」

カイルはそう言つと、居酒屋の入り口の扉を開ける。

「色々ありがとうございました！」

ルリがユン達にそう言つ。

そして、最後にカイルが一言、

「じゃあな」

そう言って、扉は閉じられた。

きっと、またいつか会えるだろう。

一時的に行動を共にしただけだが、友である彼らを忘れることはない。

彼らの物語はこれからも続いていく

依頼33：任務完了。そして (後書き)

眠いのでまた後日

依頼34：マティスの対談（前書き）

ああ……………テストなんて死んでしまえ！忌々しい！！

ライト

「急にどうしたんですか？」

実は近日、テストがあるんだよね。マジでテスト大嫌いだよ。

ライト

「勉強はいいんですか？」

やれるだけやるけど、勉強大嫌いだからね。たかが知れてる（笑）

あ、読者の皆さん、更新遅れてスイマセンでした。

作者はメタルギアというゲームに心を奪われてしまい、執筆ができませんでした。反省しております。

では、どーぞ！

依頼34：マティスの対談

カイル達がユン達と別れた翌日の朝9時。

ケネスと名乗るガブリアスの襲撃でボロボロになっている事務所の1つの机に突っ伏して爆睡しているポケモンが1人。

「くか………」

彼はjokersリーダー、バンギラスのマティスである。

あの襲撃事件からすでに半月程経っており、全員怪我は完治したため営業再開している。

342

と、その時突然玄関のドアが勢いよく開いた。

「デイン様のおなーりっ」と

そう言いながら大きな紙袋を提げたフリーデインが入ってきた。

しかし爆睡しているマティスはそれに気付かない。

「ん？なんだ、寝てるのか？」

それに気付いたフリーディンは近くに転がっている分厚い一冊の本を念力で持ち上げる。

「起きろマティス！」

そう言うと勢いよく本をマティスに飛ばした。

本は一瞬だけ滑空し、マティスの頭に衝突する。

「……………ん？」

マティスは全く痛がる様子もなく目を半分だけ開いた。

バンギラスという種族は全身が岩の鎧のようなものであるため、痛みを感じなかったのだろう。

「……………誰かと思えば、ディンか。2年ぶりだな」

「やっと起きたかマティス」

どうやらマティスとディンというフリーディンは顔見知りのようだ。

「で、これはなんだ？」

ディンは事務所内を見渡しながら言う。

壁の至る所にヒビが入っていたり、床に小さなクレーターが出来ていたりと普通ではなかったからだ。

さらに書類は散乱し、本棚も破壊されて本が散らばっている。

「ああ、これは……ちょっと変な輩が事務所で暴れてな」

マティスは頭を掻きながら言う。

「てつきり、お前が暴れたのかと思ったんだけど？」

ディンはそう言いながら近くにあった木製の椅子を念力で引き寄せ、腰掛ける。

「自分の職場で暴れるか阿呆」

と、マティスは言うが実際、ケネスとの交戦時に結構暴れていたことを忘れてはならない。

勿論、そんなことを知らないディンはただ笑うだけ。

「随分と久しぶりだが……何かあったのか？」

マティスはディンに訪ねてきた理由を聞く。

確かに数年ぶりに友人が自分の経営する何でも屋を訪ねてきたのだから、何かあったのではと思うのは変なことではない。

「別に大したことじゃない。ちょっとした世間話をしにきただけだつて。ああそうだ、これ」

ディンは手に提げている紙袋をマティスに差し出す。

「ちょっとした手土産だ」

「おう、サンキューな」

マティスは紙袋を受け取り、自分の腰掛けている椅子の横に置く。

「せっかく来てくれたのに悪いが、俺はこれから任務があつてな。そう長くは相手できないぜ?」

「任務?お前は確か、任務には出ないんじゃないか?」

マティスの言葉に眉をひそめるディン。

マティスは基本的に依頼への対処や依頼主との交渉などを行っているため、任務に赴くことはほとんどない。

「今回ののは全員でやらなきゃ厳しい任務だな。俺も久しぶりに派手に暴れてやるぞ」

マティスが立てかけてある槌を手にとって言う。

「全員?他の奴らはどうしたんだ?」

「2人は出発準備をやってる。1人は、レストアウンってところに任務で行ってるからな。多分今回はカイル抜きになるだろうな……………」

少し残念そうに言うマティス。特に今回の任務では、彼の力は必須なのだが

「レストタウンって、大量虐殺事件があった所だったな。実は私の息子がjokersに助けられたって言うてた。息子の代わりに私から礼を言う」

思考に集中しすぎて話を聞き流していたマティスは、突然ディンが頭を下げていることに驚く。

「あ、ああ。気にするな」

それを見たマティスが慌てて合わせる。

今の話から分かると思うが、実はディン、ユンの父親である。

と、その時

「マティス！準備できたぜ！」

と言いながら部屋に1人のバシャーモ ミゲルが入ってきた。

が、入ってすぐに足を止める。

「き、客が来てたのか。悪かった」

「いや、私はそろそろ帰るから大丈夫だ。jokersもいろいろと忙しそうだし」

部屋を出ようとするミゲルをディンは止める。

「悪いな。任務がなけりゃ世間話でもできたんだが……」

「いや、私は息子の礼をしにきただけだ」

そう言ってディンは立ち上がる。

「そつだ。最後にひとつ……」

「……何だ？」

「……いずれ、レストアウンで虐殺を行った者達が来るかもしれない。息子から聞いた話では、虐殺者達は息子達とjokersで追い払

っ
たらしいからな。警戒しておいたほうがいい」

「……………分かった。忠告感謝するぜディン」

「じゃあ、任務頑張れよ」

ディンはそう言つと、事務所から出て行った。

「……………誰だ今の？」

「俺の友人だ。ミゲル、ミメットを呼んでこい。出発する」

ミゲルの疑問にマティスは短く答えると、ミゲルに指示した。

マティスとテインの対談から3日後、カイル達はある森の中を突っ切っていた。

「師匠、jokers事務所まであとどのくらいですか？」

カイルの後ろを歩いていたライトがカイルに聞く。

ちなみにユン達と別れた後、ライトはなんとかカイル達に合流できた。聞き込みで追いかけたらしい。情報収集の手際がよすぎて凄い。

「事務所まであと……一週間近くかかるな」

「と、遠いですね」

カイルの言葉にガツカリするルリ。

何故レポートで事務所に行かないの？と思った方は25話を見て下さい。

「ん？」

カイルは突然感じた気配に周りを見渡す。

「2人とも、隠れる」

「え？」

「早くしろ」

突然のカイルの指示に慌てながらも木陰に隠れるライトとルリ。

カイルも木に張り付くようにして気配のする場所を見やる。

するとそこには、様子のおかしい2人のポケモンがいた。

依頼34：マティスの対談（後書き）

プラネットさんとのコラボは終わりましたが、たまにまたバトルリーグとのコラボがあります。

といっても、プラネットさん以外とコラボやらないってことじゃないですよ

カイル

「マティスとミゲル、久々に出たな」

ミメットも名前だけなら

ミメット

「作者さん、あとで覚悟しといてね」

HAHAHA……悪かったミメット（土下座）

ミメット

「まあ、ミゲルもそこまで出番なかったしいいわ」

つか、ミメット久し振りに後書きに出たね。いつぶりだろ？

カイル

「この展開、暫くはまだミメツト達出ないんじゃないか？」

ま、それはお楽しみってことで。

依頼35：戦場の二人組（前書き）

遅くなりました。スイマセン（汗）

活動報告には2話同時投稿とじていましたが、一応1つだけ投稿し
ときます。

今回から少し物騒になります、元々予定していたものです。

ではごじげん！

依頼35：戦場の二人組

「あいつらは……………」

カイルは木に張り付いたままその2人の様子を伺う。

1人はデンリュウで、頭に青色の鉢巻きのようなものを巻いており、もう片方のポケモン エレキブルに肩を貸している。

デンリュウが肩を貸しているエレキブルはどうやら腹に傷を負っているようで、血が滴っている。

よく見ると、首にネックレスのようなものを提げている。

2人に共通していることは、武装をしており傷を負っているということだ。

2人とも腰に剣を挿し、肩にはボウガンを提げており、デンリュウもエレキブルほどではないが怪我をしている。

どう見ても普通ではないと認識した途端、カイルは荷物のリュックからあるものを取り出し、それを右手に持った。

「2人とも、ここで暫く待ってる」

カイルは弟子に指示する。

「師匠、何するつもりですか？」

「大したことじゃない。待ってる」

ルリに聞かれるがうまくはぐらかし、カイルはこっそりと二人組の後ろに回り込む。

(さてと……久し振りにやるか)

カイルは左手にリュックから取り出したモノを持つと、身を隠して

いた茂みから飛び出した。

そして背後からデンリュウの首に腕をまわし、左手のモノを素早くデンリュウの首筋に突きつける。

「ぐっ！」

「なっ、敵か!？」

デンリュウが首を締め付けられたせいで声が漏れ、それによってエレキブルがカイルに気付き、後ろに飛び退く。

が、2人はすぐに動きを止めなければならなかった。何故なら

「動くな。動けばこいつの喉を搔っ切る」

そう、カイルの左手に握られた果物ナイフの切っ先がデンリュウの喉に突きつけられていたからである。

勿論、カイルが腕を少し引くだけで仲間が死ぬ状況でエレキブルは下手な動きをとれない。ナイフを突きつけられているデンリュウなら尚更である。

「……………何が目的だ」

エレキブルは怪我している腹を押さえ、顔を歪めて言う。

「いくつかの質問に答えてもらうだけだ。下手に抵抗しない限り殺しはしない」

カイルは果物ナイフの腹でデンリュウの首を撫でながら答えた。

(え？え？どういう状況なのこれ？？)

茂みに隠れていたライトは状況が把握できていなかった。

まあ、突然カイルが怪我人を助けているデンリユウを人質にするような状況になったのだ。理解し難いだろう。

「師匠から殺気は感じられませんよね？何か聞きたいだけなんじゃないでしょうか？」

確かにルリの言う通り、カイルから殺気は感じられない。隠してるだけかもしれないが、本当に殺す気はないのだろう。

「……なんか、師匠が悪者みたいだね」

「何人もポケモンを殺してるから、法的には悪者ですよ？」

「あ、確かに」

と、小声で言葉を交わすライトとルリだった。

「で、何を知りたいんだ？」

エレキブルがカイルに聞く。

出血が続いているため、腹の傷から流れ出た血がエレキブルの足を伝い、足元にある草が赤く染まっている。

「まず1つ目、お前らは“レンガル”の兵士じゃないか？」

「……………そうだ」

カイルの質問に顔を伏せて答えるエレキブル。

「何故レンガルの兵士がこんな所にいるんだ？」

先程からカイルが使っている“レンガル”という単語。これはある国の名前である。

この世界にも国というものはあるが、それは極僅かな数であり、大抵は全てのポケモンが自由に暮らす領域である。

レンガルはその存在する僅かな国の1つであり、結構豊かな国だったりする。

「……ワシ達は我が国の繁栄のために戦争に参加している兵士だ。だが、負傷したから一時的に撤退してるだけだ」

「……………この近くで戦争が起きてるのか？」

カイルが眉をひそめて言う。

すると、カイルがナイフを突きつけているデンリュウが口を開いた。

「随分と世間知らずだな。ここから一時間程歩いた場所は一日前から既に戦場だぜ？」

カイルはデンリュウの言葉から状況を予測する。

まあカイルが知らなかったのも無理はない。カイル達はレスタウン

の事件と任務のおかげで新聞もニュースも見えていなかったのだ。

それに戦争が始まったのは一日前。移動中で情報源のなかったカイ
ル達を知る由もない。

「……………最後に1つ。今の戦況はどうなってる？」

その言葉にエレキブルの眉がピクリと動く。

「何故そんなことを聞くんだ？もしかしてお前……………」

「俺はただの何でも屋だ。ただ、興味があるだけだ」

「……………」

エレキブルは暫く黙っていたが、やがて暗い顔で口を開いた。

「こちらが劣勢だ。ワシの小隊もワシとそいつを除いて全滅した」

エレキブルがデンリユウを指しながら言った。

「ワシの小隊？ってことは……………」

「ああ。ワシは小隊長だ」

カイルの疑問にエレキブルが答える。

小隊長とは複数の分隊を指揮する兵士のことだ、位はあまり高くない。が、決して低いわけでもない。

ガサガサ……………

「！」

突然、エレキブル達のやって来た方角から草木の擦れ合う音がした。

カイルが音がした方角に顔を向けると、木々の間から現れるゴツいポケモン3人。

「へっへっ！小隊長さん発見！」

3人のうちの1人であるリングマがニヤニヤしながらエレキブルを

見る。

「しまった………血痕を辿ってきやがったのか」

エレキブルが悔しそうに言いながら辛そうに腰のボウガンを抜く。

「全員生け捕りにすれば、それなりに報酬がでるなこれは」

リングマの横にいるゴーリキーも剣を抜いて言う。

「………なんか、俺も仲間と思われてるみたいだな」

カイルはため息を吐くと、デンリユウを解放した。

解放されたデンリユウは素早く後ろに飛び退いて長剣を抜く。

それを見たカイルは笑いながらナイフを手のひらで弄び始めた。

「そう警戒するな。とりあえずその負傷小隊長連れて下がれ」

カイルは苦しそうにボウガンを構えているエレキブルを一瞥して言

う。

「お前一人で大丈夫なのか？」

デンリュウが疑わしそうにカイルを見る。

「ああ。少しは信用してくれ」

カイルはそう言うとゴツい3人に向き直った。

「お前ら、傭兵だな？」

「じゃなきゃわざわざこんなところまで追ってくるわけないだろ？」

3人の中で一番ゴツいと思われるゴローニヤが面倒くさそうに答えた。

傭兵 状況に応じて金で雇われる腕利きの兵士。活躍に応じて雇う国から受け取る報酬のために命懸けで戦う職業である。

わざわざ小隊長を追ってきたのは、情報源となりうる兵士を生け捕

りにすればそれなりの報酬が出るからだろう。

「……さて、久しぶりに兵士と戦えるようだな」

「へえ、兵士と戦ったことがあるのか？」

カイルの言葉に聞き返すリングマ。

「ああ。戦場の空気はいいよな………」

その瞬間、カイルはぞっとするような笑みを浮かべた。

「血が騒ぐ」

カイルは楽しそうにナイフを振りかざした。

依頼35：戦場の二人組（後書き）

はい、今回から少し戦争が入ります。

原案にも入っていたもので、急遽とりいれたのではないです。

世界観をまだ完全に説明出来ていませんが、後にちゃんとやりますので。

今回は地の文を多めにしたつもりですが、どうだったでしょうか？
評価、批判、アドバイスお願いします。

カイル「で、次話はいつ更新するんだ？」

もう半分くらい書けてるんで、明後日くらいかな？今度はちゃんと更新しますよ！

ではっ！

依頼36：レンガル兵士とjokers

「……………」

茂みに隠れていたライトとルリは啞然としていた。

2人の視線の先には師であるカイルが。

そしてカイルは目を回しているゴローニヤに腰掛け、右手でナイフをくるくると回している。

「……………何者なんだお前は。傭兵3人を一瞬で倒すなんてありえんぞ」

同じく啞然としていたエレキブルが言う。

「……………こんな雑魚が傭兵してるとはな、呆れたよ」

しかしカイルは残念そうに溜め息を吐きながら答えた。

「しかし、何でこいつらあんたが小隊長だって知ってたんだ？」

カイルはエレキブルに聞く。

確かに特別派手な装備をしているわけでもなくいたため、隊長と判別するのは難しいだろう。

エレキブルはああ、と言って首に下げている青いネックレスを持ち上げる。

「それはこいつを着けてるからだ。小隊長以上の階級は皆このネックレスを所持してるからな」

「じゃあ、そいつをしまえ。自分から襲ってくれと言ってるようなもんだ」

カイルはそう指摘するが、エレキブルは顔をしかめる。

「こいつはワシの誇りだ。出来るだけ身に付けておきたいんだ」

カイルはその言葉に呆れた。

「自分の命とどっちが大事なんだ？わざわざ撤退するくらいなんだから、命の方が大事なんじゃないか？」

エレキブルはその言葉に口ごもってしまった。

と、ここで今まで黙っていたデンリユウが口を挟んだ。

「待てよ。お前にオレ達のことは関係ないだろ？なんで小隊長の身を案じるんだ？」

それを聞いて、カイルはニヤリとした。

「ああ、あんた達と取引をしようと思ってな」

「取引？何を言ってるんだ？」

エレキブルはカイルが何を考えているのか全く分からず、眉をひそめる。

「その前に、出てこい」

カイルは右手の指を擦り合わせ、パチンと音を鳴らした。

その瞬間、近くの茂みからライトとルリが飛び出し、カイルの横に並ぶ。

「こいつらは俺の仲間だ。敵じゃない」

カイルは素早く身構えたデンリユウとよろめきながら数歩下がったエレキブルを見て言った。

「師匠……何考えてるんですか？」

カイルの横に立つルリが困惑した表情で言う。

隣にいるライトも同じく疑問符を浮かべながらカイルを見る。

「ああ。事務所に戻る前にちょっとな」

カイルはそう言うと、エレキブルの方に向き直った。

「俺はあんたらの戦線復帰するまでの護衛をする代わりに、俺を戦場まで案内して欲しい」

「……………それが取引内容か？」

「ああ。あんたらにとっても都合だと思っが？」

確かにカイルの出した条件はエレキブル達に都合のいい内容である。安全に戦場に復帰できる上、目的地は戦場なので必然的にカイルも戦場に向かうことができる。

しかし、取引というからにはお互いに利益になることのはずである。

「師匠、なんで戦場に向かうんですか？」

ライトが気になって仕方がなかったことを口にした。

そう、肝心のカイルの利益が分からないのだ。ライトとルリは事務所に戻ると聞いているだけで、戦場に向かうなどとは聞いていない。それにカイルも戦争のことを先程知ったのだ。用事などあるわけがない。

「久しぶりに戦場の空気を直に感じたい。それだけだ」

カイルは何かを考えているのだろうか、視線は何もない木と木の間に向けられていた。

「……なあ。あんたは傭兵なのか？」

デンリユウはカイルの言葉を聞き、思わず尋ねた。

「二年前までは、な。今はただの何でも屋の構成員だ」

カイルはそう言った。その言葉にエレキブルとデンリユウは驚きを隠せなかった。

どう見ても20歳前後（実際は18）のカイルが過去に傭兵だったなど普通は考えられないからだ。

だが、本人に嘘を吐いている素振りなどまるつきりない。

「で、取引は成立か？」

カイルはエレキブルに聞いた。

「勿論だ。だが、今すぐ復帰するわけにもいかん」

エレキブルは自らの腹から流れる赤い血を見て顔をしかめた。

「いや、大丈夫だ。ルリとライト、応急処置は頼んだ。そっちのデンリユウはちょっとこっちに来てくれ」

カイルはエレキブルの様子を見ると、2人に処置を任せてデンリユウに手招きする。

ルリは素早く救急セットを取り出し、ライトは慌てながらルリの手伝いをする。

デンリユウは少し躊躇ったが、カイルがさっさとしろ、と言つと渋々カイルの方に向かった。

「オレに何の用だ？」

カイルとデンリュウはエレキブル達からやや離れた場所に移動していた。

「単刀直入に言うぞ。あの小隊長は離脱させるべきだ」

カイルは腕組みしながらデンリュウにそう言った。

「……俺もそう思うが、小隊長が耳を貸してくれないんだ」

デンリュウの言葉にカイルの目が少しだけ大きく開かれるが、すぐに元に戻った。

「意外だな。反論されると思ったんだが」

「小隊長に死なれたら、他の隊員にオレが呪い殺されちまうからな」

デンリュウが笑って返す。カイルも少しだけ表情を緩めた。

「人望が厚いようだな。あの小隊長は」

「ああ。だからこそ死んで欲しくないんだ。あの人はここで死ぬのは勿体なさすぎる」

デンリュウは力強く言った。

「お前ができないのなら俺がなんとかする。とにかく、小隊長さんには離脱してもらうことをお前に言っておきたかったんだ」

カイルはデンリュウの目と自分の目をしっかりと合わせた。

デンリュウはコクリと頷く。

「頼むぜ。名前はなんていうんだ？」

「ああ、俺はカイルだ」

「オレはリュン。戦場までよろしくなカイル」

そう言ってリュンは手を差し出す。

「ああ。足引つ張るなよ？」

カイルも手を差し出し、その手を掴んだ。

「へっ！こっちのセリフだ！」

リユンはニッと笑い、握手されている手をブンブンと振った。

「調子はどうだ小隊長さん？」

カイルは処置を終えたばかりのエレキブルに聞く。
つい先程カイルとリユンは戻っていた。

「さっきよりマシだ。ズキズキ痛むけどな」

エレキブルは止血して包帯を巻いた腹に手を当てる。

「鎮痛剤を投与してもよかったですけど……本人が拒んだので」

ルリは救急セットを片付けながらカイルに言う。

鎮痛剤は痛みを和らげるが判断力が鈍る。それを考慮してエレキブルは拒んだのだろう。

「それじゃあ、そろそろ行くか」

「師匠、この傭兵達は？」

ライトは一応ロープで縛っておいた傭兵三人組に目をやる。

「ほっとけ。あと二時間は目を覚まさないだろうから」

カイルは果物ナイフの鞘を取り出して腰に提げ、それにさっきの戦いで使用した果物ナイフを収める。

379

「よし！オレが先導するぜカイル！」

「おう、頼んだ」

「……いつの間に仲良くなったんですか？」

カイルとリュンのやりとりを見てルリは不思議そうにそう言った。

依頼36：レンガル兵士とjokers（後書き）

やっぱり、内容が重い気がします（汗）
はやく戦闘書きてえ……………

カイル「作者、さっさと更新しろ」

うん、善処するけど……………来週から国家試験の勉強しないとだから多少の遅れはお許してください。

で、今回はリユンが出ました。って前話からでてるか（笑）

リユン「なあ作者、小隊長には名前つけねーの？」

うん。小隊長は小隊長だから

カイル「……………意味が分からん」

依頼37：遭遇（前書き）

まずはじめに……急に休載して申し訳ありません。

実は、家でケータイの使用が禁じられ、バス停や学校で執筆するしかなかったのです。ですが、その時間も僅かなものでして……

とりあえず、jokersは12月中旬まで休載とさせて頂きます。今回の更新は、これを知らせることと、活動報告で予告していた企画をやるために頑張って書きました。なので、多分休載中の更新はこれが最初で最後です。

しかし、もしかするとあと一話投稿できる可能性もあります。無理でしょうが（汗）

企画は後書きで行いますので。

では、暫く更新のなかったjokers最新話をどうぞ！

依頼37：遭遇

「もうすぐで戦場に着く。いつでも戦えるようにしといてくれよ？」

先頭を進むリユンが後ろを着いてきているカイル達へ振り向いて言う。

(近いな……………)

カイルは戦場独特の雰囲気を感じ、自然と刀に添える手に力がこめられる。

と、突然リユンがペースを落とし、カイルの横に並んだ。

ライト、ルリは小隊長を気遣いながら少し後ろを歩いている。

「なあカイル。そろそろ小隊長を離脱させるべきだと思っただけどよ」

リユンの小さな声は隣を歩くカイルにしか聞こえない。

戦場が近づいてきたため、リユンは出来るだけ早く小隊長を逃がしたいのである。

「俺に任せてくれ。戦いには参加させない」

カイルはそう言ってくれたが、リユンは不安だった。

リユンから見た限り、カイルは信用できそうな男である。だが、知り合って間もないカイルが小隊長を説得できるとは到底思えないからだ。

しかし自分では説得できなかった。だからカイルに頼るしかないのである。

「……………頼む」

結局、リユンはそう一言言って再び先頭を歩き出した。

一歩一歩進み、戦場が近づくにつれてカイルはかつて自分が傭兵だったころのことを思い出していた。

出会い。別れ。戦果をあげたときの喜び。仲間との友情。

そして、憎しみと悲劇。

自分の近くで散った仲間の命。自分が散らせた命。そして最後に散った親友も

「師匠？顔が滅茶苦茶険しいですよ？どうしたんですか？」

いつの間にか隣に並んでいたライトにかけられた声がカイルを現実に呼び戻す。

「戦場に向かっているんだ。険しくなって当然だ」

カイルはライトにそう返し、今は過去を振り返らずに目前のことに集中することにした。

(もう……………目の前で仲間は死なせない)

カイルは腰の刀をそっと一撫ですると、少しペースを上げて歩き出した。

「カイル……着いたぜ」

リユンは緊張した顔で前方を指差す。

カイル達の歩いていた森はそこで途切れていた。

「……行けるか？」

カイルは後ろにいる小隊長の方を振り向いて言う。

「カイル！」

リユンはその行動に思わず声を上げるが……

「心配するなリユン。ワシは大丈夫だ」

小隊長は少し弱々しく右手の親指を立てて見せた。

リユンは何か言いたそうだったが、結局何も言わなかった。

「……………行くぞ」

カイルは皆準備出来ていることを確認すると、戦場に向かって足を踏み出した。

森林を抜け出したカイル達が出たのは低めの崖の上。そこからは、戦いの様子をよく見ることができた。

「ど……………どついうことだこれは……………」

小隊長が声を震わせて言う。

カイル達の視線の先にあるのは兵士達の戦う戦場。勿論行われているのは命懸けの戦い。

しかし、それは普通ではない状況だった。

一方的な殺戮。ただそれだけが行われていた。

白いローブに身を包んだ集団が青色の装飾品を身に着けているレンガル兵士、赤色の装飾品を着けている敵対国の兵士を次々と惨殺している。

意を決して立ち向かった者は容赦なく白い集団の刃に切り裂かれ、武器を放り出して逃げ出す者も後ろから放たれた強力な炎や電撃を受け、怯んだ所を鉄製の武器が襲う。

「なんなんだ、あの白い集団は」

カイルがリユンに問いかけるが

「……知らねえ。オレ達の戦ってた時はあんなやつら居なかった」

リユンが困惑した表情でそう答えた。

その時、小隊長が左手で腰のボウガンを抜き、右手に電撃を走らせ始める。

「何する気だ？」

明らかに戦闘態勢の小隊長にカイルが聞く。

「同志達を見殺しに出来るか！ワシは行くぞ！」

そう言つて崖を飛び降りようとした小隊長の鼻先にカイルはいつの間にか抜いていた果物ナイフを素早く突き付けた。

「カイル！？」

「師匠！？」

リユンとライト、ルリがカイルの行動に驚く。

「何をしやがる」

「あんたを止める。勝ち目のない戦いに送り出すワケがないだろ？」

「やってみなければわからん」

カイルと小隊長の視線がぶつかり、火花を散らす。

小隊長が電撃を纏った右手をカイルの顔面目掛けて突き出した。

しかしカイルはその右手を左手で受け止め、自分の右腕を小隊長の胸に振り抜く。

「が……………」

小隊長の鳩尾に拳が突き刺さり、そのまま昏倒した。

「カイル……………」

「悪いな。こんな荒っぽい方法で」

リユンは無言で頷くと、小隊長を近くの茂みの中に入れた。

「目が覚めたら大方片づいてるだろ。それまでここに隠れててくだ
さい」

リユンは気絶している小隊長にそう一声掛けると、カイルに向き直った。

「オレもこのまま引くワケにはいかねえ。せめて、仲間を助けないとな」

カイルも頷く。

「俺はあの白い集団が何か知りたいしな。手伝う」

カイルはリユンにそう言うと、ライトとルリの方を見た。

「2人は距離を置いて援護してくれ。危なくなったらルリのテレポ
ートで離脱しろ」

「任せてください師匠！」

「わかりました！」

ライトとルリは力強く返事を返した。

「よし……行くかりユン」

「ああ！」

リユンの返事にカイルは頷き、戦場に目を向けた。

その時、カイルの視線がある一点に止まり、カイルの目の色が変わる（タイラント・アイではない）。

「カイル？どうかしたか？」

その様子に気付いたリユンがカイルに声を掛ける。

「いる……あいつが」

「は？」

カイルはリユンの疑問符を無視し、両足にグッと力を入れる。

「前言撤回だ。リユン、ライト、ルリ。お前達は引け。反論は無しだ」

カイルはそう言った瞬間、崖から飛び降りた。

「し、師匠！どうしたんですかいきなり!？」

ライトは慌てるが、ルリは技の使用のために集中し始める。

「追いましょう！師匠を置いて引けませんから」

「当然だ！」

リュンの言葉を聞くと同時にルリはリュンとライトに触れ、テレポ
ートで崖の下に跳んだ。

崖から飛び降りたカイルは着地すると同時に猛スピードで目標目指
して駆け出していた。

途中、逃走するレンガルや敵対国の兵士とすれ違うが、無視して走
り続ける。

すると、近付いていた白いローブのポケモン数体が剣や戦斧、ナイ
フを片手に襲いかかってきた。

しかしカイルは怯むことなく刀に手を掛ける。

「邪魔だ」

カイルの腰に収まっている刀からチンツという金属音が数回鳴り、
それと同時に白いローブのポケモンが弾き飛ばされた。

カイルはそれに目もくれず、そのまま疾走する。

目標まであと10メートル。そこでカイルは大きく跳躍し、背中から抜いたドラゴネスを目標目掛けて振り下ろした。

しかし高い金属音と共に斬撃は2本のナイフに防がれる。

ナイフを持つ腕は水色。それに合わせているのかその者が纏うローブも薄い水色である。

「久しぶりだな、カイル。」

カイルに掛けられる一つの太い、楽しげな声。

しかしカイルは、その声に力強く、決意の籠められた声で返した。

「探したぞフリード。お前を今、ここで殺す！」

カイルの視線の先には過去にカイルの友を殺害し、アロマシティの任務で遭遇した宿敵　　オーダイルのフリードがいた。

依頼37：遭遇（後書き）

では、jokers3ヶ月記念特別企画を行います！

カイル「まあ、相当しようもない企画だな」

……では、さっそく。

今回の企画は、jokersに登場する武器の名称を募集しようかなど。

カイル「ださいな」

うるさい！だって人気投票は早すぎるし、コラボする余裕はないし！しょうがないだろ！

カイル「わかったわかった。で？」

実は、今後登場するメインキャラの剣の名前を募集しようかなど。刀、洋剣どちらもあります。なので、漢字でもカタカナでも構いません。

ただし、村正、正宗、エクスカリバーといった有名な剣の名前のパクリはダメです。

採用しなかった名前もどこかで使う可能性が高いです。作者ナーセ

ン皆無なんで（笑）

あ、できるだけメッセージでお願いします。まあ感想欄でもいいですが。

ちなみに、どんな剣にしてほしいとかは書きたい人は書いてもらって結構ですよ。

では、カツコイイ名前お待ちしております！

カイル「ださい企画だが、参加してやってくれ」

ちなみに、期間は今年中で。では次の更新で会いましょう！

依頼38：死の戦場 前編（前書き）

休載中の最後の更新となります。

続きは再開後になりますのでご了承ください。

では、ごきげん！

依頼38：死の戦場 前編

白いローブのポケモン達が入り乱れる戦場の最中に佇む2つの影。

一方は素人が見ても相当な業物と分かるほど鍛え抜かれた伝説の金
属でできた大剣を両手に持ち、もう一方はゴツイ装飾の施された2
本のナイフ用い、大剣と鏢迫り合いを行っている。

「てめえと殺り合うのもこれで三度目だな」

水色のローブに身を包んだオーダイル、フリードがニヤニヤと笑み
を浮かべながら言った。

「ああ……………だが、これで最後だ」

大剣を持ったカイルはその言葉と同時に後ろに飛び退き、再び前方
に踏み込みながら大剣を水平に振り抜いた。

しかしフリードも片方のナイフで器用に受け流し、もう片方をカイル
に突き出す。

カイルは素早く大剣から右手を離し、その右手で腰の果物ナイフを
抜いてフリードの刺突を防ぐ。

「おう、腕を上げたんじゃないか？」

「ああ、お前を殺すためにな！」

カイルはそう言うと大剣とナイフを上に取り投げ、瞬時に居合いの姿勢をとり抜刀する。

「中級剣技ノ壱・居合い！」

とっさにフリードはナイフを前に突き出して防御するが、カイルの瞬時に繰り出した居合いをフリードは完全に防ぐことができず、刀がフリードの胸を浅く斬る。

「……やるじゃねえか」

落ちてくる大剣とナイフをキャッチするカイルを見つつフリードは少しだけ眉を顰め、後方に跳躍してカイルとの距離をとる。

その時、カイルは後ろから何かの気配を感じ、振り返った。

「カイル！いきなり突っ走りやがって、どうしたんだ！？」

カイルの後ろには、なんとか白いローブ集団を突破し、少し息切れしているリユン、ライト、ルリが追いついていた。

と、フリードはそれを見てワザとらしく溜め息を吐いた。

「フン、カイルの仲間か。面倒くせえが仕方ねえからまとめて殺してやるか。仲間と一緒になら寂しくないだろうしなあ?」

「出来もしないことを堂々と言えるとはな。尊敬してやるよ」

カイルが素っ気なく返した皮肉に、フリードの額に青筋が立つ。

「やろうと思えばできるんだぜ? まあ、俺はリンチは好かんからやらねえだけだ」

「まさか……」

このフリードの言葉に何か気づいたのか、ルリの口から言葉が漏れる。

「お? 後ろの嬢ちゃんは気がついたみてえだな」

フリードがニヤつきながらルリの方に視線を向けると、ルリはその威圧感に怯んで後ずさりながら慌てて双剣を抜く。

「……ルリ、言ってみろ」

カイルが大剣を油断なく構えながら促す。

ルリはコクリと頷くと、口を開いた。

「私達が師匠に近づいてから、周りの白いローブのポケモン達が襲いかかってこない……ですよね」

カイルはその言葉で確信した。

「……洗脳者」

「正解だ」

フリードが手近にいた白いローブの1人を引き寄せ、ローブを剥ぎ取った。

現れたのは紫の身体をもち、豚に酷似しているポケモン、ブービツク。

そしてその額には、以前カイルが目にした黒い宝石のようなものが取り付けられていた。

「こいつらは全員洗脳を施されている上、特殊な身体強化薬も投与している。並の兵士じゃ相手にすらなんねえ」

フリードはそこらに転がる息絶えた兵士の身体に目を向けて言う。

「それに全員指揮官の俺が統率してるんでな。行動範囲も思っがまだ」

フリードはそう言うと再びナイフを構えた。

それに反応してカイルも大剣を水平に構える。

「くだらんお喋りはここまでにして、そろそろやるうじやねえか。」

フリードはそう言ったあと、後ろのリユン達に目をやり、ああ、と呟いた。

「てめーの仲間の相手がいねえな。仕方ねえ、ウリョク“右緑”！」

フリードがそう言った瞬間、フリードの隣にひとつの影が現れる。

それに真っ先に反応したカイルがそれに飛びかかり、大剣で雑払う。

しかしその斬撃はその影が持つ、長いが幅は狭い大剣 ツー
ハンドットソードと呼ばれる剣に受け止められていた。

真っ向からカイルの大剣による斬撃を受け止められる者など滅多にいない。カイルは平然と受け止めたその影にひるんだが、横から空を裂きつつ突進してくるナイフに反応し、ナイフを大剣の柄で防ぐ。

「お前の相手は俺じゃなかったか？」

「……そうだったな。すぐに首を斬り落としてやるよ！」

フリードのナイフを受け止めていたカイルはそう言うと、大剣を横

雑に振って2人の敵を退かせ、凄まじい勢いでフリードに斬りかかった。

「右緑！てめえはあの3人を殺れ！」

カイルの斬撃をかわしつつフリードはそう影に呼びかける。

右緑と呼ばれた深い緑のローブに身を包み、ツーハンドットソードを携えた謎のポケモンは無言で頷くと、剣を構えて3人に襲いかかった。

「来るぞ2人共！」

リユンの叫びに応じてライトとルリは身構えた。

「ハッ！」

カイルは連続で繰り出した斬撃の勢いのまま再びドラゴネスを振り抜く。

しかしミスリル製の大剣をフリードは身体を捻って紙一重でかわし、右腕のナイフをカイル目掛けて振り下ろす。

綺麗な弧を描きながらフリードのナイフがカイルの左肩を切り裂いた。

「チツ……そう簡単にはいかないか」

「当たり前だろ？ガキにやられるほど落ちぶれちゃいないんでな」

斬られた肩を庇いつつ下がるカイルにフリードは構えを崩さずに返す。

「じゃあガキの俺がお前のプライドも身体もズタズタにしてやるよ」

カイルはそう口にする、おもむろにドラゴネスをフリードに投げつけた。

フリードは重量のある大剣を受け止めようとはせず、横に跳んでそれをかわす。

「電光石火」

その隙にカイルは電光石火でフリードに接近。果物ナイフを抜いてフリードの首を切り落とすべくそれを振り抜く。

しかしフリードは掲げた2本のナイフでそれを防いだ。

「おおつと、この状況なら……俺が有利だぜカイル？」

フリードはニヤリと笑みを浮かべ、ナイフを持つ腕に力をこめる。

普通ならば鍔迫り合いはパワーのあるカイルの方が有利である。しかし、それは自分の獲物が負荷に耐えられることを前提とした話だ。

フリードの持つナイフは特別製のナイフ。頑丈さと切れ味は並のナイフを大きく上回る。

そのナイフ2本とチャチな果物ナイフとが強者の間でぶつかり合うのだ。普通に考えればカイルは鍔迫り合いなどするべきではない。

だが……

「くっ……何故碎けねえ!？」

フリードが両腕を使い全力でナイフに力を加えるが、カイルの可愛らしい果物ナイフが碎け散る気配は一切ない。

「随分と浅はかな考えだな」

フリードのナイフを右腕に持った果物ナイフで受け止めていたカイルはそう言つと、果物ナイフを跳ね上げる。

フリードのナイフも上に跳ね、鍔迫り合いの解けた瞬間、カイルは左拳を握り締めてそれに業火を纏わせた。

それに気付いたフリードも右腕のナイフを地面に落とし、右拳に冷気を纏わせる。

「炎の拳《炎のパンチ》！」

「冷凍拳《冷凍パンチ》！」

エネルギーを纏った2つの拳が衝突し、炎と氷塊が辺りに飛散した。その直後に両者とも後ろに飛び退き距離をとる。

「……技の出力は俺、純粋な力はお前が上。差し引き互角ってところか」

「俺は特殊技が苦手なんだ」

フリードが冷凍パンチを繰り返した右拳をひらひらさせながら先程の技について言うと、カイルは顔をしかめながら果物ナイフを持ち直す。

「おい……そのナイフ、いったい何なんだ？」

フリードが指差すのは、先程の鏢迫り合いで碎けなかった果物ナイフ。

「ああ、こいつはミスリル製偽軽武装ナイフ。“カーディナル”だ。デザインは少しアレだがな」

「偽軽武装……油断させるのが目的か」

フリードはカイルの手の中にあるカーディナルに注目する。

ナイフの刀身には“cooking”と刻まれ、柄には可愛らしく質素な花の絵柄が……………

……………確かにアレである。

ちなみにこのナイフ、ドラゴネスのオマケとしてクロスが渡した物である。

「……………しっかし、それほどの武器を所持してる上に“ペンタグラム”の俺と互角だとは。計画の障害になりかねんな」

「……………ペンタグラム？計画？」

フリードの聞き慣れない言葉と“計画”という言葉に反応するカイル。

「教えて欲しいか？」

フリードがニヤニヤと笑みを浮かべながらカイルにそう言う。

「構わん。どうせ力づくで聞き出してやるから」

返答と同時に突撃しようとしていたカイルの背中に突然衝撃が走った。

依頼38：死の戦場 前編（後書き）

ちなみに今回登場した偽軽武装ナイフ“カーディナル”はみぞれ雪さんの送ってくださった名前です。

このような感じで企画で募集した名前は使わせて頂きますので、ガンメッセージでお送り下さい！

本当はカーディナルでなく華炎という銘になるはずだったのですが、華炎よりカーディナルが断然良かったのでw

では、再開後にお会いしましょう！

依頼39：死の戦場 中編（前書き）

いよいよ再開です！

そして、文章が単調で読みにくいです！スイマセンでした……

依頼39：死の戦場 中編

「来るぞ2人共！」

リュンの叫ぶ声が辺りに響き、横に並んでいたライトとルリも戦闘態勢に入る。

三人の前方からは、深緑のローブに身を包んだ正体不明のポケモンが軽やかな動きでこちらに向かってきた。

「来い！」

リュンが数歩前に出て、“右緑”と呼ばれたポケモンに剣の切っ先を向ける。

それに応じるかのように右緑もツーハンドソードを水平に構えた。

「……あの構え、師匠の構えと同じ……」

カイルから剣術を叩き込まれたルリは、その構えを見て思わずぼつりと呟いた。

右緑は剣を水平に構えたまま、リュンに接近する。

「隙だらけだぜ！」

攻撃範囲に入った右緑にリユンは剣を真っ直ぐ突き出した。

リユンの剣の切っ先は勢いよく右緑の頭部に突き刺さる　　か
に見えたが、右緑は僅かに体を傾けてそれをかわし、握られた左拳
をリユンの鳩尾に叩きつけた。

「ぐう……………」

鳩尾を殴られたリユンは苦しそうに呻きながら後ずさる。

右緑は突き出した拳を引っ込めて剣を両手で握った。

その時に見えた右緑の手は手袋に包まれており、指に当たる部分に
は銀色の金属が取り付けられていた。

（くそ……………鉄製グローブか。通りで痛えワケだ）

リユンは痛みをこらえて剣を構えるが、その時には既に右緑のツィ
ハンドソードが目の前に迫っていた。

「中級剣技ノ参 - 交双閃！」

剣がリユンを切り裂く直前、放たれた交差する斬撃により剣の軌道
が逸れてリユンの頭上を通過する。

「電撃波！」

続いてライトが放った追尾性能を持つ電撃に右緑はやや後退するが、
剣を一振りしただけで電撃をかき消してしまった。

「ふう、助かったぜ2人共」

リユンが礼を言うが、ライトもルリも右緑を見据えたまま反応を示さなかった。

（あのポケモン……師匠に匹敵するパワーを持つてる）

（僕の電撃波が簡単に打ち消されるなんて……）

ルリの腕は先程剣を弾いたときに凄まじい力のせいで痺れ、ライトはリユンをカバーするべく放ったフルパワーの電撃波がかき消されたことで動揺していた。

しかし右緑はそんな様子を気にする素振りもなく、再び剣を構えて突進してくる。

「よほど接近戦に自信があるんですね……シャドーボール！」

「十万ボルト！」

「雷！」

ルリは黒球、ライトは電撃を、リユンは強力な稲妻を右緑目掛けて放つ。

「……………」

右緑は無言でシャドーボールをしゃがんで回避。続いて迫る電撃と

稲妻を跳躍してかわす。

「今だ！」

リユンがそう叫ぶと同時に右緑の真下から刀が突き出された。

右緑はそれを易々とツーハンドソードで受け止める。

「……これでも駄目ですか」

刺突を受け止められたルリはバックステップで間合いをとる。

先程の刺突は、シャドーボールを放った後にすぐさま走り出し、隙が出来た右緑に叩き込んだつもりだったのだがいとも簡単に防がれてしまった。

右緑は目の前にいるルリを標的にしたようで、ツーハンドソードを水平に構えてルリを見据える。

ルリもそれに合わせて半身の姿勢をとり、抜いていた双剣の片方を右緑に突きつけるように構え、もう片方は己の頭の高さに掲げて切っ先は右緑に向けた構えをとる。

睨み合いは一瞬。素早く大地を蹴り、お互いの剣が敵を切り裂くべく空気を斬った。

「中級剣技ノ参・改・水平交双閃！」

ルリが通常なら刀を交差させて斬りつける交双閃を水平に放つ。

右緑の振った剣は己の剣を掠めるように放たれた左右からの斬撃で受け流され、ルリには命中しなかった。

「中級剣技ノ参・交双閃！」

剣を振り抜いたばかりで隙の出来た右緑に今度は通常の交双閃を叩き込む。

しかし右緑は振り抜いた勢いで体を回転させ、そのまま剣を振り抜いてルリの双剣を横から弾き飛ばした。

「!!!!」

瞬時に武装を解かれたルリは素早く後ろに下がる。

右緑はそのまま連続でルリを斬りつけようと剣を持つ手に力を込めた。

「ロケット頭突き！」

しかし、すぐさま駆けつけたライトが勢いよく頭から右緑に突っ込んできたため、右緑は右手を剣から離れた。

そして自由になった右手でライトの頭を受け止める。

「な……………!？」

威力のあるロケット頭突きを簡単に受け止められた現実に頭が追いつかないライト。

呆然としていたライトの体は高く掲げられ

「がつ……………」

勢いよく、地面に叩きつけられた。

「こいつー!」

その時駆けつけたリユンが素早く剣を右緑の胴に突き出す。

しかし、右緑は刺突を横にかわし、リユンの剣の先端を右手で掴む。

そして右緑がグイツと剣を引っ張ると、強く剣の柄を握り締めていたリユンが引き寄せられ、左手で握っていたツーハンドソードの柄をリユンの腹にめり込ませた。

「かはっ……………」

引き寄せる勢いも利用した打撃でリュンの口から鮮血が飛び散る。

「やああああ！！！！」

それを見たルリが念力で回収した双剣で右緑に斬りかかった。

「うぐ………… アイアンテール！」

ライトもなんとか立ち上がり、近距離で硬化させた尻尾を振り抜く。

しかし右緑はまたしてもライトの攻撃を右手で受け止め、掴んだライトをルリに投げつける。

が、ライトとルリも即座に反応し、ルリが双剣をクロスさせてその交差している部分の腹でライトの足を受け止める。

ライトはルリの作った足場に着地と同時に跳躍。衝撃を吸収したルリは吹き飛ばされたが、構わず電撃を纏って右緑に飛びかかった。

「ボルテッカー！」

いける。ライトはそう思った。いくら相手が強敵とはいえ、近距離で己の使える最強の技ならば

だがその考えは甘かった。

右緑はツーハンドレッドソードを両手で持ち直し、ボルテッカーなど無意味だと言うように突っ込んできたライトにフルスイングした。

ボルテッカーの電撃を打ち破り、ライトにツーハンドレッドソードの腹が横から直撃する。

ライトの身体は弾き飛ばされ、宙を舞った。

「ぐっ！？」

カイルは背中に衝撃を感じると同時にその勢いで身体が倒されてしまった。

「隙有りだカイル！」

素早く身体を起こすカイルに二本のナイフで斬りかかるフリード。

しかしカイルもとっさにカーディナルを構えて一撃目を弾き、二撃目は受け止める。

フリードは弾かれた方のナイフを再びカイルに突き出そうとするが、それより速くカイルは片腕でドラゴネスを振り抜いた。

勿論片腕なので威力、スピード共に弱まっているが、それでも重量のある大剣であり、カイルが怪力なのもあって充分殺傷力のある斬撃となる。

だがフリードにとってその程度の攻撃をかわすことなど容易く、素早く後ろに下がって回避してしまった。

カイルも間合いを離そうとゆっくり後ろに下がると、何か足に当たると。

カイルは視線を足元に落とす。するとそこには黄色の

「なっ……ライト!？」

カイルは驚きと混乱の入り混じった表情で声を上げた。カイルの足元には右縁に吹き飛ばされたライトが激痛で呻いている姿があったのだ。

「おいおい……やっぱり右縁はキツかったか？」

それを見たフリードがニヤニヤと笑みを浮かべながらそう言う。

カイルはその言葉を無視して周囲を見渡すと、一方的に右縁に攻撃されているルリとリユンが視界に入った。

「マジか……」

カイルは身を翻して二人の元に向かおうとするが、同時に間合いを詰めながら刺突をフリードが繰り出してきたため、それをカーディナルで防ぐ。

「お前の相手は俺だろ？あの二人は諦める。どうあがいても勝てんよ」

「俺の弟子とダチを舐めるなよ？」

フリードの言葉にカイルはそう返すと、均衡を保っていたフリードのナイフを力強く弾いた。

そこでフリードは小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、カイルを見据えてこう口にした。

「無駄だカイル。何故なら比較も出来ん程上だからな」

右緑の實力は、俺やてめえとは

ライトが吹き飛ばされた後、リユンとルリは一撃も右緑に当てられないでいた。

しかし、お互いをカバーする事で二人共なんとか致命傷を負わずに済んでいた。

「くっ！」

リユンは何度突き出されたか分からない右緑の刺突をギリギリでかわす。

すると、その刺突の勢いのまま右緑はリユンに突進し、右腕を使ったリアットをリユンに浴びせた。

「……甘いぜ！」

その打撃をリユンは耐え、すぐさま剣から右手を離し、電撃を纏わせた“雷パンチ”を右緑に突き出す。

だが右緑はその拳を右腕で払い、剣を持った左腕を振る。

「サイコキネシス！」

しかし素早くルリの放ったサイコキネシスでリユンは突き飛ばされ、右緑の剣は空を斬った。

相変わらず右緑は気にした素振りを見せず、距離の開いたリユンから比較的近いルリへと標的を変更する。

ルリは右緑の注目が自分に移ったのを感じると、双剣を腰の鞘に収め、左側に提げた鞘を左手で支えて右手を刀の柄に添える。つまり、居合いの構えをとる。

右緑はゆっくりとツーハンドソードを水平に構え、駆け出す。

あまり離れていなかった距離は瞬く間に縮まり、ルリが己の剣の間合いに入った途端、ツーハンドソードをルリ目掛けて突き出した。

その瞬間、ルリは己の体を少しだけ右に傾け、居合いの姿勢を維持したまま懐に飛び込んでくる右緑の剣を見つめ、口元に笑みを浮かべる。

そして、右緑の突き出した剣は吸い込まれるように真っ直ぐルリの身体を貫いた。

ルリは己の身体から血が流れ出すのを感じた。腹部に激痛が走り回る。意識を保つことすら難しい痛みが浸透していく。

「ルリ!?!」

リユンがそれを見て驚きの声を上げるが、ルリは構わず刀を握る右手に力を込める。

ルリの目の前には右緑のローブに隠された顔があったが、それも龍

を模した黒い仮面に隠されていた。

その仮面に向けて、ルリは痛みを我慢し無理に微笑む。

「これで終わりです……………右緑」

ルリは右緑に向かってその言葉を口にし、腰の刀を勢いよく引き抜いた。

そう、ルリには端から右緑の刺突をよける気はなかった。

このままでは全滅する　　そう考えた結果、あえて刺突を受けることで相手を確実に仕留める方法を選んだのだ。

ルリの決意を乗せて鞘から飛び出した白刃は、弧を描きながら右緑の喉元目掛けて振り抜かれた。

依頼39：死の戦場 中編（後書き）

活動報告通り、ルリが活躍しましたね。はい。

現在の状況整理

カイル：フリードと戦闘中。ほぼ負傷なし。

ライト：右緑の猛攻で負傷。戦闘不能状態。

ルリ：右緑と戦闘中。剣で貫かれ重傷。

リユン：右緑と戦闘中。打撃を受け軽症。

フリード：カイルと戦闘中。ほぼ負傷なし。

右緑：ルリ、リユンと戦闘中。無傷だが危うい現状。

本日の執筆感想。

カイルが目立たなかった。

ライトをもう少し活躍させたかった。

ルリが主人公でもいけそうな気がした。

右緑が強すぎたか？

依頼40：死の戦場 後編

ルリの目の前にいる右緑は剣を突き出した体制のまま。つまり、剣を握る腕ではガードが間に合わず、かといって避けるのは近すぎて困難。

その状態で繰り出されたルリの居合いは逃れようのない一撃だった
普通の相手ならば

ルリが刀を引き抜いたと同時に右緑は頭をルリに近づける。

ルリの振るった刀は弧を描きながら右緑に迫り

鈍い音と共に右緑の首に食い込んで止まった。

右緑の首に食い込んでいるのは刀身の付け根の部分。

普通、刀は湾曲している部分で相手を斬る。付け根にも勿論刃はあるが斬ることができないのだ。

原理としては野球、ソフトボールのバットと同じ。バットの芯の部分でボールを捉えれば良い当たりになるが、手元で捉えても凡打にしかならないのと同じで、刀も芯でしか斬れないのである。

右緑はあえて接近することで首を斬られることを防いだのだ。

だが、いくら付け根とはいえ刃が命中したのだ。当然首のローブが裂かれ、少量の血が散る。

しかしこれで右緑を倒すつもりだったルリへの精神的なダメージは大きかった。

「……………そんな……………」

右緑がルリを貫いている己の剣を引き抜き、その傷から血が溢れる。ルリは足がふらつきながらも刀を杖代わりにして倒れるのを防ぐが、右緑はその様子に何の関心も持たないようで、無言で剣を振り上げた。

だがルリは怖れることなく微笑む。

「助かりました……………師匠」

右緑は剣を振り下ろすことができなかった。

右緑の右腕は大きな力に掴まれ、動かせなかったからだ。

そして次の瞬間、右緑は足を払われ、体が宙を舞った。

しかし右緑は咄嗟に空中で姿勢を整えて綺麗に着地する。

そしてその正面には、大剣を背負い、左肩に傷付いたライトを担いだカイルがいた。

カイルはしゃがんでライトを肩から降ろし、ルリの状態を確認する。

(……酷いな、これは)

ルリの腹に空いた穴からは血が流れ続け、出血のせいか目の焦点は合っていない。

「師匠……仕留められ………ませんでした………」

ルリは苦しそうに息をしながら途切れ途切れに言葉を吐き出す。

「黙ってる。座って楽な姿勢になれ。手当てを」

カイルは言い切る前に後ろから感じた殺気に反応して刀を抜いて両手で握り、前にかざす。

その直後、右緑のツーハンドソードがカイルの刀に打ち込まれた。

「……まあ、待ってくれるワケないよな」

カイルはそう言って刀に力を加えると、右緑も剣に力を込め、凄まじい力でカタカタとお互いの得物が振動し始める。

力はほぼ互角。鏢迫り合いでは勝負にならないと判断したカイルが行動を起こそうとした瞬間、カイルは視界の端に何かを捉えた。

「くらえ！」

ルリに突き飛ばされたリユンが駆けつけ、横から右緑に斬撃を繰り出した。

だがその攻撃も二本のナイフで防がれ、高い金属音が鳴った。

「勝手に相手変えるなよカイル。決着はまだだろうが」

リユンと同じくフリードも駆けつけ、鏢迫り合いで動けなかった右緑をカバーしたのだった。

「……参ったな。リユン、ルリの手当てを。止血だけでもやってくれ」

カイルは鏢迫り合いを続けながらリユンに呼びかける。

「手当てって、二対一で勝てるのか!？」

「なんとかなる」

リユンはその返答に少し呆れたが、カイルの真剣な表情を見て慌て頷いた。

カイルはリユンが下がったのを確認すると、

いきなり刀に加えた力を抜き、同時に左にステップ。そのまま右緑の剣を流して後ろに飛び退き間合いを取った。

右緑も後ろに下がり、それにフリードが並ぶ。

「さあてカイル、明らかにお前が不利だ。それでもまだやるか？」

「愚問だな。俺はまだ死ぬわけにはいかないからな」

フリードの問いにカイルはそう返すと、大剣を抜いて顔の前にかざす。

「手加減抜きだ。全力を尽くさせてもらう」

カイルは大剣を腰のあたりまで下ろす。その眼には緑の光が灯る。

それを見たフリードはほう、と感心したように呟く。

「それがケネスの言っていた緑色の瞳か」

「タイラント・アイだ。この能力の真価が発揮されるのは

」

カイルはそこで言葉を切り、カーディナルを逆手で抜く。

そしてその刃を自分の胸に突き立てた。

「っ、こっという時だ」

血が滴るナイフを引き抜き、荒い息をしながらフリードを睨むカイル。

それを見てフリードは笑い声を上げた。

「ハハツ、仲間がやられて気でも狂ったかカイル？二回目なのにまだ慣れてねえのかあ？」

カイルの耳にその言葉が届いた瞬間、カイルは大地を蹴ってフリードに突進。ドラゴネスを振り抜いた。

素早く反応した右緑がその斬撃をかけた剣で受け止める。

だが大剣はそのまま振り抜かれ、右緑は耐えきれずに弾き飛ばされた。

「余程死にたいらしいな、フリード」

「……どうやら相当強化されたみてえだな」

カイルのタイラント・アイは、基本強化とは別に己の蓄積ダメージが大きいほど身体能力が強化される。

カイルはその能力を利用し、苦痛と引き換えに戦闘力を得たのだ。

しかもタイラント・アイ発動中は使用者の体に激痛が走る。現在カイルの身体に掛かる負荷は計り知れない。

「流石だなカイル。だがな　　いくらてめえが強くなるうが結末は変わらねえんだよ！」

フリードはそう言うと、ナイフを持つ両腕を下げる。

「右緑、リミッター解除50%！」

フリードがそう叫んだ途端、カイルの真横から鋭い切っ先が突き出された。

カイルはそれを大剣の腹で受け止める。

が、余程勢いがあったのかカイルの体がやや後ろによるめいた。

「ぐっ!?!」

カイルは後ろに下がって体制を整えようとするが、さらに前に踏み込みながら追撃してきた右緑の刃を防ぐために大剣をかざして再び受け止める。

「……………補正込みのタイラント・アイの動きについてこれるなんて反則だろ……………」

カイルは舌打ちして目の前の右緑を睨みつける。その頬を一筋の汗が伝った。

既に疲労の伺えるカイルを見てフリードは相変わらずニヤニヤと笑

みを浮かべている。

「お前じゃ右緑には勝てねえよ。リミッターも半分解除したしな……そろそろ死んでくれ」

フリードがそう言ったと同時に右緑はバックステップ。そして再びカイル目掛けて剣を振るった。

カイルはそれを受け流しつつ実況を分析する。

(リミッター……つまり、こいつは力を抑えられているのか)

右緑の突き出す剣を横にかわし、大剣を振って反撃するが右緑のツーンハンドソードに阻まれる。

(フリードの言葉から察するに、こいつはまだ全力じゃない……だがそれでも俺と互角以上、全力を出される前に殺らないと俺に勝ち目はない！)

カイルは大剣を力強く握り締め、受け止められた状態から素早く大剣を引きつけて右緑に突き出した。

しかしそれを右緑は最小限の動きでかわし、膝を曲げて姿勢を落とす。そして跳躍しながら剣を下から上に振り上げた。

その斬撃はカイルの頬を掠め、その傷口から血が流れて汗と混じり

合い頬を伝うがカイルは気にせず大剣を真つ直ぐ右緑に向けて構える。

右緑は剣を振り上げた。ならば当然振り下ろすことになる。それを警戒してカイルは構えた大剣を下げる。

直後、カイルの頭に右緑の剣が振り下ろされた。

カイルは待っていたと言わんばかりに後ろに一步下がりがら下段に下ろした大剣を振り上げる。

キン、という軽い金属音が響き　　右緑の剣がカイルの目の前に突き立てられた。

カイルの剣は高く頭上にかかげられている。

「上級剣技ノ壱・刃落とし　　終わりだ!!」

形勢逆転。カイルは右緑の剣を空振りさせることで自分に有利な実況を作り出したのだ。

右緑の剣は振り下ろされた直後。剣を振り上げるのは間に合わず、カイルは大剣を振り下ろすだけで決着がつく。

が、そんな絶对的に有利な状況はカイルの後ろから響いた声で崩される。

「ハイドロポンプ！」

その声が聞こえたと同時にカイルは咄嗟に左に転がる。

すると、先程までカイルの立っていた場所を強力な水流が打った。

素早く起き上がったカイルはハイドロポンプを放ったフリードを睨み付ける。

「二対一ってことを忘れてねえか？」

「……………」

カイルはフリードの言葉に答えずにカーディナルを抜き、半身の姿勢をとってそれをフリードに、大剣は後ろにいる右緑に突きつけるように構えた。

「右緑！」

フリードの叫びに応えるように右緑はカイルとの間合いを詰めながらツーンハンドレッドソードを振るう。

カイルはそれを大剣の腹で防ぎ、左手に握ったカーディナルを右緑に突き出す。右緑はそれをバックステップでかわした。

続いて後ろからの殺気に反応して振り返りながらカーディナルを突き出すと、接近していたフリードはそれをクロスしたナイフの腹で防ぐ。

それを見たカイルは深く息を吸い込み

「煙幕！」

口から黒い煙を多量に吐き出した。

「クソ、厄介なことじゃがる！」

フリードは咳き込みながら煙から脱出するために後ろに下がる。

すると、フリードの前方から二つの影が飛んできた。

フリードはナイフを振って両方とも叩き落とすが、二つ目は重量のある物だったのか後ろによるめく。

その瞬間、フリードは何かに弾き飛ばされた。

「もらった！」

立ち上がるうとしたフリードの目の前に、居合いの姿勢で刀に手を掛けているカイルがいた。

カイルの背に大剣は無く、腰の鞘にカーディナルも無い。

しかしその疑問もすぐに解決した。何故ならフリードの視界の端に入ったのは、カイルの大剣と果物ナイフ。

「あれを投げつけやがったのか……」

フリードのナイフはカイルのタックルで弾き飛ばされた際に飛んでしまい、近くに二本とも転がっている。つまり、防ぐことはできない。

「……………あの世で罪を償え」

カイルは手に掛けた刀を引き抜く。

だが、刀を抜いた瞬間動きが止まり、カイルの目が大きく見開かれる。

そして、カイルの口から一筋の血が流れた。

「しまった……」

そう呟いたカイルの手から刀が零れ落ちる。

目の前の光景を目にしたフリードは、大きな笑い声を上げた。

「残念だったなあカイル！右緑がいなけりゃ、俺を今頃殺せてたのになあ？」

カイルの腹部から、右緑のツーハンドソードが飛び出していた。

カイルの背後には勿論、剣を突き出した姿勢の右緑が立っている。

（気配を隠して近づいていたのか……全く気がつかなかった……）

カイルは腹部に感じる灼熱の痛みをしかめ、地面に落ちた刀に目をやる。

(武器も無いし体も既に限界。オマケに敵に挟まれた状況……………)

カイルは口元に笑みを浮かべた。

(終わったな)

そんなカイルを見てフリードは溜め息を吐く。

「死の恐怖で狂ったか？」

「誰が狂うか」

カイルが素っ気なくそう返すとフリードはニヤリと笑みを浮かべた。

「冥土のみやげにいいこと教えてやろうじゃねえかカイル」

「……………？」

即、殺されると思っていたカイルの頭に疑問符が浮かぶ。

「お前は、何故俺が大群連れてこんなところにいるかわかるか？」

フリードは戦場を見渡す。

既に戦争を行っていた両国の兵士の殆どが殺害され、動いているの

は白いローブのポケモン達だけとなっていた。

「俺の今回の仕事は、俺達の力を見せつけることだ。そのためにこの戦場はうってつけだったのさ。両国の兵士が謎の集団に全滅させられたなんて事件がニュースにならんワケないだろ？」

「……世間の注目を集めるためか。そんなこととして楽しいか？」

カイルが馬鹿にしたように言うと、気分を害したフリードは、“右緑”と呟く。

同時に右緑がカイルを貫いている剣を捻り、カイルの腹部から流れる血が量を増す。

「ぐっ……」

「今の状況分かってんのか？」

苦痛の表情を浮かべるカイルを見て幾分機嫌を直したのか、その顔に笑みが戻る。

「俺はな、これでも組織の中でも幹部級の“ペンタグラム”の一角なんだ。こんな計画の通過点で立ち往生してられねえんだよ」

そう言いながらフリードは近くに転がる自分のナイフを拾い上げ、手のひらの上でクルクルと回してみせる。

「これだけ聞けば充分だろ？そろそろ死んでもらうぜカイル？」

フリードが言い切ると同時にカイルの体からツーハンドソードが引き抜かれ、カイルの足元に血の水溜まりが出来ていく。

カイルはよるめきながらも倒れないよう残った力で踏ん張る。

フリードはナイフを回すのをやめ、右手に握ったナイフを逆手に持ち替えた。

「俺の勝ちだ」

フリードは流れるような動きで、カイルにナイフを振り抜くはずだった。

突然何かがカイルに突進し、カイルは地面に叩きつけられた。

「がはっ……！？」

カイルは全身を駆け巡る激痛に呻きながらもすぐさま己の立っ

た場所を振り向く。

リユンがいた。先程までカイルが立っていた場所に。リユンがカイルを突き飛ばしたのだ。

目が一瞬だけ合い、リユンが微笑を浮かべる。

無慈悲に、容赦なく
フリードのナイフがリユンの胸に突き
立てられた。

依頼 41：真紅の暴君

信じたくなかった。

目に映る光景を。それを否定しなかった。

リュンの口から一筋の血が流れる。

その胸には、深々とフリードの握ったナイフの刀身が埋め込まれていた。

カイルの今まで戦ってきたことで培われた経験が無情な判断を下す。こいつはもうダメだと。

フリードは軽く舌打ちすると、リュンの体からナイフを引き抜き、噴き出した鮮血がフリード、カイルの体を赤く染め、右緑の深緑のローブにも血痕が写る。

そのままリュンの体は、崩れるように倒れ込んだ。

「……………嘘……………だろ」

カイルがその一言を喉から絞り出すと、倒れたリュンの頭が少しだけ上がり、吐血で汚れたリュンの口が開かれる。

「小隊長に……………謝つといて……………く……………れ……………」

それが彼の最後の行動であり、最期の言葉となった。

かすれた声でそうカイルに告げると、ガクツとリュンの頭が下がり、目から光が消える。

カイルはその一部始終を黙って見つめることしかできなかった。

訪れた沈黙に終止符を打ったのは、パチパチという拍手の音だった。

「ハッ！自分を犠牲にしてダチを守るってか？随分と格好いいことしてくれるなあ？」

カイルが声の主に視線を向ける。案の定、ニヤニヤと笑みを浮かべたフリードがパチパチと馬鹿にしたように拍手を続けていた。

「……………黙れ」

カイルが怒りで肩を震わせながらそう呟く。

だが、フリードは無視して続ける。

「俺が憎いかカイル。憎いだろっな、ダチ2人が目の前で犬死にしたらんだからなあ！？」

フリードはハハハッ、と笑ってそう言った。

勿論、これはカイルを挑発するために発した言葉。しかし、この言葉が戦局に新たな変化をもたらす。

カイルが笑い声を止めた時、そこに立っていたのはカイルの姿をした悪魔。

返り血を大量に浴びたかのように真っ赤に染まった肌に鮮やかな真紅の瞳、ゾツとするような笑みを張り付けたその顔はまさに殺人鬼のようだった。

その異常な変化にフリードと右緑は警戒して後ずさる。

「狂って能力の“たが”が外れたのか？ 凄い変わりようじゃねえか」
豹変したカイルの威圧感のせいか、フリードのナイフを握る手がじっとり汗ばむ。

カイルは近くに落ちていた自分の刀を拾い上げると、それを腰溜めに構える。

フリードが瞬きをした一瞬、フリードの目が開かれた時には目の前までカイルが迫っていた。

フリードは直感的に二本のナイフを掲げてバックステップする。

次の瞬間、フリードの体は宙を舞い、受け身もとれずに遙か後方に着地した。

そのまま勢いが止まらずに地面を少し転がり、兵士の死体にぶつかってやっと止まった。

「ぐっ……なんてパワーだ……」

フリードが焼けるように痛む胸を押さえて呟く。おそらく骨が数本折れているのだろう。

彼の右手に収まったナイフは刀身と鍔が碎け散り、柄の一部だけとなくなってしまっていた。左手のナイフは吹き飛んでしまったようだが、おそらく同じ状態だろう。

先程ガードしながら下がったお陰で骨折で済んだが、直撃ならば間違いなくフリードは即死していた。

加えてあのスピード。今のカイルは恐らく右緑を超えている。

フリードはそう判断すると同時に声を張り上げた。

「右緑！80だ！！」

フリードの声が響き、瞬時に右緑の動きが素早くなるが、豹変したカイルは右緑と互角の戦いを繰り広げ始める。

「八割解放で互角……なんてバケモンだ……」

フリードは戦いの様子を見て舌打ちし、辺りを見回す。

すると、重傷を負って待機しているライトとルリの姿が目に入った。

「あんな戦闘に加勢できるワケねえし、先にあいつらを始末しとくか……」

フリードは腰に巻いているベルトから予備の大型ナイフ二本を抜き取ると、ゆっくりとした足取りでライト達の方へと歩き出した。

「ヒャッハハハア!!」

カイルが笑い声をあげ、刀を振り回しながら右緑を攻め立てる。

一見滅茶苦茶に戦っているようにも見えるが、振り抜かれる刀は確実に右緑の急所を狙っていた。

すでにカイルの握っている刀は力任せの攻撃に耐えきれずボロボロになっており、右緑のツーハンドソードにも幾つかの刃こぼれが生じていた。

勿論そんなことは気にもとめず、命懸けの音速の戦いが繰り広げられる。

少し離れた場所にいたライトとルリは、その様子を呆然と眺めていた。

「凄………」

手当てを受けて多少楽になったライトがそう呟く。

「師匠が……暴走してる………」

包帯の代わりにリュンの鉢巻を巻いているルリも頷きながらそう言った。

「暴走か、違いねえ」

突然、二人の背後から声が聞こえ、二人が振り向くとそこには少し息を乱したフリードが立っていた。

「悪いが、てめえらには死んでもらうぜ。後々厄介になりそうだしなあ？」

フリードはそう言いつつ二本のナイフを見せつけるようにナイフを握った手をヒラヒラと振る。

「よくも……リユンさんを……!!」

ライトが歯を食いしばって痛みを耐えつつ戦闘態勢をとる。

ルリもそれに続くように刀の一本を杖代わりにして立ち、もう一本の切っ先をフリードに向ける。

それを見てフリードは呆れたような表情をした。

「それだけの傷を負ってまだ諦めねえのか。実力差も分かってんだろ、大人しく殺される」

「死ぬのは……アナタだ！」

「やるだけやる……それだけです……!!」

ライトとルリはそう言い放つと同時に電撃と黒球をフリード目掛けて放った。

しかしフリードは横に転がって電撃を回避、後続のシャドーボールは二本のナイフを振るって両断した。

「手負いのガキの攻撃が通用するとも思ってたのか？舐めやがって……」

フリードは舌打ちするとルリに接近し、右手のナイフを横薙に振った。

ルリは咄嗟に刀二本の腹でガードするが、ルリ自身の力はほとんど残っておらず、力負けして刀ごと弾き飛ばされてしまった。

「ぐっ……」

地面に激突した衝撃のせいか、ルリの腹に巻いたリュンの鉢巻に層血が滲み、口の中に血の味が広がる。

「クソツ……………雷！」

それを見たライトが残った力全てをかき集めて最大威力の稲妻をフリードに放った。

手負いとは思えない程、ライトの放った稲妻は力強くフリードへと迫る。

しかしフリードはナイフを持った腕をクロスし、こう叫んだ。

「守る！」

その途端、フリードを包むように緑色のバリアが発生し、ライトの雷を遮断した。

「なかなかの攻撃だが……………当たらなきゃ意味ねえよなあ？」

フリードは守るを解除し、全力での攻撃を防がれ満身創痕のライトに歩み寄る。

「さあて……………まずはてめえだ。仲間のデンリュウに会わせてやるぜ」

ライトには既に抵抗できる体力は残されていなかった。

ルリはよろめきながら立とうとしているが、杖代わりの刀無しで立つことは今のルリには無理だった。

カイルは狂ったように暴れながら右緑と戦闘中。誰もフリードのナイフを防ぐことはできない

目の前でフリードのナイフが高く掲げられ、ライトは己の死を覚悟した。

だが、フリードはナイフを振り下ろさなかった。否、振り下ろせなかった。

フリードは突然感じた寒気で、本能的に掲げたナイフを振り向きながら一閃する。

キーン、という高い金属音が響き、フリードの振ったナイフがその手から弾き飛ばされた。

そして、フリードの足元になにやら細長い物が落下する。

「チツ……ボウガンか」

それがボウガンの矢だと確信したフリードは、矢の飛んできた方角に目を向ける。

しかし、攻撃は予想外の場所から発生した。

フリードの足元の地面が砕け、そこから何かが飛び出したのだ。

「スカイアッパー！」

「なっ……！？」

まさかの不意打ちを回避することができず、繰り出された拳に顎を

打ち上げられるフリード。

フリードはなんとか受け身をとって着地し、攻撃の主を確認するために顔を上げる。

「どうした、大したことないんじゃないか？」

そう言いながら手招きして挑発するのはスカイアッパーを放ったであろっ一体のバシヤーマ。

「なんだとてめ」

「あら？事実を認めないなんて往生際が悪いんじゃない？」

フリードの声を遮ったのはよく通る高めの綺麗な声。

フリードが背後に目を向けると、鞭を手にして口元に笑みを浮かべているサーナイトが立っていた。

「……なんなんだてめえらは」

フリードは急に現れたポケモン達に怯みながらも左手に残ったナイフを構えて威嚇する。

すると、再び地面に亀裂が走り、現れたのは

「ここからは、俺達“jokers”も参戦させて貰うぜ」

大槌を持ったバンギラスのマティスが、地面を打ち砕いて姿を現すなりそう宣言した。

依頼42：jokers参戦！

「jokers……ケネスの言ってた傭兵集団だったか？わざわざ全員でご苦労なこつだ」

フリードは突如現れたjokersに突きつけるようにナイフを構える。

「jokersは何でも屋だ。それに……俺達はたまたまここを通りかかってな、運が悪かったな水色」

マティスはフリードにそう返し、近くで呆然としているライトとルリに目をやる。

「お前ら、カイルの弟子だろ？俺達はカイルの仲間だ、安心しな」

そのマティスの言葉を聞いて安心したのか、ライトは崩れるように座り込み、ルリも同様に座り込む。が、ルリは傷が深い上に出血のせいで意識が保てず、そのまま意識を失ってしまった。

それを見たミゲルの拳が震える。

「おい……ガキ虐めて楽しいか？」

「ハッ、殺し合いにんなこと関係ねえだろうが？」

フリードは冷ややかにミゲルにそう返す。

ミゲルは足に力を込めてフリードに飛びかかろうとしたが、それをミメットが前に出て制した。

「落ちて着いてミゲル。挑発に耳貸してどうするのよ」

ミゲルはその言葉で踏みとどまったが、その目は敵意を剥き出しにしてフリードを睨みつけている。

ミゲルのその態度にフリードは面白そうに笑みを浮かべる。

「何だ？俺とやり合う気か？手負いとはいえてめえみてえな雑魚に

」

「ストーンエッジ！」

フリードの言葉はマティスの技名を叫ぶ声に遮られ、同時にマティスの周囲に浮かび上がった複数の尖った岩がフリードに襲来する。

「チッ、アクアテール！」

不意を突かれたフリードだったが、素早く水流を尻尾に纏わせ、岩石を弾いた。

その隙にマティスが叫ぶ。

「ミメット、ミゲル！お前らはカイルを止める。こいつは俺に任せな」

ミゲル、ミメットは相変わらず暴れ続けるカイルに目をやり、頷いてカイルの方へと向かう。

フリードはそれを邪魔せず見届けると、マティスに向き直った。

「てめえ、あのバシャーモを俺と戦わせないために攻撃で遮ったな？」

「あいつじゃ、お前とは釣り合わん。実力差の無い俺がお前とやるべきだろ？」

マティスとフリードはお互いに武器を油断なく構える。

「一応名乗っとしてやるうじゃねえか。暗殺組織“グラム”、ペンタグラムの1人、フリードだ」

「……暗殺組織とは物騒なこつだ。“jokers”リーダー、マテイス。てめーと殺るのは二度目だぜ？」

「記憶にねえな。どこの雑魚だあ？」

突然、マテイスが大槌を横雑に振るい、フリードはそれをしゃがんで回避する。

「嫌でも思い出させてやるよー！」

マテイスが大槌を構え直すのと、フリードがナイフを構えて突進するのは同時だった。

ライトは突然の救援に驚き、安堵していた。

目の前で繰り広げられる激しい戦い。マテイスとフリードの戦闘は自分の戦いとは次元が違うことを認識できる。

しかし、マテイスの顔に焦っている様子は微塵もない。手負いのフ

リード相手ならば心配は無用だろう。

ライトは一息ついて、両腕を使って地面を這ってルリへと近づく。疲労と緊張の解けたことで足に力が入らず、立てる状態でなかったからだ。

だが、放っておけばルリは死んでしまうかもしれないほどの負傷だ。せめて、少しでも手当てできればと体を引きずる。

と、ドスドスという足音とともに何かがライトの横に影をつくる。

ライトが上を向くと　　そこには一体のサイドンがいた。

（もしかして　　敵！？）

ライトは先程まで姿のなかったサイドンの登場に動揺する。勿論、警戒しようにもライトには身構える力すら残されていなかった。

そんなことを気にとめず、そのサイドンは背負っていたリュックを下ろす。

「おし、手当てしてやっから体を起こしてくれ」

そのサイドンの言葉にライトの思考は一瞬、停止した。

「え……………jokersの方ですか？」

ライトは何とか相手に質問する。

「いや、俺は警官。jokersの補佐って思ってくれりゃいい。俺はバイル、お前は？」

「……………ライト」

バイルはそれを聞いて頷くと、リュックから救急箱を取り出す。

「んじゃ、手当ですっからじっとしてるライト。カイルなら仲間がなんとかしてくれる」

「あ、僕より先に彼女を手当てしてやってください……………」

ライトは尻尾でルリの方を指す。

バイルはルリを見て、わかったと言ってリュックを持ち上げる。

「先にアイツを手当てすっから、寝てる」

「この状況じゃ寝れないでしょ……………」

ルリの方へと歩み寄るバイルにライトはそう呟くが、言葉とは裏腹に凄まじい眠気に襲われる。

(もう……………ダメだ……………)

疲労と安心とで、ライトの意識は深く沈んでいった

「あれ、本当にカイルなのかよ？」

ミゲルは暴れ狂うカイルと、緑色のローブを纏ったポケモンの戦闘を見て呟く。

カイルは既にへし折れてしまった刀を捨てて素手で右緑に攻撃をしていた。

右緑はその攻撃をかわしつつ剣を振るが、カイルはその剣を手に炎を纏わせて受け止め、横に捻ってバキツと折ってしまった。

「……………滅茶苦茶ね。とにかく、なんとかしないと……………」

ミメットはその光景に恐れを抱きながらも刃付きの鞭を構える。

「今のカイルはあの妙な奴に集中してるし、隙について動きを封じるのがベストだろ」

ミゲルは腰につけたサイドバックから手のひらサイズの無線機を取り出し、スイッチを入れる。

「ラグ。カイルの動きを止めてくれ。頼むぜ」

ミゲルはそれだけ告げ、無線機をしまつて戦闘体制をとる。

「ラゲの狙撃を生かすの？」

「おう。カイルにヒットしたら即押さえるんだ」

ミメットは頷き、いつでも飛び出せる用に足に力を込めた。

カイルは業火を纏った両腕を右緑に振るい続けている。

「ヒヤハハハハア!!!」

笑い声をあげながら続くラッシュを右緑は一撃も受けず、すべて回避していた。

しかし、剣を失った右緑は反撃せず回避し続けるだけ。技を使おうとしないのだ。

だが今のカイルがそんなことを気にするワケもなく、マシンガンのように素早く連続で重い一撃を放つ。

「ハハハ……………ハ？」

その時、繰り出した拳を引きつけ、再び突きだそうと構えたカイルの動きが止まる。

その背中には一本の矢が突き刺さっていた。

「カアッ……………」

「今だ！！」

矢尻に仕込まれていた強力な神経毒が作用し、カイルの体が倒れ込むと同時にミゲルとミメットがカイルを押さえつける。

「眠ってカイル！」

ミメットは鞭の柄をカイルの後頭部に思いっきり叩きつけた。

するともがいていたカイルの動きが止まり、変色していた体の赤色が消える。

数秒後には、完全に元のカイルに戻った。

深すぎる傷を負っていることを除いて。

少し離れた岩場にいた一体のフライゴンは、構えていた大きめのボウガンに取り付けられた狙撃用スコープから目を離す。

「上手くいったみたいだけど……カイルが心配だね」

先程カイルに矢を撃ち込んだのはこのフライゴン　　ラグである。

ラグは狙撃用ボウガン、“飛燕弓”を背中に背負うと翼を広げ、カイル達のもとへ飛び立った。

「雷！吹雪！ストーンエッジ！悪の波動！」

マティスは疲労しているフリードに容赦なく技を叩き込んでいた。

「随分と反則な攻撃しやがる……………」

フリードは悪態をつきながら全力疾走で攻撃をかわす。

「どうした？俺は雑魚じゃなかったのか？」

マティスは大槌をフリード目掛けて振り下ろし、それを間一髪横に転がってかわすフリード。

「…………舐めんじゃねえぞ」

フリードは間合いを詰めつつ両手のナイフを一気に突き出す。

が、それはマティスの大槌の柄によって受け止められた。

「舐めんな？そりゃあこっちのセリフだ！」

マティスは大槌から右手だけを離し、握り拳をつくって地面に叩きつけた。

「地震！」

マティスの放った地震をモロに食らったフリードはバランスを崩し、隙ができる。

「もらった！」

マティスは体制を崩したフリードに大槌を横薙に振るった。

フリードはナイフをかざして少しでもダメージを軽減しようとしたが、凄まじい一撃を食らいフリードは地面に叩きつけられた。

「がはっ……」

「どうしたよ？怪我で本気が出せねーってか？」

マティスは余裕の表情でボロボロのフリードに大槌を再び構える。

フリードはゆっくり起き上がると、血の混じった唾を吐き捨てる。

「チッ……今回は俺の負けだ。右緑！」

フリードの呼び声が響き、すぐさま右緑が隣に現れた。

「わりいが退かせてもらっぜ。次はねえぞjokers………てめ

えらは俺達“グラム”に目を付けられてんだからなあ？」

フリードは右手首にはめたブレスレットに手を伸ばす。

「悪の波動！」

マティスは素早く暗い波動の弾丸を放つが、着弾する前にフリードと右緑の姿はかききえてしまった。

「……逃げたか」

マティスは舌打ちし、戦場を見渡す。

辺りは死体が転がり、まさに地獄のようだ。

白いローブのポケモン達も倒れており、ピクリとも動かない。

「マティス！！」

その時、マティスは己を呼ぶ声が聞こえ、振り返る。

そこにはミメット、ラグ、ミゲル。ミゲルの背にはカイルが背負われ、カイルの武器はミメットとラグが持っていた。

その顔には、不安や焦りが浮かんでいる。

「どづしたんだ？」

マティスが聞くと、ミメットが口を開く。

「カイルが……死にかけてるのよ……」

カイルを背負ったミゲルの足元に形成されていく血溜まりとカイルの生気のない顔色が、それを真実だと告げていた。

依頼42：jokers参戦！（後書き）

ちなみに、今回久しぶりの登場を果たした誰も覚えていないであろうフライゴンのラグ君。彼の使用したボウガン 飛燕弓は富嶽零さんが投稿してくださった名前です。

剣の名前で募集したのですが、富嶽さんの希望もあってボウガンの名前で使用しました。

さて、今回出た“グラム”という組織名。これは怒りという意味を持つ魔剣の名前から頂戴いたしました。

依頼43：暴君と言つ名の相棒

暗闇。

どこまでも続く、深く暗い黒の空間。

「……なんだ、ここは？」

カイルはその場所に立っていた。
視界には何も映らない。

（俺は……戦場にいた筈だ。なのに、ここはどこだ？）

辺りを見渡しても闇が広がっていて、目を閉じていても開いていても変わらない景色。

よう

「……」

突然響いた声に、カイルは咄嗟に身構える。

何びびってんだ？カイル

「誰だ……お前は！」

カイルは大剣を抜こうと手を背中に回すが、そこにあるはずのドラゴネスは無い。

そこでカイルはあることに気付いた。

（怪我が治ってる！？）

カイルはフリードや右緑との激しい戦闘で動くことすら苦痛になる程の重傷を負っていた。
その傷は跡形もなく消え去り、動きにも支障はない。

驚くのも当然だろーな、ヒヤハハハハ

声は、カイルの心を見透かしているかのように動揺を見破り、妙な笑い声を上げる。

(何なんだコイツ……！)

カイルは暗闇を覗むが、勿論そこには何もいない。

誰か、だと？ひでーな。“相棒”

カイルは確信した。心が読まれていることを。

(相棒だと?)

カイルはその言葉の意味を考える。

わかんねーか？俺様は、お前の相棒が殺されてからずっとお前の相棒だったのにか？

自分の相棒。それが誰なのか、迷うはずもなく頭に浮かぶ。

(殺されてから……二年前、か……)

ずっと、相棒。その言葉が当てはまるのは一人と“一つ”だけ

(タイラント・アイ……！)

「ご名答だぜ、相棒

タイラント・アイ。つまりカイルだけの特別な身体強化能力。

「ここは俺様の空間。この“対話”を俺様はずっと待ってたんだぜ？

「生憎お喋りしてる暇は無い。さっさと出せ」

カイルは声に対してそう凄む。

出せ、か。そりゃあそうか。お前の仲間はまだ戦って……いや、もう死んでるかもしれないもんな……ヒヤハハハ

「何……！」

その言葉でカイルの表情が一層険しくなる。

それは俺様にも分かんねえさ。それに、どちらにしるお前は仲間
間の援護に行けねーし

「どっぴいっことだ？」

お前は今、俺様の力に身を任せて暴走してんのさ。俺様にはそれだけしか分かんねーけど

暴走。その一つの単語でカイルは状況を理解することができた。何故なら、過去にも一度同じことがあったから。タイラント・アイの存在を知ったその時も、同じように暴走していたから。

(対話は無かったがな)

過去を思い出し、今の妙な状況に注意を戻す。

当たり前だろ？あの時は俺様の力の断片しかお前は引き出せなかったんだぜ？

やはり声はカイルの心を読み、そう返してきた。

「断片？つまり、今のタイラント・アイは完全じゃないのか？」

カイルがそう聞き返すと、虚空から笑い声が返ってくる。

ヒヤハハハ！やっと本題に入れるな。残念ながら時間は限られてんだ。手短かに話させて貰うぜ

（時間が限られてる？）

カイルが心に浮かべた疑問。それを声は読み取ったようで、溜め息を吐く音が聞こえた。

さつきも言ったが、お前は今暴走してる。原因は……分かるな？

「……リユン、だろ？」

躊躇いがちにカイルは答える。

お前の強い怒り、憎しみ、悲しみが枷を外したんだ。その感情が全て俺様の力に乗って暴れてる。つまり、見境なしに行動する今のお前は自身の状態すら気に止めねーのさ

カイルは声の言いたいことがなんとなく分かった。自分は重傷を負っていた。その体が暴走に耐えられる確証は無い。

「俺は、死ぬのか？」

まあ、俺様からすりゃあ五分五分だろうな。だから、お前の体が力尽きる前に本題を話さなきゃなんねーの。分かったか？

カイルは黙って頷く。

これまでも何度か命に関わる傷を負い、死を覚悟したこともある。だがそれは自分の体の状態が分かっていたことであり、今回は何も分からないまま妙な状況での死の予告。

「……死に恐怖を抱いたのは久方ぶりだ」

傭兵になってからずっと死を恐れずに戦ってきたカイルは、思い起こされる忘れられた恐怖に思わず笑みを浮かべる。

しかしそれは、滅多に見られないであろう虚勢を張るような笑み。

しかしそれはすぐさま真剣な面付きに戻る。

「どちらにしろ今更ビビっても何も変わらんしな。さっさと本題っ

てのを話せ」

か
ヒヤハハ、お前らしい考え方だぜ。それじゃあ話させてもらおう

声は再び妙な笑い声を上げると、少しだけ声のトーンを下げた。

「お前が俺様を目覚めさせたのは二年前。そして今回の出来事で“対話”が出来るほど俺様の力が解放された。それを伝えたかっただけだ

「つまり、これからは話し相手になれってことか？」

カイルは怪訝な顔で虚空に視線を漂わせる。

「これからは、俺様にも頼れってことだ。二年間お前を見てきたけどお前はすぐ無茶するクセがあるみてーだからよ、俺様が力になつてやらないこともないぜ？」

上から目線な声の言葉にカイルはニヤリと笑う。

「なら言うておく。足手まといになるなよ？新しい相棒」

ヒヤハ、誰に言ってんだ相棒？

この妙な笑い方をする声こそが、今までカイルの切り札であった相棒。お互いにこの対話で少しでもだけ打ち解けることができたようだ。

しかし対話はここで中断される。

突然カイルは足に力が入らなくなり、ガクリと膝を着いた。

「……………!？」

それを見た声は舌打ちする。

「どうやら時間切れみてーだな。そろそろお前の意識も無くなる。生還しろよ、カイル」

「勿論」

意識が朦朧とし始めたが、カイルは力強く頷く。

(死んでたまるか……!!!!)

カイルは己に気合いを入れ、ゆっくりと目を閉じる。

そしてカイルの意識は深い暗闇に吸い込まれるように落ちていった

これが、暴走中のカイルがjokersに鎮静させられるまでのカイルの意識の中で起きた対話である。

依頼43：暴君と言つ名の相棒（後書き）

久々の更新となり、申し訳ありません。

さて、実はjokersのアンケートを作成しました。よければ、ご参加下さい。思った通りに回答して下さい構いません。

アンケートへは、作者ページの「もっとみる」からリンクが貼ってあります。

一応、URLもここに

<http://enq-maker.com/cqrMgvs>

依頼44：強くなる……！！

「こんなもんか……」

椅子に腰掛けていたバンギラスのマティスは、先程まで走らせていたペンを机に置く。

その机の真ん中に置かれた数枚のA4サイズの紙には、マティスが調べた“グラム”に関する情報が細かく書き綴られていた。

既にフリードとの戦闘から一週間が経つ。その一週間の間、マティスは自身の持つ情報網をフルに活用し、フリードの言った言葉“暗殺組織グラム”の情報を集めていたのだ。

マティスはその資料をぼーっと見つめ、溜め息を吐いて窓際へと視線を移す。

「いい加減起きてくれ………カイル」

その言葉に対する応えは彼の口からは発せられない。

小部屋の窓際に設置された一つのベッドの上で眠り続ける一人の大剣使い。あの戦いから、彼は瞳を開いていない。

マティスは椅子からゆっくりと立ち上がり、ベッドに歩み寄る。

「充分休んだだろうが。さっさと起きやがれ」

何度目になるか分からないが、マティスはそう呼びかける。
勿論、カイルは反応を示さない。

マティスは舌打ちすると、ベッドに背を向けて机に戻ろうとした。

カラン

「ん？」

マティスが振り返ると、ベッドのすぐそばにある小さなテーブルから一本のナイフが落ちていた。

カイルのミスリル製のナイフ、カーディナルをマティスは拾い上げ、テーブルの上へと戻す。

「ったく、自分のナイフくらい自分で拾え」

マテイスがカイルに向けて吐いた愚痴は、言い切る前に止まってしまった。

カイルの黒い瞳が、ぼんやりと白い天井を見つめていた。

「……………ここは？」

目を覚ましたばかりで朦朧とする意識の中、カイルはそう呟くように言葉を発する。

「よう、起きたか」

カイルが視線を声の方へ移すと、そこには笑みを浮かべているマテイスがいた。

「俺は……生きてるんだな」

カイルが思わず呟くと、マティスが笑いながら頷く。

「お前はそんな柔な奴じゃねえだろ？今回は流石に危なかったけどな」

その言葉にカイルも少しだけ笑みを浮かべる。

しかし、マティスとの会話で少しずつ覚めてきた頭には気を失う前のフリード達との戦闘が徐々に思い起こされてきた。

「ライトとルリは」

「大丈夫だ。二人ともほとんど回復してる。一週間の間ずっと回復に当ててたんだぜ？」

カイルがそう問うのが分かっていたかのようにすぐさまマティスが答え、カイルは安堵の溜め息を吐いた。

（二人とも結構重傷みたいだったからな……無事でよかった）

ホツとした表情でカイルは顔を上げると、何故かマティスが険しい

顔をしているのが目に入った。

「……………カイル、少し話がある」

少しだけトーンを下げたマティスの声に、カイルの表情も自然と真剣なものに変わる。

「何だ？」

「……………“暗殺組織グラム”について何か知ってるか？」

マティスが聞きたかったのは“グラム”の情報。自分より先にフリードと接触したカイルなら何か耳にしているもおおかしくはないからだ。

“フリード”の単語を聞いた途端、カイルの表情が暗くなる。

「……………フリードがその“ペンタグラム”とかいう精鋭に選ばれてることしか知らん」

「……………そうか」

少しだけ間を置いてマティスはそう言ったが、カイルは聞いていなかった。

「……………畜生……………」

ぽつりと呟かれたその言葉に、マティスは思案していて伏せていた顔を上げた。

「……………カイル？」

マティスの呼び掛けを無視し、カイルは己の右腕をゆっくりと両目を隠すように顔の上に置く。

「マティス……………悪いが10分だけ部屋から出ててくれないか？」

カイルは冷静を装って告げたつもりだろう。だがマティスは気付いた。

その声は僅かにかすれ、カイルらしくない声だった。

マティスは無言で頷くと、さっさと質素な扉へと歩いて小さなノブを捻る。

パタン、という音とともにカイルは一人になった。

「……駄目だな……俺」

カイルは誰に言うわけでもなくそう呟く。

腕の下にある脛の裏に雫が貯まっていくのを感じ、容量を超えた雫が、脛から少しずつ溢れてカイルの目のよこに一筋の線を作る。

友の仇を討つために死に物狂いで力をつけた。

だが、それでもフリードを倒せなかった。

そればかりか自分が冷静さを欠いてフリードに突っ込んだばかりに弟子は傷付き、リユンを死なせてしまった。

「何やってるんだ俺は……結局、二年前と何も変わらないじゃないか……」

深く苦しい悲しさがカイルの心を貫き、悲しみの滴を流させる。

俺にもう少し実力があれば……こんなことにはならなかったのかも
しれない。

その後悔が悲しみに拍車を掛け、カイルはそれに耐えようと強く奥
歯を噛み締める。

そのまま空いている左腕で拳を握って上半身をベッドから起こすと、すぐ横にあった白い壁にその握り拳を思いつき叩きつけた。

一瞬だけ響く鈍い音とそれに続く破壊された壁の欠片のパラパラと崩れる軽い音。

(落ち着け……過ぎたことをグダグダ考えるな……)

感情をそのまま拳に乗せることで少しでも冷静になろうとしたカイルの行動。しかしそれでも流れ落ちる涙は止まらなかった。

「悲しいのか、カイル？」

頭の中に響く、一つの声。

それは“対話”の時より鮮明に聞こえた。

(……………黙ってる)

カイルは少しも驚かずに無愛想にその声に返す。

すると、呆れたようなため息が返ってきた。

「カリカリしてんじゃないやねーよ阿呆。さっさと目の汗止めないと仲間が来ちまうぞ?」

確かに、先程壁を殴ったせいで間違いなく音が響いた。すぐに心配したマティス達が駆けつけてもおかしくない。

カイルは黙って右腕でゴシゴシと目を拭い、流れていた涙を拭き取る。

「……………仲間に心配はかけれないってか?」

(こんな情けないところを見せられると思うのかお前は)

深く息を吐き出し、暗い気持ちを振り払うかのように軽く頭を左右に振る。

するとドタドタと慌てたような足音が耳に届き、数秒後に部屋に一つだけのドアが勢いよく開いた。

「おい!どうかしたのかカイル!?!」

ドアを開けたのはバシャーモのミゲル。その慌てようからして、結構音が響いていたようだ。

「ああ、少し壁を殴った。悪い」

カイルはいつもの調子で対応する。

ミゲルは少しだけ眉をひそめたが何も言わずに室内へと歩を進めた。

「カイル、お前にお客さんだぜ」

ミゲルが少しだけ横に体をずらすと、ミゲルの影で見えなかった位置から二人のポケモンの姿が現れる。

「師匠、大丈夫ですか？」

そう言ったのはカイルの弟子、ライト。その隣にはもう一人の弟子のルリが立っており、二人とも心配そうな顔をしていた。

「大丈夫だ。俺はお前達の方が心配なんだが、どうなんだ？」

マテイスから聞いているがカイルは一応そう返しつつ二人を観察する。目立った外傷は見当たらなかった。

「私たちはほとんど治りました。……それより、本当に大丈夫なん

ですか師匠？」

カイルはルリの言葉に内心苦笑する。

(余程心配をかけてしまったみたいだな……)

自分を心配そうに見ているライトとルりに心配するな、と言っておく。

ライトはいつもと変わらぬカイルに少し安心したようだったが、ルリは悲しそうに目を閉じ、口を開いた。

「師匠は何だか……とても苦しそうに見えます」

一瞬、驚きで呼吸が止まった。

戦闘において相手に自分の感情を表に出さないよう、カイルはポーカーフェイスには自信がある。今の心情が顔に出る筈がない。

するとミゲルが腕組みしながら納得したように頷く。

「なるほど。そついやルリは“かんじょうポケモン”だったか」

その言葉でカイルも納得できた。
ルリはカイルの強い悲しみや後悔などの感情を敏感に感じ取っていたのだ。

ライトもそれを聞いた途端、悲しげに俯く。

「すみません……僕達が弱くて、師匠に辛い思いさせてしまっ……」

「悪いのは勝手に首突っ込んだ俺だ。お前らの責任じゃない。謝るな」

すぐさまカイルは謝るライトの言葉を否定する。

「でも私が右緑を倒していれば」

「右緑は俺でも倒せなかった。お前が倒せる相手じゃなかったんだ」

タイラント・アイ使用時のカイルでも倒せなかった右緑をルリが倒せる筈がない。

その正論に、ルリは口を噤む。

「なら、倒せるように強くなればいいだけだろ？」

ミゲルが放った一言で、全員がミゲルの方を向いた。

「強くなれば、敵にやられることもないしな。俺じゃ上手く言えないけどさ……目標見つけて、そのために強くなればいいんじゃないか？」

「強くなる……なる……」

ライトとルリは考えるようにその言葉を呟く。

「……そうだね。強くなればいいんだ。師匠の足を引っ張らないように」

「はい。師匠に背中を預けてもらえるくらい、強くなってみせます……」

光に満ちた二人の瞳と力強い決意の言葉。それを聞いてカイルは頷いた。

そうだ。ミゲルやライト、ルリの言った通り強くなればいい。

今までの努力で足りなかったのならば、更に努力すればいい。

そうすれば、相棒やリユンのように目の前で仲間を失うこともないだろう。

カイルはうつすらと笑みを浮かべ、ベッドから起き上がる。

「ん？寝とかなくていいのか？」

「ああ、任務があるんだろ？」

ミゲルが聞くと、カイルは分かっているかのようにそう言った。

ミゲルは頭を掻きながら笑う。

「相変わらず勘が鋭いなあカイルは。お前にも参加してもらったんだぜ？」

「元からそのつもりだ。さっさと行くぞ」

カイルは近くのテーブルに置かれたナイフ、カーディナルを掴み取って部屋を出て、ミゲルの案内でライト、ルリと共にマティス達の元へと向かう。

途中、カイルに“あいつ”が話しかけてきた。

「吹っ切れたか？」

（まあな）

「ヒヤハハ、そうか！」

カイルの返事に満足げに笑い声を上げる。

「カイル、相談ならいつでも乗ってやる。俺様のことは“暴君様”
って呼べ」

（様なんて付けるか。相談か……）

カイルは少し考える素振りをした後、こう返した。

（じゃあ、恋愛相談に乗ってもらおうか？）

「は!!!？」

暴君の素っ頓狂な声に思わず笑みをこぼすカイル。

（冗談だ）

「……なんだよ、面白くないな……」

依頼44：強くなる……！！（後書き）

更新遅れましたね（汗）

なんだか今回の話は無理矢理つぱい所があるかもしれない。作者、
こつという描写が非常に苦手です。

戦闘ならば幾分マシかも。いや、そうでもないか………

依頼45：新たなる刃

どうやらカイルのいた小部屋は二階にあったらしい。ミゲルの案内で階段を下りた際にそのことに気がついたカイル。

中からなのでよく分らないが、jokers全員が滞在しているとみるとそれほど狭い家ではなさそうだ。

「っと、ここだ」

ミゲルに案内された先は一つのドア。勿論中に入るためにカイルはノブに手を掛け、ドアを開く。

開かれたドアの奥には薄い茶色に染められた壁が広がり、あまり狭くないその一室の中には二人のポケモンが何やら会話をしている。

すると、ドアが開いたのに気付きこちらに目を向けたポケモンマティスとカイルの目が合った。

「よおカイル。調子はどうだ？」

会話を止めてにたりと笑うマティスにカイルは頷く。

「ああ、もう大丈夫だ。少し壁がへこんだけどな」

「……殴ったのか」

「悪い」

悪びれずにそのまま室内に入るカイルに続き、ミゲル、ライト、ルリも入室する。

とりあえずカイル達は各々手近な椅子に座ると、カイルが話を切り出す。

「で、今回の任務は？」

「ああ」

マティスは頷き、先程まで会話していたポケモンへと目を向けた。

その視線の先には一人の いや、一羽(?)の鳥ポケモン、カモネギが怪訝な表情で座っていた。

そしてその黄色の嘴を開き、言う。

「マティス殿……本題に入りたいのは山々でござすが、壁は弁償してもらえるでござすな？」

(……ござす?)

そのカモネギの妙な口調に、少し失笑するカイル。

「ああ、ちゃんと金は払う。で、いいか？」

「なら安心でござす」

そのカモネギの安心した表情を確認すると、マティスはカイルに向き直った。

「じゃあ本題に入るが、いいな？」

「あれ？ミメットさんはどうしたんです？」

部屋を見渡してそのことに気付いたルリがマティスに聞く。

「ミメットは装備一式を事務所に取りに行かせた。ラグとバイルも付けてな」

分かっているだろうが、勿論ミメットのテレポートを使ってだ。

「……………なるほどな。今回は結構キツそうな任務になりそうだ」

カイルは溜め息を吐き、椅子にもたれる。

「……………？どういづことですか師匠？」

ライトはカイルのその反応に首を傾げる。

「……マティスから聞いてないのか。全員参加で基本装備以外のも
持っていくんなら、普通の任務じゃないに決まってるだろ」

カイルの説明に、ライトは納得したように頷いた。

「さてと、んじゃ本題に入るか」

マティスのその一声で、全員がマティスへと視線を集中させた。
するとマティスは、くいつと顎を動かして隣を見るよう促す。

全員がその隣のカモネギに視線を移すと、彼はこくりと頷いて話し
出した。

「実は……おいどんの故郷の村が、大きな盗賊団に乗っ取られてし
まったんでごわす！しかし、おいどん一人で盗賊団を追い払うなど
無茶な話……そこでjokersに依頼したんでごわす！」

そのカモネギの話聞き、カイルは眉を顰める。

「……つまり、村を取り返せってことか……盗賊団の規模は？」

カイルの質問に、今度はマティスが口を開く。

「確か、百人強はいるはずだ」

「「ひゃ、百!?!」」

その答えにライトとルリは思わず聞き返し、ミゲルは顔をしかめ、カイルは再び溜め息。

「作戦は？」

敵の数に少しだけ気を落とすミゲルがマティスにそう聞く。

「陽動作戦を行う」

マティスはそう答え、カイルに目をやる。

「単純に敵を全滅させるのは厳しい。だから盗賊団の頭を叩いて混乱を誘い、それに乗じて殲滅を行う。カイルは頭を叩け」

「わかった」

カイルはそうなるのが分かっていたかのように普通に頷く。

「だが、盗賊団の頭の実力は未知数だ。カイル一人で倒せるとは限らない。だから、コイツをつける」

マティスはそう言って隣のカモネギを指す。

カイルは単独行動だと思っていたのか、目を見開いた。

「……實力は？」

カイルの問いに、カモネギは胸を張って答える。

「心配無用でござす！おいどんは最強のサムライの弟子でござすから！」

カイルは疑わしげに目を細め、ミゲルの方を向く。

「どうなんだ？」

「知らね」

首を横に振って即答するミゲル。

「信じられないでござすか！？ならば」

カモネギはムムーっと考え込み、

「剣を交えれば分かることとござす！」

背負ったネギを右翼で抜いて腰の辺りに添え、左翼で支える。

「……………」ここでか」

啞然とするjokersの面々と正面で構えるカモネギを眺め、カ
ーディナルを手に取り、立ち上がりつつ鞘から抜き放つ。

「おいどんの名はアツカ！カイル殿も名乗るでござす！」

「カイルだって知ってるだろ。お前、言ってるしな」

カイルがそう返すと、カモネギもといアツカは不満そうに濃い眉を
顰める。

「サムライは戦う前に名乗りを上げるのが当然でござす！」

「知るか。さつさとやるぞ」

アツカの言葉をバツサリ切り捨て、カイルはナイフを構えて床を蹴
った。

それを見たアツカも素早く床を蹴る。

「居合い斬り」、でござすー！」

お互いが接近すると同時に、アツカのネギが瞬時に動いて一閃され
る。

「ま、分かってたけどな」

カイルはその鋭い一撃を易々と受け止めるが、内心ではその剣速に驚いていた。

「サムライの名は伊達じゃないってことか」

「舐めてもらっては困るでござすよー!」

アツカは素早く後ろに飛び退くと、自身の羽を力強く振るう。

「エアスラッシュでござす!」

空を切り裂く衝撃波がカイル目掛けて放たれる。が、カーディナルを素早く振ってそれを掻き消す。

「!?!?!」

エアスラッシュが切り裂かれると同時にアツカが斬りかかってきた。

（エアスラッシュは布石か!）

ギリギリでカイルはアツカの斬撃を防ぐと、そのネギを跳ね上げて後ろに下がる。

「流石jokersでござす………ならば、これならどうでござすか?」

距離を取ったアツカはネギを斜めに構え、姿勢を低くしてカイルに突進する。

そして、駆け抜けるようにカイルの脇を猛スピードで走りつつネギを振り抜いた

つもりだったが、ネギを振る直前にカイルが足払いをかけ、全力で走っていたアツカは見事に顔を床に打ちつけた。

「速い一撃には目を見張るものがあるが、動きが直線的で読みやすいのは残念だ」

そのまま転倒したアツカの首筋にカーディナルをピタツと突きつけ、アツカにそれを確認させるとカーディナルを鞘に収めた。

アツカは床に伏せたまま、悔しそうにネギを握りしめる。

「くう……おいどんもまだまだでこわすか……」

「だが、とりあえず連れて行って損はないな。行けるか、アツカ？」
カイルが倒れているアツカにそう言って手を差し出す。

一瞬、アツカは驚いたような顔をしたが、すぐに真面目な表情に戻る。

「……勿論、よろしくでござすカイル殿!!」

アツカはその手を羽で握り返すと、力強く頷きながらそう言った。

場所は変わって、依頼主であるアツカの家のリビング。

少しばかり広いその部屋の六人掛けのテーブルに所狭しと並べられた料理を平らげる一人のポケモン。

「……凄い食いつぶりだな」

「んまあ、腹が減ってたのはわかるけどよ」

「十人前はあると思うんですが……」

「一週間食べてなかったから仕方ないといえば仕方ないけどね」

「腹が減っては戦は出来ぬと言っでござすし、存分に食べるでござす!」

ちなみに上からマティス、ミゲル、ルリ、ライト、アツカの感想だ。彼らの目の前で料理を食い尽くしていくのは勿論カイルである。既にほとんどの料理が皿の上から消え失せていた。

最後に盛り付けられたサラダを口の中に押し込み、満足げに一息つくカイル。

「ふう。結構食ったな……三人前くらいか？」

「三倍弱だ。この大食らい」

マティスが呆れたようにため息を吐き、カイルは首を傾げる。

「そうか？もう少し食えるんだが」

ゴシゴシと腕で口元を拭うカイル。その言葉は冗談のようで冗談ではない。

「……そういえば、ミメットさん達戻ってくるの遅いですね」

ライトがそう言いつつ時計に目をやると、ミメット達が事務所に移動してから約一時間が経っていた。

「確かに。誰か様子を見に行くか？」

ミメット達を案じたミゲルはそう提案するが、マティスは首を横に振る。

「どつやってだ？テレポートを使えるルリは事務所に行ったことがない。帰ってくるのを待つしかねえだろ」

「……それもそうか」

マティスの言葉にミゲルはため息を吐いて頷く。

コンコンッ

不意に、リビングに繋がっている二つのドアの内一つからノックする音が響き、全員の視線がそのドアに集中する。

ガチャリという音と共にドアが開き、少し疲れた表情をしたサーナイトのミメットが姿を現した。その後ろに見えるフライゴンのラグとサイドンのバイルにもやや疲労がみえる。

そして、三人とも大きめのケースやバッグを持っていた。

「噂をすればなんとやら、だな」

カイルがそう呟くと、ミメットがカイルの存在に気付く。

「あっ、目が覚めたのねカイル!!」

嬉しそうにミメットが微笑み、カイルは手を軽く挙げて返す。

「遅かったな。どうかしたのかミメット？」

マティスがミメットに聞くと、ミメットはバツが悪そうに顔をしかめる。

「……武器保管庫の鍵の場所を覚えてなくて、探すのに時間がかかったのよ」

「お陰で俺達は無駄に苦労したんだぜ」

バイルの皮肉に自分に非があるミメットが言い返せる訳もなく、恥ずかしそうに俯く。

「……鍵の位置くらい覚えねえとなミメット」

マティスが呆れ顔で注意すると、ミメットはますます表情を暗くする。

「それより、さっさと装備を配ってくれよ」

見かねたミゲルが助け舟を出す。ミメットは慌てて頷くと、手に持ったケースを開け、中から一振りの刀を取り出した。

「はい、カイル」

「……俺のか？」

差し出された刀に戸惑いつつ、カイルはそれを受け取り、鞘から抜いてみる。

抜き放たれた刀身は美しい銀色の光を反射しており、刃の厚さは通常のものより薄い。薄い青色に染まった正方形の鏢に続く藍色の柄はやや細く、通常の刀より軽いようだ。

美しいが頼りなさそうな自分とは不釣り合いなその刀にカイルは顔を曇らせる。

それを見たミメットは少し笑いながら説明する。

「実はそれ、私用にあつらえた特注品なのよ。扱いやすさを重視してるからカイルには少し物足りないかもしれないわね」

「どつりでな。俺の刀はどこいったんだ？」

その刀を見つめていると、刀身の付け根の部分に何かが刻まれているのに気付く。

刀身に黒で小さく彫り込まれているのは“蝶刺蜂”という文字

つまり、この刀の名称だ。

「師匠の刀は、暴走した時に折れたんです」

ミメットに代わってライトがそうカイルに伝える。カイルは黙って頷き、刀の刀身を目の前にかざす。

「蝶刺蜂……蝶のように舞い、蜂のように刺すってことか。俺には似合わないな」

カイルは笑みを浮かべると、蝶刺蜂をゆっくりと鞘に収めた。

ミメットはカイルが刀をしまったのを確認すると、今度はもう一つのケースをそのままルリの前に置く。

「これは事務所にルリ宛てに届いてたの。クロスってポケモンからよ」

「おじさんが!？」

ルリは驚き、そのケースをまじまじと見つめる。

「開けてみる。悪いものじゃない筈だ」

ルリはカイルの言うとおり、金属製のケースを両手を使って開く。その中には、ルリに合わせたサイズの二本の白と黒の刀が入っていた。

恐る恐る片方の白い鞘の刀を手に取り、鞘から抜くと、鞘と同じ純白の刀身が現れる。

もう片方の黒い鞘の刀も同じく、抜き放つと漆黒の刀身が姿を現した。

刀身も、柄も、鞘さえも同じ色の白と黒の刀だが、鍔だけは濃い金

色の輝きを放っている。

シンプルな造りだからこそ美しい二本の刀に、皆が見とれてしまう。

「……ルリ、少し貸してみろ」

ルリは二本の刀の白い方をカイルに手渡す。

カイルはその白刀の刀身をじっくりと眺め、一度軽く振るとルリに返した。

「まさかとは思ったが……あのクソジジイ、どれだけ金を持つてるんだ」

「どうかしたのか？」

ミゲルはカイルの驚きと呆れの合わさった複雑な表情を見て聞く。

「その二本……純ダマスカス鋼製の刀だ」

「ダマスカス鋼？」

「既に生産方法の失われた伝説の金属で、ミスリル並の価値がある。その二本は間違いなく最上級の業物だな」

ルリの疑問にカイルが説明してやると、ミスリルの価値を知っているライトとルリはあまりの驚きに口をポカーンと開けて白と黒の刀を見つめる。

「……流石は鍛冶職人として名高いクロスだ。ダマスカス鋼なんて

送ってきやがるとはな」

いや、マティスもその価値を知っていたようで、何やら考え込むように腕組みをする。刀にどれくらい値がつくのかとでも考えているのだろうか。

わからないミゲル、ミメット、ラグ、バイルはしきりに首をひねっているが、アツカはサムライだからか刀を見てはしゃいでいる。

その二本の刀にもその名称が刀身に刻まれており、ルリは白刀に目をやる。

白い刀身に鍔と同じ金色で刻まれた名は“Toran”。
次に黒刀に目を向けると、同じく金色で刻まれている“ene1”の文字。

フリードや右緑との戦いで損傷してしまった双剣の後釜は、対極の色を持つ心強い刀。

「トランとエネルギー……ですね。ありがとうございますクロスおじさん……」

ルリはそっと手を合わせてクロスへの感謝の言葉を呟いた。

依頼45：新たなる刃（後書き）

今回のタイトルは“アツカ”“蝶刺蜂”“トラン&エネル”のことを言っています。アツカもjokersの新たなる刃なのです。

今回登場した“蝶刺蜂”は富嶽 零さん、“トラン”“エネル”はaqwinさんが投稿してくださった名前です。お二方、本当にありがとうございます！

それと初登場のサムライカモネギ、アツカ。彼の口調はjoker sの中で最も特徴的です。

実力はなかなかのものです。ミゲルやミメットに届きそうに届かないくらい？伊達にサムライやってないでこわす。

依頼46：ハーヴェ村奪還作戦開始（前書き）

前から思ってたのですが、jokersには装備の携帯に関する描写がほとんど無いですよ？ただ“腰に挿す”や“背負う”くらいのものでしたし。

今回はせつかくなので装備についての描写も行いました。分かりにくいかもしれませんが、そこは作者の表現力不足です（汗）

それと、装備を整えたせいで「ポケモンらしくない」のにさらに磨きがかかったのかもしれないが、開き直すことにしました。もともとそういう小説ですし、悩むのは止めになります。

それでは、少し前書きが長くなりましたが、46話をご覧ください。
い。

依頼46：ハーヴェ村奪還作戦開始

翌日。

まだ日が昇って間もないころ、カイルはその壁を壊した小部屋で目を覚ました。

腕を上には伸ばして伸びをし大きく欠伸を一つしてベッドから這い出し、目を擦りながら昨日持ち込んだケースをベッドの下から引っ張り出す。

ケースの大きさは座布団を二枚並べた程のもので、金属製の丈夫なケースだ。

その留め具を外して開き、中に入っている何やら黒い物を取り出す。

カイルはそれをバサツと振って広げ、背中に回して羽織り、首の辺りの留め具を留める。

それは漆黒のマントであり背中には“jokers”と赤で書かれている。つまり、jokers専用のマントだ。

丈は長く足元まであり、背中に垂らすようではなく体を包む大きさがある。

「……………これを着るのは久しぶりだな」

久々のマントの着心地に少し違和感を覚えながらも、再びケースに手を突っ込む。

続いて取り出したのは手のひらサイズの小さなナイフ。これは携帯性や扱いやすさを重視した投げナイフである。

そのコンパクトな投げナイフをマントの内側に縫い付けられた革製の鞘に次々と挿していく。

jokersのマントはこうした武器の携帯や、鎧として扱われる。そのため丈夫で軽い。

さらに幾つかの武器をマントにしまうと、壁に立てかけていた刀“蝶刺蜂”とテーブルの上に置いていたカーディナルを腰のベルトに挿し、ドラゴネスをマントの外に付けられた留め具に引っ掛ける。

さらにベルトの後ろに小さな袋を付け、準備が整ったことを確認した。

「準備できたか？」

（ああ、完全武装なんて久しぶりだ）

いつもより重い体に慣らす為に軽く何度かジャンプするカイル。

「俺様の出番はありそうか？」

暴君の問いに、カイルは少し考えてこう答えた。

「無いことを祈るさ」

頭のなかで響く暴君の高笑いにつられて笑みを浮かべると、小部屋を出てリビングへと向かった。

リビングには既に任務に参加するメンバーの半数が待機していた。

腕組みをして立ち、おそらく任務の手順の最終確認でもしているのであろうマティスと窓際で静かに外の景色を眺めているミメットは二人ともカイルと同じ黒のマントを身に付け、マティスだけは背中の大槌が目立っている。

精神統一でもしているのだろうか。アツカは得物であるネギを目の前に置き、目を閉じて床に座っている。

その近くで椅子に腰掛けているのはルリ。やはり他の面子より緊張しているのだろうか、表情が堅く、視線がキョロキョロと部屋をさまよっている。

この二人は通常と変わらない装備で、アツカは襷掛けのソードベルト、ルリは太腿辺りに付けているストラップに剣を挿していた。

リビングに入ってきたカイルに気付いたマティスがカイルに軽く手を上げて挨拶すると、カイルも手を上げて返してマティスに歩み寄る。

「まだ全員来てないのか」

「もうじき来るだろうよ。それより、体調は大丈夫か？」

「ああ」

昨日まで怪我で寝ていたのが嘘のように動ける自分の回復力にカイルは呆れつつ関心する。

それから幾つかの言葉を交わし、少し体を動かさそうと思ったカイルは会話を切ってマティスから離れた。

と、そのカイルのマントが何かに引っ張られ、何気なく振り向く。

そこに立っていたのはルリ。突き出された右手には青色の、どこかで見えた細長い布が掴まれている。

「……これは師匠が持っていてください」

カイルは頷いて受け取り、それを見つめる。

そしてようやく気が付いた。これは、リュンが巻いていた鉢巻である。

ルリが持っているのは手当ての際にそれを包帯代わりにリュンが使用したからだった。

「リュン……」

リユンは強かった。実力はあまり高くはなかったが危険をかえりみず異常だった戦場に飛び込んだ意志の強さや仲間を気遣う優しさ。そして、出逢って間もないカイルを命懸けで庇った勇氣。

カイルはそのリユンが身に着けていた青の鉢巻を刀の鞘に巻き付けた。

彼の強さを忘れるワケにはいかない。

「……………御守りにはなりそうだ」

最後にもう一度だけお人好しのデンリュウのことを思うと、ルリに礼を言っつてその場を離れた。

生き残るための犠牲は必要ない。その犠牲を出さないよう、万全を期すべくカイルはウォーミングアップを始めた。

まずは昨日受け取ったばかりの蝶刺蜂をゆつくりと抜き、片手でクルクルと回したり放つたりしてその重力を腕に覚えさせる。今まで使ってきた刀と違いこの刀は軽いため、まだカイルは慣れていないからだ。

ある程度慣れてきた所で今度は鞘に収めて居合いの動作を行ってみる。勿論、本気で振り抜くワケにもいかないので鞘から抜くまでで止めるのだが。

すると、やはり瞬時に行う動作のためか軽い蝶刺蜂だと少しばかり安定感がなく、いつものようにいかない。

(まあ、慣れない軽量化された刀で剣技が口クに使える筈もないか)

他の代刀があるワケでもないの、あまり気にしないことにしてまた片手で回してみたりする。

と、カイルの耳にガチャリというノブを回す音が届いた。

反射的に振り返ると、装備を整えたミゲル達残りのメンバーがドアを開きつつ姿を現した。

「おお、もうみんな来てんのかよ」

部屋を見渡して驚くミゲルも黒のマントに身を包んでいる。

その後ろにいるラグは襷掛けのベルトで飛燕弓を背負っており、装備の無いライトとバイルは必要な荷物を入れたりユックを背負っていた。

「揃ったな」

マテイスがそう言うと同時にカイルは蝶刺蜂を鞘へと収めて皆の下へと戻る。

座っていたアツカとルリも立ち上がり、ミメットも窓際から戻り、全員が自然と円を描くように並ぶ。

「わかってると思うが、今回の任務は戦力差が大きい。お互いを力バ―しつつ確実に敵を減らしていくのが陽動班である俺達の役割だ」

マティスがそう言い、潜入班である二人以外が頷く。

「カイル、アツカ。出来るだけ気づかれないう敵のボスを倒し、その事を盗賊団全体に知らせる。効果があるとは断言できんが多少は効く筈だろ」

カイルとアツカも頷き、それを確認するとマティスはミメットの方を向く。

「よし、じゃあテレポートで移動するか。カイルとアツカは離れろ」
ミメットはあらかじめ転移場所まで行っており、それで陽動班は村まで移動することになっている。つまり

「……俺達は自分の足で向かえってことか？」

カイルが怠そつにマティスに聞くと、当然だろ？とでも言いたげな表情をしていた。

「カイル殿！おいどんは翼でござす！」

カイルは自慢げに言うアツカを一瞥すると、深くため息を吐いた。マティスはそれを見て少しだけ笑う。が、すぐに真剣な表情をつくる。

「……まあ、そういうことだ。誰も死なせずにさっさと済ませて酒でも飲むぞ」

全員が無事で任務を終了させられればいい。その気持ちを込めてマティスはそう言った。

「マティス、それは軽く死亡フラグだ！」

しかし何故か妙に爽やかにミゲルに突っ込まれた。

「ミゲル、それはハイテンションで言う言葉じゃないわよ……」

ため息を吐いてそれに突っ込むミメット。

だが、このやりとりで皆の緊張はやや緩和していた。

「よし、そろそろ行くか」

カイルは隣のアツカにそう言うと、リビングを出ようと扉へと向かい、その手前で立ち止まって振り返る。

「武運を」

そう一言、残りのメンバーに言うとアツカと共にリビングを出て行った。

「武運……な。負けるなんてことは俺がさせねえよ」

マティスはニッと笑うと、ミメットに促した。

ハーヴェ村。

アツカの故郷であり、現在盗賊団に占領されている森に囲まれた小さな村である。

勿論周りを仕切る塀などがあるわけでもなく、どこからでも攻めるのは簡単であるが、マティス達はあえて“正門”から入ることにしていた。

もともと、正門といっても小道から村に続くだけの箇所であり、門などありはしないのだが。

その正門に堂々と歩きながら近付いていく二つの影。

マントに身を包んだバシャーモとリュックを背負うサイドン
ミゲルとバイルだ。

一応正門ということもあり他の箇所より見張りの数が多い。勿論、その内の一人が彼らの姿に気付く。

「おい、お前ら。この村に何の用だ」

二人の前に立ちふさがったのは騒音ポケモンのバクオング。

赤く鋭い瞳と大きく開いた口は威圧的だが、体格はそれほどでもな

い。おそらく異常発生時に自慢の大声でそれを知らせる為に配置されてるのだろう。

バクオングの他に配置されていた数体のポケモン達も二人の方に向かってくるのが見えた。

バクオングは旅人とも思ったのかあまり警戒はしていない。ミゲルは特に緊張した様子でもなく目の前のバクオングに一步步近づき、口を開いた。

「ぶっ壊しに来てやったんだよ」

同時に炎を纏わせた拳　炎のパンチをバクオングの広い顔に叩き込む。

「ぶへあっ!?!」

バクオングは情けない声を上げて後ろに吹き飛ばされた。

「何!?!」

「チツ、変な輩が攻め込んできたぞ!」

それを目撃していた見張りのポケモン達が武器を取り出してミゲルに向かって走り出す。

「ロックブラストオ!」

しかし素早くバイルが放った複数の岩石が命中し、そのポケモン達も倒れる。

「つたく、盗賊団ともあろうものが呆気ないぜ」

「いいや、まだこれからだぜバイル？」

呆れたようにため息をつくバイルにミゲルはある一点を指差して教えてやる。

そこには、先程ミゲルが殴ったバクオングがふらふらと立ち上がっていた。

「敵襲だぁー！！！！」

バクオングの叫びがハーヴェ村に響き渡る。

わざわざ正門から攻めた理由はコレ。確実に騒ぎを大きくするために見張りの多い場所を選んだのだ。

「さあてと、騒ぎは起こした。後は精一杯暴れ回るだけだ」

離れた茂みからその様子を確認したマティス達残りのメンバーは茂みから姿を現した。

「カイルが上手くやってくれるといいけど」

髪に付いた葉を払いながらミメットがそう呟き、鞭を手取る。

「きつと師匠ならやってくれます。行きましょう」

その隣で、ルリがゆっくりと白と黒の双剣を抜き放つ。

「……………大丈夫、僕ならやれる。うん、よし、イケるイケる……………大丈夫大丈夫」

さらにその隣では、何やらブツブツと呟き己を鼓舞するライト。

「援護は任せて下さい」

ラグは飛燕弓に矢を装填し、準備を整えた。

マティスは一同を見渡し、己の大槌を掲げる。

「いくぞ」

その一言が、激戦の開始を告げた。

依頼46：ハーヴェ村奪還作戦開始（後書き）

戦闘は次回からです。既にワクワクしてきました（笑）

とりあえずライト、頑張れ。

ライト「き、緊張しすぎて足がカタカタと」

大丈夫だ。帰ったら酒が飲めるぞ。

ライト「よしっ！どこからでもかかってこい盗賊団！！」

依頼47:lets 拷問(前書き)

サブタイでは拷問と言いつつも、実際に書いたら間違いなくR15
なので自重しますよw

今回はカイル&アッカサイドです。

依頼47：let's 拷問

「始まったか」

やや離れた場所から聞こえてくる叫び声や怒号、爆音が作戦の開始を知らせてくれる。

カイルとアッカも森に紛れて既に村に侵入しており、一軒の民家の陰に身を潜めていた。

「よし、カイル殿！行くでござすよ！」

張り切ってネギを引き抜くアッカにカイルは頷く。

「よし、頭領の所に案内してくれ」

カイルとアッカの目的は“盗賊団の頭領の殺害”。殲滅を有利に進めるために二人だけで確実に頭領を殺すために身を隠して動いているのだ。

カイルはアッカに案内するよう促すが、アッカの表情が突然固まった。

「え？おいどんが知るワケがないでござすよ……………」

「は？」

カイルは思わず聞き返すが、頭は冷静に働いていた。

いくら元住民のアツカでも先日占領されたばかりの村の内部情報など知っている筈がない

「……聞き出すしかないな」

カイルは予想外の事態に溜め息を吐き、民家の陰から出て辺りを見渡す。

「聞き出す、でござすか？」

首を捻るアツカをよそに、カイルは状況を探るべく神経を集中させる。

上空には飛び交う鳥ポケモンが見られ、耳に届く騒ぎもどんどん大きくなっていくことから、盗賊団の多くがマティス達の方に向かっているのが分かる。

戦っていない数は少ないな。危険覚悟でやるしかないか

「アツカ、盗賊団員を探すぞ」

カイルの言葉にアツカは固まる。

「……カイル殿、見つかったら全部水の泡でござすよ？」

カイル達は陽動の際に作戦を行う為、敵に見つかるのは応援を呼ばれたりする恐れもあってよい考えとは言えないのである。

「なら、見つからずに捕らえるだけだ。それとも自信が無いのか？」

「なっ！お、おいどんだってやる時はやる男でござすよ！」

カイルに試すような視線を向けられたため、思わずそれに乗るアツカ。

それを聞いてカイルは満足げに頷くと、マントの内側に挿した小型ナイフを一本引き抜いた。

「アツカ」

アツカの名を呼び、小型ナイフを軽く上に放る。

そして、そのナイフが手に収まる瞬間、再び口を開く。

「さっそく敵だ」

同時にカイルの腕が振り抜かれ、少し離れた小屋に立てかけられた薄い木の板に小型ナイフが突き刺さった。

ぐらりと板が倒れると、その陰から一人のポケモンが姿を現す。

「アララ……見つかったわね」

現れたのはイーブイの分岐進化の一匹である草タイプのリーフィア。身を隠してたのがバレたと分かるとすぐさま戦闘態勢に入る。

「見つかったのはこっちもだ。まあ、逃がさずに捕らえればいいだけだな」

カイルはもう一本ナイフを引き抜きつつリーフィアを見据える。

「残念だけどここで倒させてもらっわ。私、盗賊団の中でもトップクラスの腕前なんだから！」

リーフィアが言い放つと同時に彼女の周囲に浮かび上がる木の葉の刃。

カイル達の対応は素早かった。すぐさま二人とも技を放つ。

「火炎放射！」

「エアスラッシュでごわす！」

「葉っぱカッターよ！」

リーファイアが放った葉っぱカッターをカイルの炎が燃やし、残骸を風の刃が切り裂きつつ進む。

しかしリーファイアもエアスラッシュを軽いステップで回避すると、アツカに接近して両腕を振りかぶった。

「リーフブレード！」

腕の下に生えている草が瞬時に伸び、鋭い剣となってアツカを襲う。

「なんの、燕返しでござす！」

アツカも素早くネギを振ってリーフブレードを迎撃する。

キーン、という弾きあう音でネギと草の剣が反発してお互いが後ろによろめいた。

「もらった」

その隙を逃さずにカイルは手にした小型ナイフをリーファイアの右肩に突き出した。

吸い込まれるように短い刀身がその体に入り込み、リーファイアが思わず悲鳴を

上げられなかった。それを予測していたカイルがもう片方

の手でリーフィアの口を塞いでいたからだ。
甲高い悲鳴はよく通るため、敵が気づかないとも限らない。だから
悲鳴を阻止する必要があった。

「この距離なら逃げられないだろ……抵抗するなら次は殺す」

カイルは小型ナイフから手を離してカーディナルを抜くと、それを
リーフィアの首筋に添える。

リーフィアは鋭い殺気と自分の状況を理解し、黙って頷いた。

「よし、アツカ。少し民家を使っぞ」

「え、頭領の場所を聞き出すんじゃないんでござるか？」

カイルの意図する事がわからず、アツカは首を捻る。

カイルは笑いながら、捕らえたリーフィアを指差してこう答えた。

「拷問が手っ取り早いだろ？」

「ちよつ、待ちなさいつて！なんで拷問なんか……………」

何やら喚いているリーフィアを無視し、彼女の手足をグルグルと口
ープで縛っていくカイル。

「カイル殿……………拷問なんかできるでござすか？」

「安心しろ。傭兵時代は尋問、拷問は得意分野だったからな」

リーフィアにとっては全く安心できない言葉を平然とカイルは放つ。

カイル達はリーフィアから情報を聞き出す為に手近にあつた民家を
借り、居間を使って拷問を行おうとしていた。

「お願い……………拷問なんかやめてよ……………」

肩の痛みで潤んだ瞳で懇願するリーフィア。

普通のポケモンなら思わずドキッとしてしまいそうなものだが、
残念ながら二人とも普通ではなかった。

「おいどんも乗り気ではないでござすが……………観念するでござす」

「嫌なら知つていることを全部吐け。まあ、裏切り者扱いされても
おかしくないけどな」

アツカは目を伏せつつ答え、カイルにいたっては既に尋問モードであった。

「はあ、私の色香が効かないなんて……あなたたちもしかしてガチホ
」

「そうか、そんなに楽になりたいのか？」

カイルは少し顔を引きつらせながら背中ドラゴネスに手を掛ける。

「じよ、冗談に決まってるじゃない！」

慌てて先ほどの言葉を取り消すリーフィア。
「というか、こんな状況でよく冗談が言えるものである。」

呆れたように溜め息を吐くと、カイルはカーディナルを抜いてリーフィアの眼前に突きつける。

「さあて、グダグダ喋ってる暇もないしな。さっさと始めるか」

場の雰囲気が一変、暗く重い威圧感に部屋が支配される。

それに吞まれたのかリーフィア表情は青ざめ、アツカは居心地悪そうに足踏みする。

カイルは何故か楽しそうにクルクルとカーディナルを手のひらで回しつつ、リーフィアをじっと見つめる。

そして何か思いついたのか、カーディナルを回すのを止めて、それをリーフィアの鼻先に突きつけた。

「そうだな。まずは、このナイフとお前の血でその顔に落書きでもするか。女だから顔が傷付くのは嫌だろ？」

カイルがニーツと笑みを浮かべ、リーフィアの顔が恐怖で染まる。

「ああ、勿論殺しはしない。まだ一段回目だしな………素直に全部吐けば拷問はしないけどな」

拷問の基本は、自白を逃げ道だと思わせること。兵士やよほど口が堅い者でないかぎりは少し脅かすだけでも充分である。

このリーフィアも所詮は盗賊団の一構成員に過ぎない。何度も首を縦に振りながら「何でも言うつから」と言ってくれた。

「……で、盗賊団の頭領は村長の屋敷にいるんでごわすね？」

「ああ。かなり脅しといたから本当だろうな」

リーフィアから情報を聞き出したカイルは、それをアツカに伝える。アツカも途中までは尋問を見ていたのだが、何故か途中で外に出てしまったのだ。本人曰わく、「尋問中のカイル殿はかなり恐ろしかったでござす」だそうだ。

「村長の屋敷はそれなりに広いし、周りには塀があるから侵入は大変だと思っでござす」

アツカが腕組み……いや、羽組み？をしながらカイルに知っている事を伝える。

しかしカイルは特に悩みもせず「楽勝だ」と言った。

「なら“侵入”じゃなく“強行突破”にすればいいだけだ。屋敷に突入さえすれば援護が来る前に強引に頭領を倒せる」

確かに、目的が“頭領の殺害”ならば最終的に見つかるのが関係ない。今は速やかに遂行するために隠れているが、わざわざ隠れたまま殺害しなくてもよいのだ。

「それもそうでごわすな。そうと決まればカイル殿！さっさと行くでごわすよ！」

「ああ」

アツカが民家から飛び出し、カイルも後に続こうと足を進めるが、何かを思い出したように立ち止まる。

カイルは小型ナイフを二本引き抜き、それを振り向いて投げる。

「情報提供ご苦労さん」

カイルの投げかけた言葉にリーフィアは唸ることしかできない。両手両足を縛られ、さるぐつわを噛まされた拳げ匂、首の左右には今投げたばかりのナイフが水平に壁に突き刺さっており全く動けない状態だからだ。

扉を閉めて姿を消すカイルに、リーフィアはもう一度恨めしそうに唸るのだった。

依頼47:lets 拷問(後書き)

それと、感想の制限を解除したので、ユーザー以外の皆様も是非感想をよろしくお願いします！

勿論、批評もOKですが荒らしはダメですよ

依頼48：葱と矢の二重奏

「ミゲル、右に跳べ！ “ストーンエッジ”」

視線の先にいるミゲルが指示通り右に身を投げると同時に、出現させた無数の岩の破片をミゲルの立っていた場所へ放つ。情けない悲鳴を上げながら倒れる盗賊団員を確認すると、すぐさま別の敵へと注意を移しつつ携えた大槌を握り締める。

「チツ、キリがないなこれじゃあ……」

マテイスは倒しても次々と沸いてくる盗賊達に舌打ちする。元々想定していたこととはいえ、予想を上回る盗賊団の実力と対処の迅速さで既に劣勢なのだ。予定ならば奇襲の混乱に乗じて数を減らしつつ戦いやすい場所に移動する筈が、未だに攻め入った門に近い位置で戦闘している。

「くらえっ！」

突然背後から響く声と背中に走る衝撃。

いつの間にか背後をとられていたらしい。じわりと流れる血を無視して振り返ると同時に大きく吹き飛ぶグランプルが視界に映った。

「だいぶ鈍ってやがるなこりゃあ。たまには自分で依頼を受けてみ

るか」

振り向きざまにフルスイングした大槌を構え直しつつそう呟く。事務仕事ばかりで腕が落ちたことを実感し、苦笑する。

依頼は全て他の jokers に任せていた。特にカイルに至っては全体の依頼の半分以上は受けていただろう。

(いつの間にか俺を超えてたんだよなあ……あいつは)

jokers に入った時はまだカイルは未熟だった。だが多くの依頼を経て、リーダーのマティスを超えるまでに成長した。

それだけでなく傭兵時代に習得した様々なスキルや強大な力を己に宿すタイラント・アイ。

冷静で素早い判断能力、卓越した戦闘センスがある。

だからこそ任せられる。大規模な盗賊団を統べる頭を、討つことができる。

予想以上に苦戦している現状では、カイルの勝敗で全てが決まる。上手くいけば状況を覆すことができるだろう。

それまでに自分ができることは、仲間を一人も欠けさせずに持ちこたえることだけだ。

「さっさと頼むぜ……カイル」

視界の端にいるミメットが数に押されて苦戦しているのに気付き、右手に暗い波動を集中させる。

己の役目を果たすべく、マティスは力強い悪の波動を放った。

リーフィアから聞き出した情報を元に、カイルとアツカは村長の屋敷に来ていた。

村長の屋敷と言っても、そこまで立派ではない。精々二階建てで普通の民家より大きい程度のものだ。

「やはり見張りがいるか……」

植え込みの陰に身を潜めていたカイルは屋敷の前に陣取っている数体のポケモンを発見し、残念そうに呟く。

マティス達の襲撃で盗賊団の大半を引きつけられたようだが、頭領の護衛を疎かにはしていないようだ。それだけ頭領に人望があるのだらう。

これならばマティスの計画通り、頭領を討つことで盗賊団を混乱に陥れることが可能だろうとカイルはほくそ笑んだ

「敵は5人……裏に回ろうにも、3人が周りを巡回してるでござすね。どうするでござす?」

隣で意外と冷静に見張りを観察していたアツカがカイルに聞く。

「隙を突いて中に入ってもどうせ後で気付かれるだろうしな。邪魔にならないよう先に殲滅しておくか」

「強行突破でござすね？」

殲滅と聞いて気合い充分に背中へのネギを抜くアツカ。

しかしカイルは首を横に振る。

「強行突破だと頭領に気付かれる。だから出来るだけ静かに殲滅する」

「でも、周りに身を隠す障害物が無いでござすよ？おいどんは接近戦でしか戦えないでござす」

今隠れている植え込みから見張りまでの距離はおよそ十数メートル。気付かれずに倒すのは、アツカの言つとおり厳しいだろう。

そう、今の装備ならば。

「アツカ。俺があいつらを混乱させる。その隙に素早く殲滅してくれ」

カイルは“合図まで待て”と付け加えた後、気づかれないよう慎重に移動を始めた。

離れていくカイルを見つつアツカは腕組みして考える。

(気付かれないように混乱させる？カイル殿といえどそんなこと出来るでござるか……？)

暫く考え込むが、当然カイルの行動を読める筈もない。

(まあ、おいどんはやるべき事をやるだけでござす！)

考えるのをやめてネギを片手に見張りを強く見据え、合図を待つ。

カイルは出来るだけ慎重に移動し、行動できる位置へと移動すると自分のマントの中に手を突っ込む。

懐から取り出したのは、白く小振りな弓 ショートボウと呼ばれる武器だ。

続いて弓と同じくサイズの小さい矢の束を取り出し、その内の一本に腰の袋から取り出したボールのような物を括り付ける。

「距離は充分……風向きも良好……完璧だな」

行動に移る前にコンディションを確認し、先程準備した矢をショートボウにつがえて見張りのポケモン達に集中する。

狙うは見張りのポケモン達　　ではなくその中心部。しっかりと定めて弦を引き絞り、半身の状態で手を離れた。

いくら小振りなショートボウと言えども射程距離は100メートル以上。瞬く間にカイルの狙い通り見張り達の中心へ撃ち込まれる。

そして同時に、矢を中心に白煙が広がった。

カイルが放った矢に括り付けていたのは煙玉。それも普通より大量の白煙を出せるよう細工してある物だ。

見張り全員を白煙で覆えるよう、あえて中心に矢を放ったのである。

見張り達は突然煙が発生したことで混乱しているようだ。離れていてもざわついているのがよく分かる。

ここからはアツカがやってくれるだろうが、それでも1対5。援護は間違いなく必要だろう。

いつもなら剣を片手に突撃するところだが、折角煙があるのだ。それと弓を利用すればおそらく無傷での殲滅も可能だ。

左手に小さな弓を、右手には小さな矢を持つ大剣使い。

どう見ても体の大きさに合っていない上、普段は剣士の彼なのだからかなり違和感のある格好となっているがそんなことはどうでもいい。

「さてと……大剣使いが多芸なことを教えてやるか」

突如として煙に包まれた屋敷の正面。

うろたえる見張り達に向かって猛スピードで駆けていくのは勿論、ネギを掲げたアツカ。

視界を遮られ、混乱状態にある彼らがそれに気付く筈もなく、易々とアツカの攻撃を許してしまうことになった。

「ぎゃっ……」

「か……」

煙の中を駆け抜けながら素早く得物であるネギを振り、二人を片付ける。

さらに両足で踏ん張って急減速し、再びネギを振り上げて一閃。煙越しに倒れ込むポケモンが目に映る。

声すら上げられず仕留められた三人目から目を離すと、慌てて身構

えるポケモンがアツカの目の前にいた。

煙で見えにくいだが、目を凝らすと大きなハサミのような頭が特徴的
カイロスというポケモンのようだ。

「く、くそっ！本当に来やがった！」

武器は持つておらず、じりじりと後ずさりながら両腕を体の前に構えるカイロス。焦っているのがまるわかりである。

アツカはその様子を見て調子付き、ビシッとネギを突きつけるように構える。

「おいどんは誇り高きサムライ　アツカでござす！」

奇襲でもなんでも、戦う時には名乗りを上げる。それが彼のモットーである。

名乗る前にやられた三人は気にはいけないらしい。

完全に雰囲気呑まれてるカイロスは震える腕で威嚇することしかできていない。なんせ突き出されているのは仲間の血で濡れた血刀^{ネギ}なのだ。

アツカはそのままネギを腰にあてがい、居合い斬りの姿勢をとる。

「このおいどんの名刀、“甘白髪”に斬れぬ物など有りはしないでござす！」

アツカは決め台詞とばかりにそう言つと、得意の居合い斬りをカイロスに浴びせんと肉薄。ネギもとい“甘白髪”を横雑に振るう。

が、甘白髪はカイロスには届かず、ガキンという高い音でその緑色の刃（？）が止まった。

「おう、随分とうまそうな名前のネギじゃねーか。俺に少しかじらせろや」

ニタニタと笑みを浮かべてアツカを見下ろすボスゴドラという怪獣のような容姿をしたポケモン。煙の中から現れ、鋼で被われた岩のような手でアツカの斬撃を受け止めていた。

「斬れぬ物など有りはしない」んじゃなかったのか？おい」

「……相性が悪かっただけでごわす」

小馬鹿にしたような物言いにムツとするアツカ。

居合い斬りはノーマルタイプの技。対してボスゴドラは岩と鋼の複合タイプ。易々と止められるのも無理は無い。

「んじゃあ、相性差でそのまま朽ち果てろや」

ボスゴドラが頭を大きく反らす。アイアンヘッドでも使う気なのだろう。

甘白髪はボスゴドラの右手がガッチリと掴んで離さないが、手放せ

ば楽に回避できる。

が、アツカは回避をすることを止めた。

何故なら、突然ボスゴドラの体が震え始めたからである。

「な……なんで……そつ、そうか……仲間か……」

体を震わせながらもアツカを憎々しげに睨むボスゴドラ。が、そのまま力尽きて首を反らしたままがくりと倒れてしまった。

「な、何が起きたでござすか……」

困惑するアツカだったが、ボスゴドラの体を良く見ると、それは解決した。

ボスゴドラの首筋に一本の矢が立っていたからだ。

それに、先程まで立っていた筈のカイロスも体を矢で射抜かれたままピクリとも動かない。

「ふー、助かったでござすよカイル殿　？」

アツカは礼を言おうと辺りを見渡すが、カイルの姿が見当たらない。

既に煙はほぼ消えてしまっているのだが、アツカの周りには倒れている見張りしかいなかった。

「一体どこから」

「後ろだ」

「!?!」

すぐさま振り向くと、地面からゴソゴソと這い出てくるカイルがいた。

「意外と楽だったな。煙のおかげで誰も地面になんか気を配らないから、“穴を掘る”を利用してかなり接近して射れた」

体に付いた土を払いながら左手の弓を持ち上げるカイル。

「カイル殿の援護のおかげでさっさと殲滅できたでござりますよ。まさか弓まで使えるとは思ってなかったでござります」

「まあ、傭兵やってた時はいろんな武器使ってたからな。アツカが予想以上にやってくれたおかげで助かった」

お互いに称賛しながら武器をしまう二人。

アツカは甘白髪の色を拭ってから背中に背負い直す。

「さてと、さっさと頭領も倒すか。いくぞアツカ」

周りを巡回していた見張りは駆けつけた際に素早くカイルが倒してしまつたため、完全に邪魔者はいない。

目の前の屋敷の玄関を見据えつつ、カイルはアツカにそう言い、扉を開けた。

依頼49：盗賊団の頭領

足が震える。

体が熱い。

息が苦しい。

力が……入らない。

「ハッ……ハッ……」

小さな体全体を使って呼吸を行う。

伝い落ちる汗の滴を拭う余裕もなく、ライトは目の前の敵を見据える。

「へっ、ガキのくせして結構根性あんだな」

苦しそうに立つライトに、余裕たっぷりにそう言うのは、蜂のような容姿をしたスピアーというポケモンだ。

その両隣にも、レディアンとコロトツクの二匹の虫ポケモンが並び、ライトを囲むように広がっている。

現在、jokersは劣勢に立たされていた。

いくら実力があろうとも、いくら連携が取れていようとも、数にはかなわない。倒しても倒しても次から次に沸いてくる人海戦術相手に、ミゲルやミメット、マティスにさえも疲れが見え始めていた。

その中でも、最も疲弊しているのはライトだ。

「おーい、さっきまでの俊敏な動きはどうしたよ？」

徐々に距離を詰めてくるコロトツクが、からかうように言う。

ライトは自慢のスピードを活かして敵を攪乱していたのだが、ライト自身あまりスタミナに自信がある方ではない。

数の差もあって、全力で動き回っているうちに体力に限界がきてしまっていた。

ライトは目の前の虫ポケモン三匹を警戒しながら後ずさりする。が

「そろそろ死ねよ。“マツハパンチ”」

レディアンはボロボロのライトなど敵じゃないとでも言いたげに一瞥すると、一瞬で距離を詰めて拳を突き出してきた。

「っ！“電光石火”！」

「おおっと、逃がさないぜ。“毒針”！」

辛うじてレディアンの拳を電光石火を使ってかわし、その勢いを利用して距離をとるライトに、スピアーが追撃の毒に染まった鋭い針を撃ち出す。

「っ！」

回避直後で息を整えている最中のライトは反応が間に合わず、飛来する毒針を見て体が硬直する。

よけられない　　！！

命中を覚悟したライトだったが、毒針が命中する直前に目の前を何かが通り過ぎ、高い金属音と共に毒針が叩き落とされた。

「……ふう。大丈夫ですか？」

白と黒の刀を交差するように構えたルリが、呼吸を整えながらライトの隣に立つ。

「た、助かつ　　」

「お礼は後です！」

礼を言おうとしたライトに緊迫した声でルリはそう言うと、急いでライトの手をつかんでテレポートを発動させた。

「なっ！逃げるなガキっ！」

ルリの割り込みで怯んでいた三体のポケモン達はそれを阻止しようとするが、距離が開いていたおかげで邪魔されることなくテレポーターは成功し、二人に攻撃が届くことはなかった。

訳も分からず移動させられたライトの視界に最初に移ったのは、大槌を振り回して牽制するマティスだった。

乱れた息を整えながら辺りを見渡すと、ミゲルやミメット、ラゲ、バイル　味方全員が揃って円陣を組むように並んで戦っている。

「……あはは、ちよつと必死になりすぎたかな」

どうやら攪乱するのに集中しすぎて、仲間の動きに気付けなかったらしい。あまり離れたつもりはなかったのだが、いつのまにか孤立してしまっていたようだ。

「おうライト！無事か？」

前方で戦っていたマティスがライトに気付き、その声をかける。当然攻撃の手を緩めることなく、自慢の剛腕を活かした大槌で盗賊団員をなぎ倒しながらだ。

「か……かろうじて……」

余裕そうに返事をしたところだが、あいにくそんな余裕など微塵もない。正直走るだけで今は限界だった。

マティスもそれを理解したようで、“大文字”や“雷”等の中距離技を連発しながら後退し始める。

「仕方ないな……一時的に撤退する！このままじゃやられるのがオチだ！」

マティスはそう大声で叫ぶ。

元々そうすることを予測していたのか、ミゲルとミメットの対応は素早かった。二人共広範囲に攻撃出来る技を乱発しながら後退していく。

「くそっ！カイルはまだかよ？」

「これだけの盗賊団の頭領が弱いワケないでしょ？持ちこたえるしかないのよ！」

ミゲルが若干辛そうに顔を歪め、強気にそう言う。ミメットも表情に焦りが見える。

サイドンのバイルは“ロックブラスト”、フライゴンのラグは“竜の息吹”やボウガンで攻撃していくが、数が多すぎて牽制程度にしかない。

「……少しマズいかもですね」

「せめて僕が囷になれば良かったんだけど……」

片腕でライトを支えながら“マジカルリーフ”を撃つルリにライトがそう言う。

自慢の素早さで援護したくても走り回るだけの体力はすでに尽きている。ライトは自分の無力さを呪うしかなかった。

「ん？」

疲労で力の入らない足でなんとか移動するライトの視界の端に、何かが映る。

その“何か”は自分から見て前方　　つまり盗賊団のひしめき合っている方向の上空に見え、急速にサイズが増している。つまり、自分達に接近してきているのだ。

ライトがそれに気付いたと同時に、その“何か”から黒いエネルギー弾が飛び出した。

マズい！！

黒いエネルギー弾、おそらくシャドーボール。それは真つ直ぐに自分とルリに迫ってくる。

しかしルリは周囲の盗賊達を牽制していて、それには気付かない。

迎撃できるのは自分だけ。しかし今の状態で放つ電撃では相殺すら難しい。

「……………くうっ……………」

それならば技の火力で自身の力不足を補うしかない。ライトは即座にボルテッカーを発動させる。

(打ち消す必要はないんだ……………受け止めて、流しきる！)

全身を包む電撃はいつもより微弱で頼りない。

その電流を“雷パンチ”の要領で手のひらに集める。

集めた電流を今度はゆっくりと展開し、“ボルテッカー”のエネルギーが円を描くように構築されていく。

『全身から電撃を出せるんだろ？後は教えた“雷パンチ”みたいに手に集めんだよ。楽勝だろ？』

『弧を描くように電撃を造るんだ。エネルギーを変形させるのはそんなに難しいことじゃないさ』

カイルが目覚めるまでにミゲルから教わった“雷パンチ”とマティスから教わった“エネルギーの変形”。
二つを組み合わせせて造り上げたのは電撃の光輪。

「“ボルトチャクラム”！！」

盾のようにライトの右手から出現した光輪が、上空から飛来する“シャドーボール”を受け止める。
バチバチと放電する光輪とシャドーボールがお互いを削り合い、勢いに押されたライトの体が僅かに後退する。

「っ！やああああっ！」

しかし渾身の力で“ボルトチャクラム”を振り上げ、“シャドーボール”をなんとか上方方向に受け流すことができた。

「くう……はあつ、はあつ………」

無理に大技を使用したせいでライトの体は崩れ落ちるようにして倒れ、滝のように汗を流しながら呼吸をする。

ライトが倒れたことで彼を支えながら戦っていたルリはようやくそのことに気付いた。

「な……！ライト君大丈夫ですか！？」

周りの警戒と牽制で全くライトに注意を払っていなかったため、気付くのが遅れてしまったのだ。

慌ててライトを助け起こそうとするルリ。

それと同時に、ライトとルリの前にふわりと何かが降り立った。

美しい鮮やかな紫の毛並みに、二股に別れた細い尾。四足のしなやかな体のポケモン、エーフィ。額の宝石が妖しくも美しい。

素早く双剣を抜くルリの隣で、ライトは息を整えながらも確信した。

「シャドーボールを撃つたのはあなただね………」

「ええ、君が頑張って弾いてましたね。子供なのによくがんばりましたね」

穏やかな物言いだ、言葉の裏にトゲがある。

「子供はこの場にはふさわしくない」と言われているのだ。ライトもルリもムツと眉をひそめた。

その様子を気にせず、エーフィは二人に背を向ける。

「皆さん、戦いを止めてください」

あまり大きくはない。だが、よく通る高いその声は、盗賊達の動きをピタリと止めてしまった。

「……え？」

あまりにも出来事が急すぎて頭が追いつかず、二人は疑問符を浮かべるしかなかった。

ミゲルやミメット達も突然止まった戦いにキョトンとしている。

だが、いち早く状況を把握したらしいマティスがこちらに向かって歩いてくる。

「お前……もしかして盗賊団のボスか？」

盗賊達を一声で鎮めた者。頭領である可能性は充分である。

エーフィは妖しげな笑みを浮かべると、ゆっくりと口を開く。

「半分正解ですね」

その答えに、マティスは舌打ちをする。

正解、つまりこのエーフィは盗賊団にとって重要な存在ということだ。これではカイルがわざわざ別行動をとった意味がない。

しかし半分、という言葉が妙に引っかかった。

そんなマティスの様子を見てエーフィは笑う。

「半分、というのが気になるんですね。確かに私は盗賊団を率いています……ボスではないのですよ」

エーフィのすぐ後ろに、屈強そうな数人の盗賊団員が並び、それを見てマティス達はやや距離を取る。

「私は彼らを率いて戦うリーダー。本当の頭は彼らをまとめ、行動を決定するのが役目です」

つまり頭領が方針を決め、エーフィが実行するといった所か。それを聞いてマティスはニヤリと笑みを浮かべる。

「なんだよ。つまりボスはマスコットってことか？」

今の話で形だけのリーダーということを認識し、鼻で笑うマティス。しかしエーフィは気を害した様子もなく、やれやれというように目を閉じて溜め息をつく。

「いけませんね、話だけで判断されては。お姉様は私の知りうるポケモンの中で最も強く、美しいポケモンです。あなた方のお仲間は無事ではすまないでしょうね」

「……」

マティスは驚きのあまり目を見開く。カイルの存在がバレてるとは思わなかった。しかも、それを知ってこの場にいるということは、よほど頭領の実力を信頼しているのだろう。

「……………ん？お姉様？」

横からミメットが先程の言葉を思い出し口にする。

「ええ。この盗賊団のボスは私の姉です。あなた方程度の実力ではお姉様には勝てませんね」

「残念ながら仲間の実力は俺達の中でも最強だ。見くびるなよ？」

挑発してくるエーフィに負けじと言い返すマティス。

エーフィはフツと馬鹿にしたように笑うと、得意げにこう言った。

「大剣使いのカイル　彼でもお姉様には勝てませんよ」

村長の屋敷の中は質素　悪く言えば地味で、あまり物がなかった。

一階にポケモンの気配はなく、二階に上がったカイルとアツカだったが、予想外にも階段を登ると同時にポケモンに出くわしてしまったのだ。

「お前が頭領か？」

カイルが素早く身構えながら、目の前の水色のポケモンに問う。

そのポケモンはエーフィに似た容姿で水色の体毛、顔の横に垂れた青い毛が特徴的なグレイシアというポケモンだ。

「あら？退屈で下の様子でも見て来ようと思つてたら……お客様を呼んだ覚えはないんだけどね」

特に驚いた様子でもなく、カイルとアツカを交互に見るグレイシア。そんなグレイシアにカイルは躊躇うことなくカーディナルを突きつける。

「さつさと答える。お前は盗賊団の頭領なのか？」

ナイフの切っ先を向けられたグレイシアだったが、怯えもせずナイフをまじまじと見る。

「へえ……可愛いナイフね。よければ譲って欲しいくらいだわ」
「……………」

何故だろう。会話にならない。カイルの苦手なタイプだ。

押さえ込んで脅した方が早いだろうか　などと考えていると、不意に目の前のグレイシアが笑った。

「油断大敵、よ？」

突如、グレイシアの両脇から二体のポケモンが現れ、カイルは反射的にカーディナルを振る。

高い音が鳴り、ナイフと刀が競り合う。しかし刀は一本だけではない。

「ごわすっ！」

カイルを狙うもう一方の刀をアツカの甘白髪が弾く。

なんとか二つの斬撃を凌いだ。が、二人は目の前の存在を忘れていた。

「氷の礫」

視界を覆う無数の細かな氷塊。

無防備にそれを受けてしまい、カイルとアツカは吹き飛ばされてしまう。

「ぐっ……」

「痛いでごわす……」

痛みを無視して起き上がると、グレイシアが得意げな笑みを浮かべていた。

隣には二体のリングマが腰の刀に手を添え、こちらを警戒している。

「ふふっ、自己紹介するわ。この盗賊団の頭領、ファーナよ。かかってくるなさい、大剣使いのカイル」

「……！！何故名前を知っている？」

「さあね？勝てたら教えてあげる」

ファーナの挑発的な言葉に、カイルは行動で答える。足に力を込め、全力でファーナ目掛けて飛び出した。

「望むところだ！」

依頼49：盗賊団の頭領（後書き）

・ボルトチャクラム

新しいライトの技です。電撃で円を造り、それを投げたり盾にした
りできる便利な技ですね。

強力な技なんですが、ライトがへばってるせいでシャドーボールを
防ぐのが精一杯でした。

更新遅くてスイマセン(´▽｀)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4886h/>

jokers

2011年3月21日20時03分発行